二十四輩順拜圖會

後編

始

嗚嘑懋哉此擧　聖祖已寂五百餘年其東關
北陸之靈躅赫々乎斯存唯其有之在人之目
睫也披閱焉者雖身未動座足未踏地猶遍巡
拜於披自爲念報之助此擧實懋哉前篇已上
木後篇將刻乞餘一言因卒書冠其端

文化六星次己巳冬十月

浪速　寶明　題

二十四輩順拜圖會後篇目錄

○武藏國之部……壹頁

淺草御坊
淺草高龍山報恩寺
法然上人吉水の菴に法を說給ふ
生野の天神の事
御手洗の池に鯉を取る禮拜杉の事
龍返の寶劍
淺草の一家
信夫藤太梅若を擲
花子梅若の說
天川山明福寺
西光院
おむくの尊像
築地御坊
龜子山善福寺
藏王權現の感

○下總之部……三拾九頁

中戸山常敬寺
一谷山妙安寺
一谷妙安寺
屈旋山阿彌陀寺
極樂山西念寺
横曾根聞光寺
大生天神
飯沼鯉魚を供するの由來
花嶋太郎兵衛が宅

雁嶋の由來　大高山願牛寺　牛木の由來
新堤山弘德寺　高柳山弘德寺　新居山稱名寺
玉日宮壽像　高榮山法得寺　野田院宗願寺
古河御城　佐河野法德寺　鷲高山勝願寺
高柳山光了寺　法滿寺
○常陸之部……六十二頁
西木山光明寺　小嶋山三月寺　三月寺の舊地
佛名山常福寺　筑波山大御堂　歸命山如來寺
大師流名號　馬槽大師　大學堂正行寺　大蛇解脫
板敷山　稻田山西念寺　笠間光照寺
外森山唯信寺　法喜山報佛寺　廣林山眞佛寺
德池山信願寺　法王山善重寺　長嶋喜八が宅

御堂寶滿寺　筒井極樂寺　鳥栖無量壽寺
富田無量壽寺　巖船山願入寺　猶原山上宮寺
小壷山阿彌陀寺　大門山枕石寺　鳥食山西光寺
久米願入寺　畠谷山覺念寺　王跡山靑蓮寺
玉川山常弘寺　信照山壽命寺　額光山善德寺
毘沙幢山照願寺　金澤願入寺
○陸奥之部……百三拾三頁
寶池山蓮生寺　明惠上人の傳　證性上人一族成佛を感ず
福嶋康善寺　綾和稱念寺　擔釜明神　瑞岸寺　松嶋寺
松しま　石森山本誓寺　冠蓮の尊像
彦部光照寺
○出羽之部……百五拾三頁

吉水山善證寺　六郷眞光寺
○下野之部……百五拾五頁
鹿崎山慈願寺　粟野山慈願寺　高榮山法德寺
稻木山觀專寺　華岳山安養寺　花見岡親鸞池
妬婦毒蛇と成て後成佛の由來　高田專修寺　宮村御舊跡
○相摸之部……百七拾九頁
千津山弘德寺　臥龍山永勝寺　茫拇天神
五明山最寶寺　龍頭山善福寺　勸堂
勸山信樂寺　歸命堂　河津善福寺
箱根大權現　聖人堂
○甲斐之部……百九十八頁
阿彌陀街道御舊蹟　正永山善福寺　眞木山福正寺

等力山萬福寺　等力山萬福寺　御堂光澤寺
○駿河之部……二百六頁
阿部川　熊谷山蓮生寺
○遠江之部……二百十四頁
普法山善勝寺
○參河之部……二百十五頁
吉田御坊　濱松善生寺　吉田高田御坊
寂光山勝髮寺　稻荷山淨妙寺　野守本證寺
太子山上宮寺　桑子山妙源寺　柳堂勝蓮寺
樂命山如意寺　照高山願照寺　高取專修坊
○尾張之部……二百二十八頁
羽塚山無量壽寺　小林光明寺　西派御坊

東派御坊
小田井西方寺　七寶山聖德寺　圓通寺
河畑勝寶寺　光明寺　小牧西源寺
河野善龍寺　日比野運善寺　河野榮泉寺
河野妙性坊　奥村了專寺　西方寺
○美濃之部……二百三十七頁
河野西德寺　河野稱名寺　河野西入坊
河野安樂寺　河野專光寺　澁谷西方寺
足近西方寺　竹鼻西岸寺　河野專福寺
金足山萬福寺　福嶋永壽寺　光雲山安福寺
八幡山聖蓮寺
○近江之部……二百四十七頁

寶福寺　西方寺　天神護法院錦織寺
近松御坊
○山城之部……二百四十八頁
山科御舊地　蓮師御廟　西派御坊
東派御坊　日輝山永福寺
○攝津之部……二百四十八頁
溝喰佛照寺
○河内之部……二百四十九頁
戸森山專應寺　福井山慈願寺　松谷光德寺
玉手山安福寺
○大和之部……二百五十四頁
惠日山立興寺

○備後之部……二百五十四頁
山南光照寺　常石寶田院
○伊勢之部……二百五十五頁
專修寺御門跡

以上

二十四輩順拜圖會後編

●武藏國

上野國厩橋より江戸日本橋迄
行程二十五里

○上野より直に下野下総常陸の方へ巡拜する時は武藏國を歸路に殘せり今爰に記するは上州厩橋より武藏國江府淺草報恩寺へ巡拜し夫より東の方下総に到り後に江戸表に出て築地御坊善福寺等へ參詣するの樣子を記せり

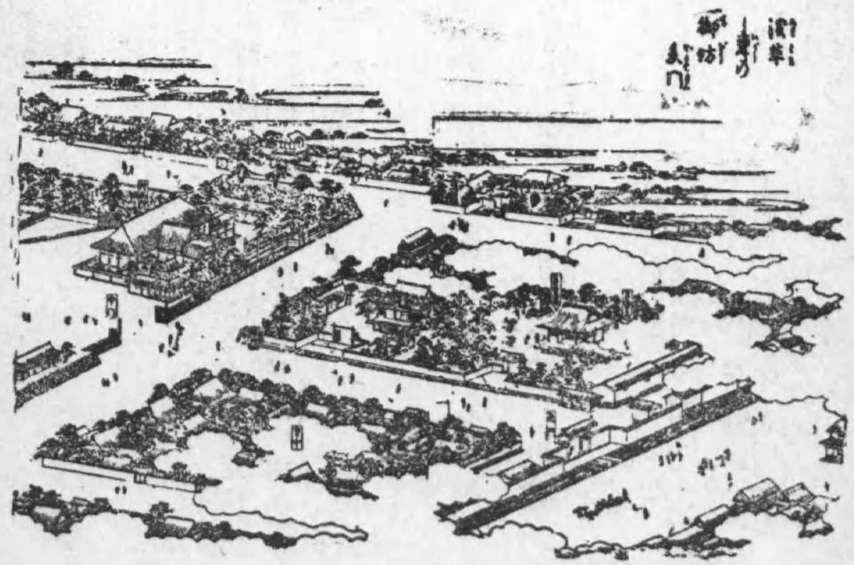
淺草御坊　江戸淺草にあり通して淺草御門跡と稱す

東本願寺御門跡御坊所なり本山より輪番加番の僧衆を來らしめ高貴の旁に旨を伺ひ事を辨じ兼ては關東の門末を教示せしめ給ふ堂宇巍々として京師の本山に次り

○本堂二十五間四面左に皷樓右に釣鐘堂正面唐門惣門の内坊舍三十六ケ寺有○御門主參府あらせ給ふ時は先當御坊に御着到あつて御登城成し給ふ其御格式最他に超勝せり

或は高家の御館へ御巡參上野增上寺等御佛詣には前後の警固非常を禁しめ嚴重也報恩講御引上御法事には本堂內陳の莊嚴艶麗にして御門主出仕あらせ給ひ院家御連枝の住侶內陣の左右に列座有御堂衆列座の僧達は外陣に附座して誦經勤行し給ふ衆僧數百人結界の內に參勤有て其行粧嚴重たり府內近邊の道俗は勿論都て關八

淺草東の御坊表門



州の諸人參詣群集して大堂に溢れ廣庭に充滿せり

其余高貴大家直參の使者の出入門前に車馬を連ね獻上の音物さながら堂中に山を築がごとし

高龍山報恩寺　東派院家　同所にあり

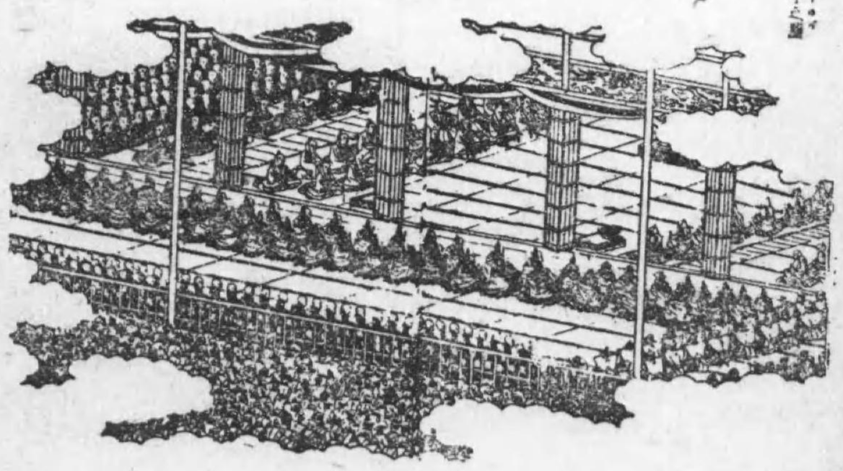
謝德院と稱ず本堂十二間四面塔中十三坊太子堂　左の方にあり

○開山は性信上人なり抑當院は高祖聖人上足の御弟子

淺草御坊　淺草高龍山報恩寺

二十四輩第一飯沼性信上人の造建也性信上人俗姓は大中臣常州鹿島郡の人なり幼名は惡五郎と呼べり（後與四郎と改む）大力無双勇猛强勢にして心性狠戾也曾て禮法に不拘順讓の心なき荒者なりけるが元久二年の春年十八歳にして諸國武者修行と志し國々を巡行せしがゆきくて紀州熊野權現に詣ふでけるに其かへるさ都に至り適東山

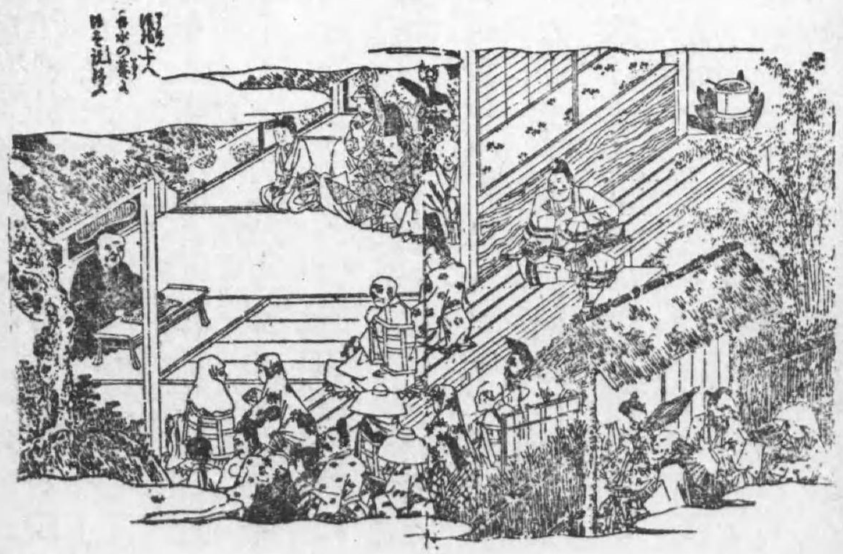
御法事之圖



吉水に參詣す其頃法然上人吉水の禪坊に於て本願他力の妙要を說せられ彌陀超世の悲願といふは十惡の凡夫五逆の罪人も捨ずして救ひ給はんとの誓ひなれば惡逆の身をも顧ずひたへに如來の悲願を信じ奉り一念稱名念佛すれば決定して彼國に往生せん事更に疑ひ有べからずといと尊くも教化あらせ給ふ聽聞の貴賤道俗門前に市を成し錐を立べき所もなし與四郎椽端に在て聽聞しけるが宿習の善因今爰に顯はれしにや大師上人の教化ひしくと胸に答うゞろに難有尊とかりければ發露涕泣しながら上人の御前に出敬白て曰く我は東國常陸の者にて年來の所爲にはたゞ物の命を殺し人を惱し惡逆のみ業とし佛法聽聞は今日が始めなり然るにかゝる罪深き我等なりとも彌陀の大悲にて救はせ給ふとの御教化賴母敷難有ころ候らへあはれ願はくは御弟子と成してかゝる惡人をも化導な

し給はれかしと其儘髻を伐て堅固の信者と成にけり法然上人與四郎が實ある志を感じ給ひ扨も世に殊勝なる若者かないかに善信坊渠を御坊の弟子になし能々教化をなし給へかし老年の源空に相從ふこともいくばくの年か隨身せん御坊はいまだ年若しゆくすへ弘法の力にも成るべきものならんとのたまひて聖人の御弟子に賜り

法然上人吉水の菴に法を説給ふ

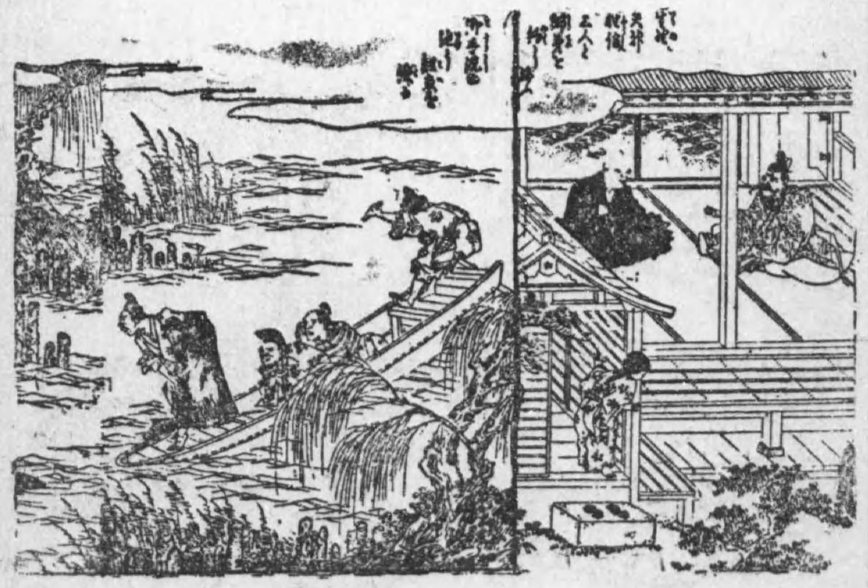


ける 大師上人此與四郎を高祖聖人に附屬し給ふは深き御こゝろの有けるにや果して後年聖人無二の御弟子と成り常隨給仕して關東に殘り念佛弘通のたすけと成り給ふとなん此時聖人御年三十四歳與四郎年十八歳也 高祖善信聖人與四郎に對し重て他力往生の旨趣をねんごろに示し給ひ則法名を性信と號け給ひぬ是よりして性信坊聖人に常隨して暫も御側を放れたてまつらず配所へ趣き給ふ時も坂東へ立越稻田に居を占め給ふに常に御身に附添ひ申されけるが其以前建保二年聖人下總國へ行て御化益ましゝける時當國豐田の庄横曾根郷中に大寺あり年久敷無住と成り朽敗の古院にして誰か修造を加へる事なく葎生ひかさなり狐梟の栖とはなりぬ聖人此荒たる伽藍の空殿を乞得たまひ性信を爰に住院させしめ十字名號を書して與へ給ひ是を本尊こし教化なさしめ給ふされば性信此寺を修補し住院こし專ら眞宗を弘通せり 後年同國大高山に一宇を起立す龍宮寺是也 建保二年より星霜十九年を經て聖人御年六十歳 貞永元年 御歸洛あらせ

給はんとて東國御發足の折から性信坊も御供申登られけるが既に相州箱根山にて聖人關東の方を詠めやり給ひ御泪を浮へ仰けるは我久敷關東に有て衆生を化益せしほどに偏執邪見の族も念佛を信じ今は他力往生の教法專ら壯ん也併我歸洛の後はいかなる妨げありて安心を亂し門葉を迷しぬらんと是のみ悲しく思ふなりいかに性信汝若年の昔より我に隨身し化益を受る事既に三十年頗る眞宗念佛の旨趣に通ぜり願くは我に代り關東に留り門葉の徒に彌他力信心の旨を弘通せば我に隨從給仕したらんより百倍の功なるべしと吳々仰聞られしかば性信とかうの言なく泪にくれて有けるが性信如者を御弟子と思召されかゝる重任を命じ給ふ事生前後世の本望にこそ候へさはいへど只々是より御別れ申さん事の何ぼう悲しく候とて衣の袖を顏に押あてさめ〴〵と歎かれけるが師の命は其

重き事泰山のごとし强て辭せんも恐多し御名殘をしくは候らへども仰に隨ひ東國にとゞまり化益を施し候べしと御受申上られければ聖人殆ど歡びたまひ性信東國に留り候ものならば親鸞が自教導成すに異事なし關東の門葉一圓に御坊に預けさむらふなりとて數〻の什物御製作の聖教なと附屬あらせ給ひしかば性信謹で是を拜受し泪と俱に聖人に引別れ東國へ歸りけり偖も性信坊は下總國横曾根にかへり專修念佛を弘通有ければ道俗歸依參集し門前に市をなす爰におひて性信佛閣を建立しいよ〳〵宗風を壯んにせんとて其地を求むるに幸なる哉飯沼といふ廣き江有て四方の景色尤勝れたりとて性信此江沼を埋む事數十町其中に佛閣を營立し都の聖人へも其趣き仰上られければ聖人甚御喜悅あつて則寺號を報恩寺と下し給ふ性信此佛閣におひて弘願眞實の教法專念稱名の行業を說

弘め給ふに貴賤道俗參詣群集し歸依信仰する事聖人の此地に座して教導あらせ玉ふに異ならず眞宗の繁榮日にまし壯ん也と見ゐたり（寺記に曰建保二年下總國横曾根に造立し高龍山報恩寺と號すと云云）○爰に奇異の事有けるは貞永元年の夏性信上人此横曾根の古院に歸り晝夜他力念佛を教化有しかば道俗つどひ來りて聞法隨喜せり然るに或夜衣冠うるはしき老翁一人諸人退散の跡に殘り性信上人に謁して云やういかに上人我は此沼の傍に在所の生野天神なり師此地に來り彌陀の本願を說悟し給ふにより予も日夜諸人に交り來て師の教法を聞侍べる是ひとへに我幸也と歡びに絶ず自今予を弟子と成し給へ予又御身を師と尊び申べし我本靈を祠廟の裡に崇くして假に貌を現じ來れば今より已後は姿を現せずして詣ずべし猶毎歲正月には禮式として鯉魚二尾を献すべし是を以て師弟の印をなし假令千代を歷ども變る事有べからずとて性信上人を拜し出行給ふと見ゐしが形は幻のごとく消て見へざりき性信坊奇異の事に思はれ曾て人にも語らず後日の音信を待たまひける然るに其翌天福元年正月十日の夜の事なりしが生野天神の社人以下五六人同夜に不思議の靈夢をなん蒙りける其樣は天神彼等に告て曰く横曾根性上人は濟度利生の聖者なれば予



師弟の約を結べりされば師を尊敬するの驗に青陽の嘉物として此社有んかぎり今年を始め毎歳定例として鯉魚二献を性信上人へ送るべき也明日御手洗の池に網して鯉魚を取獲て横曾根へはや〳〵献上すべし努々此事違ふべからずと告給ひけり

靈告を蒙りし社人等五六輩同夢を感じ各恐感の思ひを成し里人にも語り聞せ神勅

炳焉たる上は等閑にすべからずと彼御手洗の池中へ網を入しかば夢想に違はず忽其長二尺の鯉二献を獲たり扨は天神の示に違ざりしと此鯉両頭を叺に入社人等各々相伴ひ性信上人の御坊へ持參し神勅靈夢を委しく演舌しければ性信上人聞せ給ひ偖難有天神の賜ものかな予先に此約諾を蒙りし事あり是偏に聖人の御勸化普く濁世末代に至つて利物偏増し給ふべき驗ならん愚凡の我身何として神の師範と成べきは恐れなきにあらずといへども神慮の深くましませば辭せん事もなか〳〵に恐れありさればこれより後御契約に隨ひ師弟の禮を受べき也と彼鯉魚を受納有て上人よりは鏡餅を一重此鯉を入來りし叺に納め天神へ捧け奉れとて送り歸させ給ひけり是を禮讓の起りとし今既に星霜を經る事六百年一とせも欠る事なく毎年正月御手洗の池網を入れば長二尺の鯉魚二獻彼網にかゝ

らずといふ事なし是正敷神の然らしめ給ふ所也と尊くも難有けれ即此鯉を叺に入社人里人これを守護し今の報恩寺へ送獻ず報恩寺これを納め例のごとく鯉を入來りし叺へ性信上人の木像に具へたる鏡餅一重を入て歸し奉る生野にては此鏡餅を天神の檀上に七日備へ奉り其後細にはやして氏子の者へ與へ侍るとぞ又報恩寺には此鯉二尾ともに上人の木像へ備へ置後是をこまかにきりて參詣の諸人に與ふ事寺例也

○報恩寺百有余年以前多賀谷が妨難によつて江戸淺草へ引移り横曾根飯沼の古院は聞光寺と號けて今に兼帶所と成れり性信上人の木像此横曾根聞光寺に有が故に右天神のやしろより献上の鯉を木像に備へて夫より江戸報恩寺へ送りきたる也毎年正月十六日此鯉魚を割て參詣に分つを鯉開きとも鯉割とも稱じて江戸中の門葉群集し爭ふて割肉を受る凡六百年の今も此禮式闕事なしまことに類ひなき異靈世こぞつてこれを尊ふとなむ

○生野の天神の社より鯉魚を性信上人に獻じける後かの社の前なる御手洗の池の邊りに杉の樹あり此杉の下へ毎朝曉天に麗しく衣冠したる翁來つて報恩寺の方に向ひ暫く禮拜して去る事時にして數年を歴たり社人始めの程は心も付ざりしがいつしか見咎めて怪しと思ひ忍びやかに跡に付て歸る所を見てければ彼翁天神の社檀を押開き入ぬと見へて失給ひぬ社人大に恐れて是まがふべくもなき神躰の性信上人を拜し給ふ成べしとて此杉に注連を結ひ廻し禮拜杉と號す又伏拜みと稱し今に崇め尊み奉る

○傳說に曰く延寶六年の春天神の別當大生寺病死せられしが其後住の僧我强にし報恩寺へ鯉魚を送る事本寺と末寺との作法に似たり此儀止めなんとて古例に肯き調進の儀なかりければ俄に彼僧の熱病を煩ひ怪異のごとくそゞろに譫言をいひ出て正氣なし然に正月下旬其所の名主内記といへる者並に弟喜右衛門天神の靈告を蒙りけるは舊例のごとく青陽の嘉式報恩寺の上人に献進すべし天福の昔より一とせも怠らず我師へ贈る嘉物なるに當年始めて是を闕事は我心に叶はず故に別當をば狂死させんと欲すはやく鯉魚を献せすんば汝等も横難遁るべからずと怒りの御聲にて告給ふと見て夢は覺たり兩人大に驚き別當大生寺にて社人

里人等談じ合せ其夜御手洗の池に網しければ約したるかごとく二尾の鯉魚を得たり其儘舊例にまかせ報恩寺へ送り定例調ひければ別當の病ひ忽快氣し諸人いよ〳〵天神の靈異高祖聖人性信上人の高德をおそれみ其已後献鯉の禮式を正しく相勤る事怠りなし

○性信上人貞永元年より下總國横曾根報恩寺におひて眞宗念佛弘教し給ふに遠近の道俗歸依參集し聞法隨喜し他力往生の宗法專ら壯ん也就中其德行比類なくして種々の奇特多かりける建長二年の秋夢想の感あり一人の化僧きたりて性信上人に告て曰く奥州信夫郡土湯山に汝が前生の骨あり五根一株の松をしるしとせりと性信夢覺めて思へらく我年頃奥州を化導せんと思ふ志あり是必此因緣の引く所ならんと既に奥州に趣き土湯山に入て尋ね求むるに果して一ツの塚ありて五根一株の松あり性信是を穿ち掘みれば白骨顯然たり夢想の違はざる事予が因緣の地なるべし空敷すべからずと爰に一宇を營み念佛門を弘通すべしとて一寺を造立し法得寺と號せ

しめ專ら專修念佛の弘通有ける今は臨濟宗の寺と成り光德寺と名く性信建長文永の間に四ケ寺造立せり所謂相州かまくらの法得寺上總國藻原法得寺下總國佐河野法德寺今此法得寺なり○爰に證智比丘尼こて信心堅固の禪尼ありたりしが正元の頃性信上人自像を造り是を證智尼に附屬し報恩寺の住侶を讓り夫より十有余年を過て建治元年性信上人行年八十九歳七月十七日念佛三昧に住して

性信上人の息女也とぞ高祖聖人の御弟子

大往生を示し給ふ○報恩寺數百年相續し二千余石の領田ありしに多賀谷太夫といふ者此所領地を押領せんと樣々妨惡を爲しほゞに寺を此江府淺草へ引うつして靈跡を相續し横曾根の舊地を聞光寺と號る事は委く前にのべたり此故に今横曾根の古跡を報恩寺村と號く二千石の領地は多賀谷に奪れ今は武家の所領と成れり　生野天神聞光

寺の記は後卷下
總の部に見ゆ

宗祖親鸞聖人眞像　報恩寺第一の靈像也本堂左りの檀上に安置あり聖人六十三歳御自作の影像にして世に關東御紀念の尊像と稱す

○性信上人嘉禎元年の春上洛あつて高祖聖人に謁し申され東國にたひて宗法日々に盛んに門葉月々に增益し信心決定のともがら彌增に多きよし言上されしかば聖人聞し召され夫ぞ予が生涯のよろこび何事か是に如んと御喜悅かぎりなし干時性信數日滯留の後本國へ歸りなんと其催しにおよびけるがさるにても再び聖人と別れ參らせ遠く關の東に歸らん事のかなしけれあはれ今一度聖人を御供申關東へ御下向なさしめ奉らんとさま〳〵願ひ申されけれども此時聖人御老年に有せられ御經廻のたぼしめしあらざりければ性信御坊關東に有りて化導なし候上は又親鸞が下向なして何かはせん我にかはりていよ〳〵教化たこたり給ふなと聞へさせ給ふにぞ性信今は詮方なく衣の袖を絞りさめ〳〵と泣たまふ聖人宣ふやう愛別離苦は忍土の習ひ會者定離ある娑婆の境界なれば形身を參らせ侍らわんとて性信の逼留の間に自御壽像を刻ませられ此影こそ親鸞なれ關東の門侶末代の紀念なりとて性信に授與したまふの尊像なり願誓記には七十五歳の御自作右には拂子を持左りに珠數を持たまふ御頭卷はなしと云々　○靈寶品目教行信證六卷　高祖聖人御制作御自筆性信上人へ附屬

○九字名號　信心觀喜の名號といふ左右に高祖聖人性信上人の御影あり御眞筆なり　○十字名號　高祖聖人の御筆報恩寺開闢の時此名號を本尊とす○御繪傳四卷　傳文本山第三世覺如上人御筆畫は康樂寺第二代淨賀法眼筆○佛舍利　五色にて五粒あり雷神是を奪んとす故に聖人自ら筆を取咒を書付給へば其後は敢て怪事なし其咒に曰く　飛　阿陀伽鬼奢帝慮法然上人より親鸞聖人修多光蘇陀摩抳御附屬の佛舍利なり　○三部經　弘法大師御眞筆　○九條御袈裟○善導大師御影　唐畫　○法然上人御影　御自畫　以上四品法然上人より親鸞聖人に御附屬○二十四輩記一軸　如信上人御筆　○天神名號　尊朝親王の御筆　○六字名號　法然上人御筆　○六字名號　蓮如上人御筆　○六字名號　後陽成院の御宸筆○六字名號　弘法大師御筆　○龍返寶劍　由來次に記す　○又高祖聖人より性信上人へ御附屬の什寶左のごとし○高祖聖人笈　箱根にて御別れの時笈の中へ種々の器物御染筆の書籍等を納め

て性信上人へ授與し給ふ　○聖人御珠數○御團扇○御刀四股といふ名作なり　○御巾着此巾着は聖人御別れの時御腰よりはづし給ひ性信上人へ與へ給ふとなん二重臺の金襴中に蓮肉具玉錢四穴あり和銅五珠貸錢至和なり　○聖人御眞筆性信上人へ御附屬の御書二通○聖人御所持の御茶入○松風御茶磨以上二品聖人の御愛器　○鎌倉にて一切經授考被遊候時將軍家より聖人へ御寄附の二品也○御長刀雀割といふ名作なり

○龍返の寶劍長六寸七分　寺說に曰高祖聖人より性信上人へ附屬の寶刀也性信上人鹿嶋明神へ詣する道に霞が浦三又の渉りを船にて越給ふに俄に風波雲を犯し雷電鳴はためき船すでに覆んとす船中の諸人大きに恐れ啼叫ぶ事限なし性信上人思へらく是我懷中の寶劍を龍神得たく欲する故ならんと即此寶劍を水中へ投じ給ふに忽雲晴風收りて船は難なく着岸せり然るに下向の船中又此三またを越給ふに忽蛟龍形をあらはし頭上に彼寶劍を戴て船端に來り性信上人に是を捧げける性信希代の事にめで給ひ龍返の寶劍と號け給ふと

う

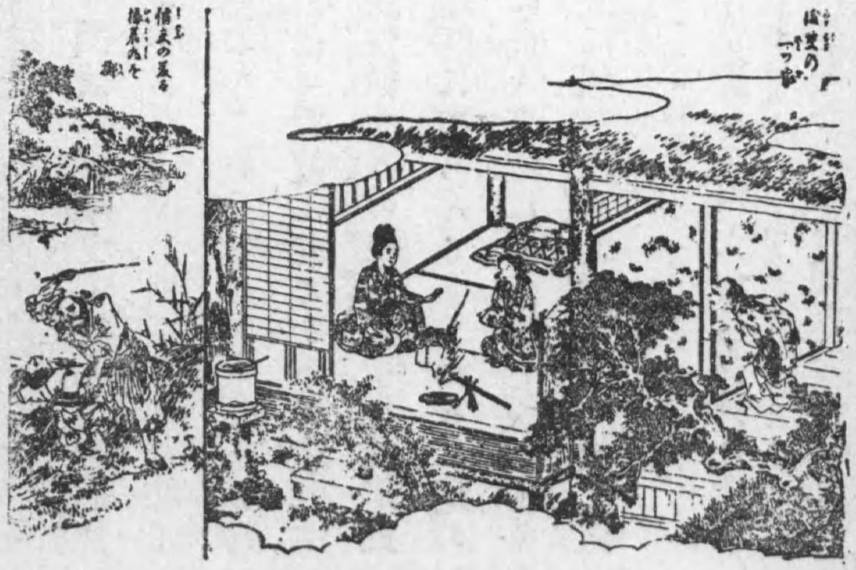
○或記に曰武者修行の士あり報恩寺の門前に居睡りし飯沼より惡龍顯れ來り彼者を呑んとす干時士の懷中より短劍飛出てこれを防ぐ惡龍恐れて水中へ逃去りぬ性信門内よりこれを伺ひ見此釵を所望し竟に飯沼にくゞり入て惡龍を駈出せり惡龍は此ところを遁れ去りて常州三又の水中に隱れ住む其後性信上人の息女證智比丘尼此釵を懷にして彼三又を渉りけるに船既に覆らんとすしかるに尼の懷中より釵をのづから飛出て水底に飛入卒然にして船しつかなり尼歸るさに再び此所にして龍蛇頭上に釵を戴來り尼に返す故に釵の名とすと云云當院什寶數多あり本山代々の壽像古筆古佛等ことゝくはこゝに畧す

○金龍山淺草寺は豐島郡淺草にあり本尊は正觀音坊舍四十一區五重寶塔あり推古天皇の御宇當寺草創有しが朱雀院天慶五年平公雅といふ人武藏國司たりし時當寺觀世音の靈夢を感じ奉り信仰の余り七堂伽藍を造立し田園數多寄附せられけ

るそれより以來歴代將軍家より修造の儀執行給ひ寺領等も給ふ毎附屬し月十八日觀世音の緣日なれば貴賤の群集する事たぐひなし江都第一の繁華本朝無双の靈場也

○淺草の東に明王院といへる寺に姥が池といへる有往有此庭昔は此邊人の住る家居もなく草深く繁りたる武藏野の原なりける此野中の一ッ家に老たる婆とまた年籠りたる女と只二人住けるがこの婆恐しき嫗にて行くれたる旅人を止め石のまくらあたへて臥さしめよく寢入たるを伺ひ頭の上へ大ひなる石を落しかけ打殺して旅用のもの衣類迄も剝取ける

淺草の一ッ家



爰に一人の旅人有此野原に行くれて宿るべき家居もなくいかゞはせんと見るほどに彼れ一ッ家の有ければ嬉しく思もひ足をはやみに歩行けるがいづくともなく笛の音の物哀れに聞ゑへけるを耳をかたふけ打ちきけば此の笛にて和歌を誦したり

「日はくれて野には臥とも宿かるな淺草寺のひとつやのうち」

旅人不思議の事に思ひつゝも此婆が家に立入て宿をかりぬ婆は待もふけたる事なれば心よくもてなし彼石の枕をあたへて臥せけり旅人は笛の音の歌の心のいぶかしくとれもひかくれもひつゝ寢られぬまゝに起出て臥所をかへて伺ひけるに夜更て彼婆しすましたりと悅び兼てかまへ置たる大石を旅人の枕のほとりへ落しかけたり旅人是を見て大におそれ足にまかせて走り出二里斗も遁のびたれば今はよも此所までは追來らじとて一ッの堂の有る内にかけ入て暫くまどろみける夢にその容貌いとけ尊き天童一人現れ給ひ我はこれ汝が日頃信ずる淺草寺の觀世音也けふの災難を救はんと笛の音にて示せしなりと正敷看て夢は覺ぬ旅人奇異の思をなしいよ〳〵信心膽に命じ觀世音の御名を間なく唱へ終に危き難をまぬかれける扨しも彼老婆は積る惡業の已が身に報ひ來るとも露しらずして旅人と見るごとに押ころして財寶衣類を奪ふ事かずもしらず舒明天皇の御宇三月十日とかや年の程二八計りの其かたち麗しき兒一人唐織の衣を着くれないの袴をつけ此の一ッ家に宿りをもとむ婆これを見て心の内よろこびに絶ず年來い

くばくの旅人を止めぬれど布の衣麻の袴の外かゝる見もしらぬから錦を得たるためしなしいかなる福分のめぐり來て此雅兒の只一人婆が庵に來りけるやと常よりも殊にもてなし己が娘を出して給仕せしめたり此女年はまだ十五の春秋を經てかゝる人氣稀なる一ッ家に生立ぬれど岩木ならぬ人間の身にしあれば此兒のあてなる貌優にみやびたるありさまのやさしきをみてしより忍ぶ山しのびてかよふ路もがなと戀のみ坂のふみわけかねて獨りおもひに沈みけるこれなん

「思ひあへぬ心より猶さきだちて涙のしるはこひ路なりけり」

と詠し歌の心ばへなるらん小夜更る頃此女稚兒が臥戸に忍び入とても思ひに死なん身の君ゆへとだにしらせなばよしや命のをしからじ聞せ給へとゆり覺せば此方もさすが袖ぬれていなにはあらじ稲妻の光り待間の契りぞと石の枕をもろともにしばしは夢を結ひける老婆はかゝる事の有ともしらず今は雅兒もよくいねぬらん打ころして衣裝を剝んと例にたがはず大石を兒の臥たる枕の上へ情なくも押落し紙燭を取て立よりみればありし雅兒は何地へ行しやかげもみへずいとをしみ生し立たるひとりの娘石に打れて死居たりこは淺ましなどしてか此所に臥居て此有さまには成りたるぞや去にても雅兒を遁せしこそ安からねる女の仇思ひしらせんとて家の隈々さがせども只蛛の巣燕の糞のみ有て人影の見へざれば外の方へかけ出尾花かきわけすゝきを亂しあなにくや爰にも雅兒の居らぬよとて又家の内へ走り入空しき女が死體を抱上げ無慙なりける身の果や末頼まれぬ老が身の旅人の命ちゞめ奪ひ貯へし財寶は娘ひとりの料なるぞや今は中〳〵仇となりかゝるかなしみを見事の淺ましやと聲を限り泣けるが涙盡て血の色をなし倒れ臥して喚きけるが寢るともなくてまどろみける其夢に霄に宿りし雅兒の正敷も現れ出汝惡行を積事須彌よりも高く罪業の深きまた滄海も尙及ばじ女の非業に死したるも如來の方便我こそ淺草寺の觀世音なりと告給ひ忽金色の菩薩と化し西の方へとびさりたまふにおどろきて夢は覺めたり有がたくも尊ふくもたとへて云はんやうもなしかゝる不思議を目下に見し上は忽一念發起して年來我手に殺せし旅人の死骸は家の傍なる池水の底へ沈めたりしが娘が亡骸も又此池へ葬そのみぎはに座をしめて亡人の靈魂を祭り食を斷事二十日余り終に此池中へ身を投じ水の定に入て終りけりされば後人婆が志を哀れみ此池の側に祠を建又一ッの寺院を造立し母子と旅人の亡跡を吊ひける是を武藏野に荒たる野寺とはいひ傳へぬ白河院の御製に

「むさし野は霞が關やひとつやの石の枕や野寺有てふ」

かくも詠じ給ひたる古きものがたりにていにしへのさまもたもひはかられぬ今の明王院は彼野寺の跡なりとかや

隅田川の岸のほとりに梅若の塚印の柳、鏡の池、木母寺等あり鏡が池のあたりを淺芽が原といへり梅若丸の事跡未詳謠曲あるひは淨るりの狂言綺語に作りなして其名高くかたり傳ふるといへども其正しき說におひては未聞或人の曰梅若

は人皇六十二代村上天皇の御宇吉田少將維房朝臣といひし人の公達なり此少將維房和漢の群書に廣く通じ詩歌管絃にまた妙なり妻女あれども子なく其妾柳の局が腹に一男子あり松若となづく維房の妻若葉の前妬心深く柳の方の籠せらるゝをねたみ其子松若が世嗣たらん事を恨みいかにもして失はばやと晝夜心に謀計を工みける然るに少將は帝の勅命により陸奥國の任にまいるとて下向せる道にて近江なる野上の里に宿りしが此所の遊君花子と云ねるにちぎりをこめ一人の男子を出生せり是を梅若と呼り若葉の方心中にいよ〳〵憤りねたむといへども更に色には出さずして結句花子梅若の母子を愛しみ柳の局をへだて松若を失ひ梅若に世を嗣せばやなど欺きければいつしか柳の局と花子の方其中むつましからず互に心の及をみがきける若葉の前此ありさまをみて心歡びます〳〵花子母子に惡計を進め松若丸を失はんと手術區々なり柳の局かくては我々が命もあやうかるべしいかにもして少將の任滿て歸洛し給ふ迄母子が命を全ふせんと外戚の家臣簗田三郎と計つて松若丸を叡山へ登し又ひそかに此山をも忍び出津の國の惣持寺に忍びてゞおわしける柳の局は北白河に閑居し此難を逃れんとす去ほどに光陰のうつり行事弦を放れし矢よりもはやく少將維房十二年の任も滿てことしの冬は上洛有べき催しなれば花子の方思ふやう松若丸の行衛さへ知れざる上は梅若こそ吉田の家督たるべしと歡ぶ事限りなし此時梅若丸十二歳雅きこゝろにもつら〳〵此頃の有さまを念し見れば兄松若丸の行衛しれざるを幸に我

を世繼に立んとて若葉の前と心を合せ柳の局を追給ふ母うへの心の内こそうらめしけれ所詮此所を忍び出父朝臣のおはします陸奥とやらんにたづねゆき父にまみへて我心中を申上父君の聞召入れ給はゞ法師とも成りなんと只ひとすじに思ひつめ頃は貞元元年彌生の空三日の月のかたふく頃住馴し館を迷ひ出させ給ひけるは長き闇路の門出也と後には思ひ合されたり爰に信夫藤太とて奥州へ通ふ人買あり世渡る業も品多きに明暮雅き童女を勾引陸奥へつれくだり金と山て身を奢り罪を何とも思はざる嗚呼の者成けるが東國へくだるとて粟田口の代際にて梅若丸の迷ひ勞れ休ひ給ふに出あひけるが天の賜と心に歡びいかに御少年何國よりいつくへ行とて夜深きに此山中にはおはしけるゞと詞をやはらげ尋ければ若君うれしく我父君の陸奥におはしますを尋んと此所まで迷ひ出たりあはれ彼地の傍まで召ぐして給はれかしと聞へ給へば藤太彌心歡び幸なる哉我も陸奥へくだるもの具しまいらせんといざなひてあづまの方へ急ぎける行々て三月十五日といふに武藏國隅田川原に着たりけり梅若丸は踏もならはぬ旅の長途に行勞れ今は一足も歩行れず草わらに臥し轉ひ給ひけるを情なき藤太大きに怒りにくきおのれはさはかり云甲斐なき身にてあらば陸奥の遠き國へ下るべしとは思はぬ筈なりそも都より此所まで我にいくばくの勞をかけしぞや汝が歩ずて我いつ迄か爰に止らん此後の懲しめに手なみを見よと杖ふり上げてりう〳〵と打けるは無慙ともなか〳〵云はんやうなき梅若丸怒りの涙を流しやれれ下

郎の身として少將殿の子なる我を杖にて打たるこそ奇怪さよ免しはせじと腰刀引ぬき給ふを藤太飛かゝつて刀もぎ取大膽なる童子打殺してくれんものと再び杖追取て丁々とつゞけさまに二三十杖打けるは無間焦熱黑繩の呵嘖もかくやと痛ましけれ川を隔て里の人々あはれ何者にもせよおさなきものを見殺すはやうなしとて小舟にさほさし漕渉れば藤太是を見て若君を打倒し跡をも見ずして逃たりけり里人やう〳〵に舟を漕よせ岸に上りて梅若をさま〴〵に勞はれどもはやとときれてせんすべなし哀れさ限りあらざれば涙ながらに空體を川岸に埋み一本の柳をしるしに植跡ねんごろに吊ひけるさても母の花子は梅若丸に別れしより悲しみの思ひの火胸を焦し今は心もうゞろに物ぐるはしく都の方を吟ひ出泣つ笑つ狂ひける隅田川の川岸につきてけるが一本の柳の下に里人集り僧を請じ手向の回向なしけるを此狂人亂れ心にも見咎めていかなる人の手向ぞや我も東にたもひ子のゆくゑのすへを問んとて爰迄あくがれ來りしなりあら心ありげなる御吊ひや候ふとさめ〳〵と泣居たり里人の中に粟津太郎富藤といふ者物狂ひの有さまをみるに若や死たる少年の所縁の人にあらざるやと人買藤太が杖の下に命を落し此所に葬りし始め終りを物語れば此物狂ひ色を變へ扨おさな子の父の名は聞給はずや富藤答てされば最期の其際に父は吉田の少將我は梅若丸よとて終にはかなく成り給ふ物狂ひが尋る子こそ其梅若にて候よ是は夢かや淺ましやとて大地に其身を投打聲のかぎり泣けるは哀なりし次第也導師の僧花子をいさめて汝たとへ兩眼を泣潰し涙の血にて此原草は染るとも幽魂得脫の種とはならず歎きをとめて眞實に念佛回向せんこそ誠に母の恩なるべしと勸め給へば此理に發起してみどりの髪をはらひ幼名の龜壽と呼しを以て妙龜貞壽尼と號し隅田の川岸淺芽原にかすかなる菴を結び口稱三昧の行者となり厭穢欣淨の思ひより外更に他なく見へたりし或時妙龜尼柴の戸を開き庵の外面なる池水に我影の憔衰たるをうつし見てはかなき世の動靜の瀨て早く穢土の迷倒を離れ淨土の快樂を受ん事かぎりなき本望ならめと辭世の歌二首を短冊に書て池の邊りの松が枝に結び終に此池へ身を沈め永く此世を去りにけり其歌に

「妻琴の調をそへて聞ゆなり迎の雲をまつの下蔭」

「淺芽生にをく白露のたま〳〵殘るべきかは人の世の中」

里人其志しをあはれみ其所に塚を築き一箇の廟堂を營立てこれを妙龜堂と呼び尼の姿を寫せし池を鏡が池と稱すとかや

天川山明福寺　淨土宗　淺草より三里　下蒲田にあり

當寺は高祖聖人御歸洛の砌頻に道俗の請し奉りけるゆへ暫く此所にて御教化ありし芳趾也とぞ

○本堂本尊阿彌陀佛○親鸞上人御眞像御自作別堂に安置

○聖徳皇御木像聖人御自作也別堂に安置

江戸を出て下総に越る街道は千住草加越谷柏谷杉戸幸手栗橋迄十六七里武藏の地なり此所に武藏と下総の境利根川の大流あり俗此川を坂東太郎とよべり是より下総の中田に至るこの二十四輩順拜には街道より南の方坂東太郎の川下を渉り下総の市川に至り關宿の城下に越るなり委敷は下総の部に著し記す

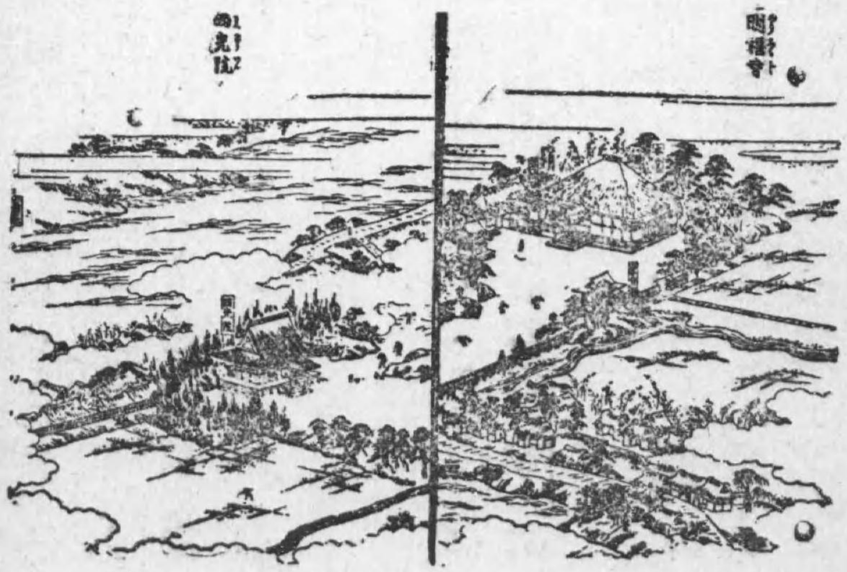
○是より以下西光院善福寺等の舊跡は順拜の歸路にて再び江府に入て參詣すべき寺院なれど國分の例に隨ひ此所に緣記を記し順路道筋に至りては寺號と行程のみを記す初卷山州山科及び東近江大津近松寺等の例のごとし

西光院

眞言宗　武藏國二郷半の内木賣河戸村にあり

當寺の境内に別堂有おむく堂と名く高祖聖人の眞像を安置せり毎月廿八日毎に開帳し香花燈明を備へ念佛す諸宗ともに群集し殊に祈願を込る時は諸病を平癒し靈驗寔に新たなりとて諸人の信仰淺からず○傳に曰當初當國の野田といへる所に親鸞聖人の眞弟西念坊一宇を建立有て聖人御自作の壽像并西念坊の木像を安置せり是

を長明寺と號然るに第三世西祐房の代建武の亂に寺を破却せらる此時西祐の伯父西光院に住す故に二軀の木像を西光院へ持來り寺邊の深田に埋隱せり年を越て世の中靜謐に治りし頃聖人の木像を埋置し田地のむくゝと動めきけるにゝ住侶心驚き其地を掘て見れば二躰の木像靈然と現れ出給ふ誠に奇異の尊像地中よりむ



くゝと顯はれ給ふ所なればとて俗唱へて是れをおむくの像と稱し奉る其後野田長命寺第四世了順房信州より來て此二軀の像を乞求むといへども聖人の像は靈驗あらたにましゝて諸人の信仰深きが故惜みて是を返し與へず當寺にこゞめたてまつり西念坊の像のみを長命寺にかへしたりとぞ聞へし

築地御坊江戸築地岡坊は西本願寺御門跡御坊所たり通して築地御門跡と唱ふ

本堂二十五間四面皇太子堂右の方にあり　惣門の内僧坊五十八ケ寺○當御堂の粧麗巍々堂々として東國に冠たり京師本山より官僧を撰ひ當坊の輪番たらしめ

關東の末流を提轄しすべて門徒の輩をして宗法を守らしむ御門跡參府あらせ給ふ時は當坊に入らせられ御門下の僧徒は申にも及ばず江府の貴賤隣國近村の老少男女日々に群參し恭敬渴仰の感涙に

袂を絞りぬ御門跡東叡山增上寺等の御佛參には前後の行粧巍然として諸人目を驚し御通行の道筋に門徒の僧俗肩を推袖をつらね拜禮の式實に夥し殆開山聖人御在世に減ずる事なし諸侯方の使者車馬門前に群連して市を爲り且御法事御修行なし給ふ其ありさまの嚴なる談ずるに語なし　當山坊舍の内長に命寺といへるあり即ち高祖聖人御弟子了源法師の裔也といふ

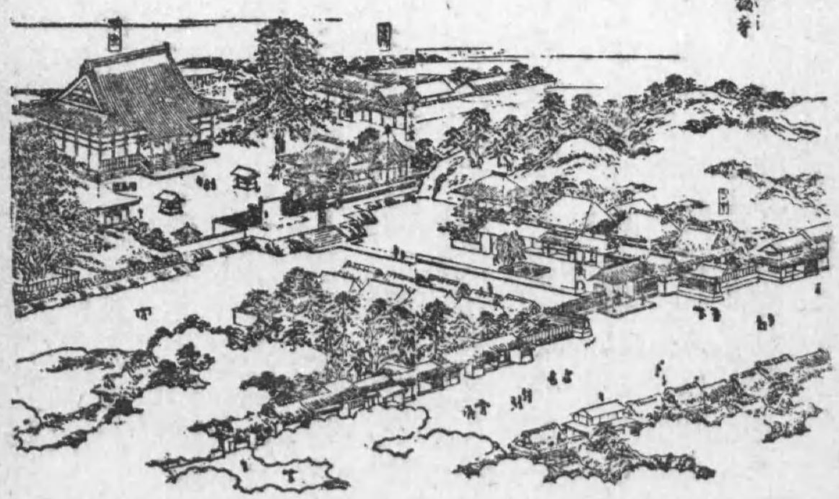
築地西の御坊

○三緣山增上寺は芝に在立す淨土宗にて人皇百一代後小松院の御草創開基は西譽上人關東十八ヶ寺擅林の惣本寺也忝くも御廟を鎮め奉り諸侯太夫の參詣市のごとし七寶を以て堂宇を銪金銀を鏤め莊嚴す寺中坊舍三十四ヶ寺所化の寮數百箇天下無双の靈場なり

龜子山善福寺　西派院家　江戸麻布にあり

亀子山善福寺は關東七靈場の隨一にして聖人眞弟六老僧の第六了海碩德の遺跡也本堂本尊阿彌陀如來惠心僧都の御作也開基堂了海上人の像を安置す坊舍十三區廣庭に大なる銀杏樹あり當院の境内廣大にして殊さら繁花第一の地なれば豪家高商數百軒甍を並べ建連れり此邊すべて當寺の領地なりともいへり○夫當山の開祖了海上人といへる其俗姓凡ならず鳥羽院の苗裔左大臣信實公の息男なり信實公東海に放たれ民間に下りて武藏の幽邃にありて年を經給へり一子なき事を憂て藏王權現祈誓一七日の丹誠を抽ずるに其妻室夢に白布を呑むと看て即ち懷孕せり竟に延應元年六月十五日一男子を產り名けて松若と稱せり七歲の時夢の告によつて實相寺範賢律師の許に至りて出家たらん事を願ふ範賢此兒を敎示修學せしめて名を了海と呼べり此了海博識多才にして三密瑜伽の行法に通達せり又叡山に登り靜榮僧都を師とし四敎圓融の理を究め中道實相の觀に明かなり其後

麻生善福寺



故郷に歸り父母の年齡ようやくたとろへ了海に値事をよろこび爰にこゞまらしめんとすこれにによつて了海弘興の基趾を求めんがために藏王權現の社祠に詣してこれを祈るに不思議や天より白幡降下り木の梢に掛れり了海其ところに至り見るに一宇の古院ありこの善福寺是なり干時一人の老翁忽然と顯はれ告て曰く如何了海汝を待事年久しく此精舍は弘法大師開闢ある所にして眞言密乘の勝區也今幸に住持する者なし爾此院に止り有緣の法を求めて末代弘度せよ必濁世濟度の知識に値事あらん予は是牟尼の變作藏王菩薩なりとて立去給ひぬ了海大に悅び即此寺に住職し朝夕說法怠る事なかりけるが藏王菩薩の御示し末代の要法を弘通爲べき知識は何人にやあらんと思ひ煩ひ日を送りけるが爰に高祖聖人の敎化都鄙に普く濁世末代の善知識なる事を聞く扨此聖人に謁し弘法の樣を試んと既に聖人に謁し奉り即高祖聖人に向ひ三密加持六即止觀の法を以て問難するに聖人答へ給ふ事響の音に應ずるがごとし漸深理の說に及で曰く爾がいふ所誠に尊とし心蓮心月一念三千高き事は高けれども濁世末代の衆生これを行ずる事能はず無戒無道の僧俗是を觀ずるの機有事なしかるに今彌陀超世の本願他力念佛の眞宗は末世相應の要法にして凡夫直入の眞敎也是則釋迦出世の本懷彌陀弘願の密意なれば汝よく思惟せよと嚴に悅せ給ひければ了海忽に一念發起し即聖人を拜し奉り尊重偈仰なし師弟を約して日夜聞法の益を蒙り信心領納せしめ申されきされば了海身を終るまで此靈場善福寺也にして眞宗を弘法する事怠りなし○佛光寺實祿に曰了海上人は元應二年正月廿八日八十二歲にして寂す武藏國阿佐布善福寺と號す延應元年誕生二十四歲の時祖師圓寂云云○高祖滅後十六年弘

安元年四十歳の頃興正寺に入第四世の寺務と成り永仁五年願念誓海に寺務を讓武州麻布に下る（此時五十八歳）元應二年の春正月化緣の薪つきて廿八日即生後念の素懷を遂給ひけり（以上大谷遺跡錄に是を正し載す）○了海自作の像を開基堂に安置す毎年十一月三日に新敷盤に此像を入湯を以て洗ひ再び本座に居へ置彌陀經を讀誦し參詣の諸人に赤飯濁酒を與へ廣庭にて相撲をこらしむ是了海上人の遺言也と云云（○都て麻布七郷の町民とも此了海堂を修補し氏神のごとく信敬す故に堂前に鰐口繪馬など掛りたり）○享保の記には高祖聖人當國行化のとき當寺に入給ふ了海坊聖人に歸依して御弟子と成り聖人に了海の扶を得て爰にとどまり弘法あらせ給ひ御杖の木を地にさし給ひけるに（此杖銀杏の樹にて）逆に生じ枝葉四方に布茂り老木と成り今に存在す了海永仁二甲午中冬上旬第六日寂せりと（建仁元年辛酉林鐘十五日出生す）筆記せり遺跡祿に是を正して享保の記誤多しとて佛光寺の記祿を以て證とせり私におもへらく當院寺說のごとく開基堂の廣庭に銀杏樹ありは聖人のさし給ふ御杖の生したる事世に驗し人こゞつて是を稱讃す然る時は享保記にいふごとく聖人此院に入御し給ふ事强ち誤說とも云べからずしかれども了海上人の年齡入寂の年曆佛光寺の記祿と大に異なりいづれか是なりとせん後學これを糺せ　○什寶聖德皇の御木像御自作八字の名號等を安す

○泉岳寺は芝高輪に有曹洞宗江府三ヶ寺の內也開基門菴和尙當寺の義士四十七人の廟堂あり

●下總國

中戸山常敬寺　西派

下總國葛飾郡河邊の莊關宿領野方深栖鄕中戸村にあり

西光院と稱せり關東七箇大寺の一にて高祖聖人の御孫唯善上人の遺跡なり（唯善上人は高祖の御息女彌女の御方法號覺信尼公の御息男にして聖人の御直孫なり）御影堂十間親鸞聖人

御眞像は唯善上人の御作或は當山第四世善榮の作とも云　阿彌陀堂の本尊は定朝の作なり當山にかぎりて御影堂阿彌陀堂共に備はれり由緣有事なりとぞ什寶には法然上人選譯相傳の御影を藏む法然上人御自畫讃高祖聖人御添書あり

當山の開基を尋れば往時延慶二年の春唯善上人相州に下向し化益あらせ給ふに前將軍惟康深く歸依し給ひ此地ろ七堂伽藍を建立して上人に寄附せらるゝ花園天皇

中戸山常敬寺

茲に於て中戸山西光院の勅號を賜ふ而しより代々法燈をつたへて相續しけるに第十世了照の時に至て兵火のために燒失すこれ天正年間豐臣秀吉公北條氏政を征し給ふ役なり此時故ありて當山を二箇寺に分ち一は越後國高田に移りて兩寺ともに中戸山常敬寺と稱す

一谷山妙安寺　東派　同國猿嶋郡三村にあり

高祖聖人の高弟二十四輩第六一の谷成然御坊の遺跡也成然坊の傳記當山開基の始末審に前編上野國厩橋妙安寺の傳記に載す故に此に記さす三村厩橋の兩妙安寺何れも本末の次第なし　中古所々に移轉すといへども法燈を絶す事なし成然坊はじめ當國一の谷といふ所に一宇を建後に聖人と相議て堂趾を爰に移す故に聖人手づから植給へる松の樹とて近き頃まで尙存せり是を守子の松と稱せり○靈寶は本尊阿彌陀佛の像行基の作或は安阿彌の作ともいふ　同畫像は惠心僧都の筆聖德太子

の尊影は有難も宗祖開山聖人の御作なり其外蓮如上人御筆の六字名號實如證如両上人御筆の御文等あり

一之谷妙安寺 東派 三村と中戸との中間一のやにあり

即成然房住居の地なり當寺は成然房最初建立の所也寺内に成然御坊の墓あり

境内寺領として二千坪近年免許せらる

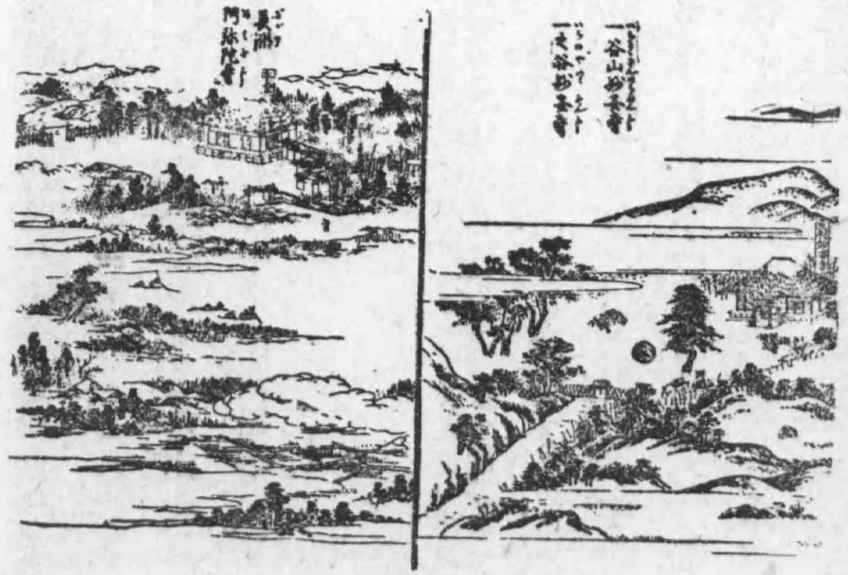
屈旋山阿彌陀寺 東派 同國同郡長洲に有

當寺は親鸞聖人の門弟安了房の遺跡なりいにしへは三

一谷山妙安寺

一之谷妙安寺

長洲阿彌陀寺



論宗にて屈旋龍山稱名院と號し慧鎭法師の草建八世相續し證慧の時に至て天台と成り第十四世安了の時貞應二年高祖聖人當寺へ入給ひしに聞法隨喜して御弟子と成り今に至て眞宗の佛閣とは成れりける○本尊畫像は惠心の筆六字の名號は高祖聖人の御筆なり

○本堂の背面樹林の中に聖人草庵の舊跡及び井水あり

極樂山西念寺 東派 同國同郡邊田村にあり

聽衆院と稱す本堂九間四面本尊阿彌陀如來は運慶の作太子堂には堪慶作の聖德太子の尊像を安置す○僧坊二區あり

宗祖聖人の御弟子二十四輩第七野田西念御坊の芳趾なり當寺はうのかみ上宮太子の來幸し給へる舊跡なれば聖德寺と號して天台宗の靈場なりしが高祖聖人當國行化の御時當院の寺務眞證法師聖人に歸依し奉り御弟子と成り終に淨土眞宗の佛閣とは成れり遺跡錄に云野田の

西念此に來て化導すこれより眞宗の佛閣と成れり其後三世の寺務眞證房元應三年此寺を再建せり故に此寺の記錄に云元應三年聖德寺大勸進眞證猫實門山へ出とせしるせり洪鐘の銘にも元應三辛酉と記せり延寶年中寺號を西念寺と改むといへり○西念房の事前編信州長命寺の下にくはしく記す信濃の長命寺は西派二十四輩第七に列し當寺は東派二十四輩第七に屬せり什寶は聖人眞筆の連座の御影を安置す又西念房の木像を安す眞證の像なりとも云

横曾根聞光寺　東派坊舍二區
同國岡田郡豐田庄横曾根報恩寺村にあり

開基は性信上人建保二年當山を建立有御影堂九間四面

本尊阿彌陀佛は春日の作なり又列祖堂には阿彌陀佛の座像上宮太子の像性信上人の像證智の像を奉安せり抑當山は古へ高龍山報恩寺と號し性信上人教導の靈場なり即江府淺草の報恩寺の舊地にして兼帶の所なり緣起はくはしく江戸報恩寺の下に記す　什寶には親鸞聖人御眞蹟石刻六字名號上宮太子の古像は御自作なり又性信上人自作の眞像あり飯沼天神の社より例年鯉魚を供ゆるは即此御像也　其外俵藥師の石像は弘法大師の作證智比丘自作の像等を安置す

境内の外に不動山といへる山あり毘首羯磨が作の不動尊を奉安せり此山いにしへより聞光寺これを領せり

○太郎兵衛が宅聞光寺より願牛寺へ至る順路絹川のほとり花嶋といふ所にあり聖人自ら作せ給ふ所の彌陀の木像を傳來せり代々大房東弘寺の門徒なりとぞ

大生天神　眞言宗　同郡飯沼に有　別當大生寺

天滿宮性信上人に歸依し給ふ事江戸淺草報恩寺の下に委しく記せ

り天滿宮本地は十一面觀世音菩薩　○祠の前に龍燈の松あり又天滿宮出現し給ひ性信上人を拜し給ひし禮拜杉は華表の前にあり殊更佛法の威力神德の炳焉なるを感ずべきは此飯沼の池なり報恩寺の下に記すごとく例年正月此池中に鯉魚を漁て性信上人の御像に供する事一年も闕ることなし然に近き享保の頃とかや此池の四方に七口の江を堀て池水を分ち落し耕作のたよりとすされば飯沼の水日毎月毎に干潟と成て今は僅なる細江の社頭の下に流るゝを御手洗水とは號せりされ共其流に網をおろせば忽二尾の鯉魚を獲て年毎の供物今に絶る事なしとかや誠に世は澆季に及ぶといへども有難かりしためしなり

雁島之由來

むかし高祖聖人此所に幽栖をしめ給ひ土俗を化益し給ひしに頃し

も秋の最中隈なき月を詠んとてもろ〳〵の御弟子と俱に小舟に棹さし飯沼の池水に浮び出給ひしも實に今宵一輪みてり清香いづれの處にかあると詠ぜし詩のさまもかくなんこいと興ふかく見へさせ給ふ聖人の御側に善性房のおはしけるに向ひて宣ふはこの明月に池上に嘯くろ四面の平湖月山に滿とも謂つべし唯をしむらく

花島太郎兵衛の宅

雁島之圖

は池中に小嶋のひとつあらば殊に風色を増すべきにと仰けるに善性房まことに左にてさふらへといらへして其夜は歸り給ふあくる十六夜の月もゆふべよりもいやましにうつくしく照りうふにぞいざや今宵も月見んとて再び池上に至り給へば不思議なるかな夜前まで漂茫たりし廣沼の中に忽一つの小嶋の涌出て是なん蓬萊嬴洲の靈島ならんかしと御弟子の旁奇異の思ひ淺からずこゝに渡邊周防といへる者あり此嶋の涌出たるを風聞てこは聖人の高德の天地の間に充たるにころとて家に飼置たる雁の鳥一雙を携へて聖人に捧げ奉り靈島涌出の奇瑞を賀しぬ時に聖人かの一番の雁を涌出たる嶋に放ち遣り給ひ且誓して曰く我教る宗法末世に盛んならんには年毎の往來に此に來れといとねんごろに聞に給ふ誠や聖人の妙智人に及せば邦人を化し禽獸に及せば其命に隨ふ六百餘歳の春秋を經れども今に至て來る雁も歸る雁も此浮嶋の上に宿る事かならず一旬ばかり雁の立去に隨ひ嶋も又水底に沉めり奇なりといふも愚也昔往唐土盧山に住る僧に慧といふ大德あり常に鶴を飼て愛しけるに慧死して後其忌日毎には彼鶴必來りて羽を垂觜を叩き終日塚の前に泣けるといへりいづれ高德のいさほしこそ尊けれされども彼は一旦の愛を感じて忌日を吊ふといへども僅に鶴の一生のみなり是は大悲功薫の妙智よりなれる所なれば幾萬秋の末に至るとも更にいにしへに變るべからず佛智方便の洪大なる仰ぐべし尊ふべし

大高山　飯沼の上にろひたる山なり石下大房村倉持村など此ほとりなり

此山は大房村東弘寺の舊地にて高祖聖人の手ずから植置給ふ柳の老樹今に殘れり故に東弘寺を高柳山と稱す

大高山願牛寺　西派　同國倉持村にあり

當寺の縁起に曰く宗祖親鸞聖人建暦二年の春越後國より信濃に至り尚ゆきゝて關の東に化導し給はんとて下総國に來り給ふ然るに當國岡田の郡主稲葉伊豫守勝重と云へるは蓮位房の從弟にてありしほゞに聖人を請じ參らせ懇にいたわり奉りけるが宿善の然らしむる所にや一度聖人の教化を蒙り

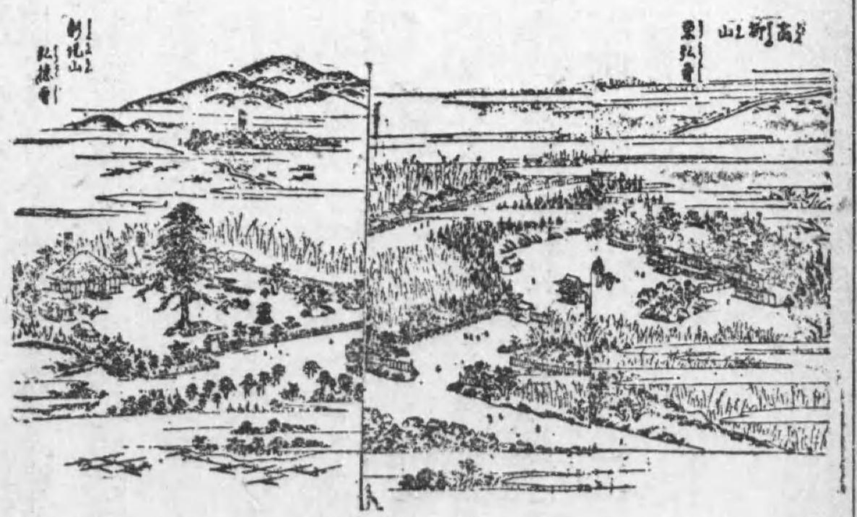
大高山願牛寺鴈島牛木

信心決得して御弟子と成る是を一心房と名け給ふ此一心房本願念佛弘通の爲爰に一宇を造立せん事をねがふ聖人其志を歡び給ひ遂に坊舍を營み給ふに一の牛ありて此寺の造立をたすけ或は巨材を運び或は大石を背おひ人力を助けるが既に其用度調ふ頃おひ聖人彼牛の所在いかにと見給ふに傍なる沼に飛入て台ち一株の枯木となり化したりける　此枯木今尚存せりうつほ舟のごとく長さ二間許ほり込たる跡あり聖人雁嶋御遊覽の折りからこれに召れたりといふ近年大坂江の小嶋の住何某なる人土藏を寄附してこれにおさむ藏に㊟の印あり御船藏といふ　其さま左ながら牛のごとくに見へしかば聖人奇異の思ひをなし給ひ寺院落成の日に及んで扨こう願牛寺とは號け給ふかくて彼寺は一心房へ附屬し給ひ常州稲田へ移り給ふ　舊跡錄にはもと此地は仁治元年の頃性信房の發願に龍宮寺を造立ありしが中頃退轉に及びしに元文年中又もや一宇を再建して是を大高山願牛寺と號すといへり未いづれが是なる事を不知

高柳山東弘寺　東派　同國大房村にあり

當寺は高祖聖人の御弟子二十四輩の第九飯沼善性御房の草創なり善性はじめ周觀と申せし時未聖人に値遇し給はす當國に行脚しける折から國の大守豐田四郎親治の請に應じ城中に逼留有けるが高祖聖人　興法利生の徧き事をつたへ聞即常州稻田に詣で聖人に謁し聞法隨喜のあまり竟に眞宗の門侶と成り給ふ此にたひて聖人法名を善性と授け給へり善性御房の事委しくは前篇越後高田淨與寺の條下に出　去ほどに大守親治なる者も周觀房を招請せし佛因によりて辱くも高祖聖人を倉持村大高山に屈請し奉り專修念佛の行者と成りて良信と法號賜はり善性房前名周觀と俱に無二の御弟子と成りにけり時に貞應元年なり　此良信房が先祖を問ふに桓武天皇十八世の孫にして代々豐田の城主三十三小屋の司にて世に聞へたる武勇の武士なりきされば此時既に高祖聖人此大高山におひて化導し給ひしにより周觀房善性上人御舊跡の徒に退轉せん事をうれへ即一宇の佛塲を建立し眞宗の東方に弘通するの意を以て東弘寺と號けらる爰に貞永元年高祖御歸洛ましますにより稻田山淨與寺を善性上人に寄與し給ふが故に善性上人も又この東弘寺を以て良信房に附屬せられしより良信房當寺の二世に住して善性御房の壽像を彫刻し敬恭崇信して專ら遺法を弘通あり

高柳山東弘寺　　新堤山弘德寺



しかば竟に正應二年七月廿五日法臈一百三歳にして當山におひて大往生を遂給へり其後年を經て寺を此地に移すと云　寶永の記享保の記ともに善性房は豊田治親の法名にして建保六年大高山に聖人を屈請して御弟子と成り常隨昵近せりと記せしかども今遺跡錄に寄りてこれを正す　○靈寶は彌陀佛の畫像聖人御筆金泥十字名號同御筆聖德太子眞影同御筆左右に臣下六人を列す御銘あり　六字名號蓮如上人の御筆　佛舍利三粒　御珠數聖人天臺を歸依ましませし時の御所持なりしを善性上人へ御讓り有し所にして水晶半裝束の逸物也　善性上人壽像二世良信の作　七難毛長さ七間有立五色にして麝香のにほひあり一度是を見れば七難を消すと云信州戸隱山江州竹生嶋も有皆これに同じ　天地開闢の時雨降し籾二粒等也

新堤山弘德寺　東派　同國岡田郡豊田の庄新地村にあり

宗智院と號く高祖聖人の門侶二十四輩第五信樂御房の遺跡なり寺家二坊あり

信樂房の俗姓を尋るに平氏にして桓武天皇の後裔相馬將門の末孫相馬次郎師常東鑑に曰元久二年十一月十五日相馬次郎師常卒す六十七令端座合掌の子相馬太郎義清と云し武夫なり高祖聖人面授口訣の眞弟にて即此地に一宇を造立し法臈をかさねけるに覺如上人東國徑回し給ふ折しも信樂房未存在なりしかば上人即これに入らせ給ひ懇に法義を論談なし給ふ其後第八世蓮如上人も又當坊に寄宿あらせ給ひしいとも尊き靈場なり○什寶は阿彌陀如來畫像高祖聖人御眞筆　御和讃淨土高僧正像末三帖同御眞筆御袖裏と名づく當寺中古炎上の時寶物多く燒失せしに此御和讃もとも火中にありけるがふしぎなるかな少しも損せずして殘りまします今に閉目に燒痕あり

新居山稱名寺　西派　同國結城郡結城の城下にあり

當寺は關東七箇の大寺の隨一にして六老僧の其一也二十四輩第二聖人の御直弟眞佛御房の開基草創の舊跡也眞佛御房の事跡はくはしくは下野國高田專修寺の條下に出

す○本堂本尊阿彌陀如來御長三尺余春日の作　太子堂聖德太子御自作の尊像御長二尺九寸余額は仁和寺覺助法親王の筆僧舍四區あり○什寶には玉日宮御像此壽像は高祖聖人常陸國鹿嶋郡島栖と抑玉日宮と申奉るはもと六角精舍の本尊救世觀音薩埵にておはしますは然に末世女人成佛の結緣を導き給はんがため大慈大悲機見機應の善巧を以て月輪入道兼實公の御息女玉日の御方と示現し給ひ假令に高祖聖人を隨從し給ひしが聖人配流の御時は洛東幽邃の地に世を忍びおはしけるが聖人建曆の頃勅免を蒙り給ひ越後より常陸に渡り稻田に住し給ふ折から眞佛御房の檀越結城七郎朝光玉日の御方の便なき御有さまを深く歎き上洛の砌これをぐし奉りて結城の東なる玉岡といへる所に新殿をしつらひ勞り傳き參らせしが聖人に御對面まし〳〵ともに宏弘の救濟をはかり給ひけるに聖人には貞永の頃歸洛し給ふといへども玉日の御方には尙も吾妻にとゞまり更に利生の光明をかゞやかし終に御歲六十四にて建長六年九月廿五日彼玉岡におひて大往生を示し給ふ靈告の文にまかせ法名を能莊嚴院女身禪尼と號す誠に女人得脫の先達と成り給へる事仰ぐもおろかなるべし其後下野國沖村といへる所に眞佛御房の門徒有て女身堂を營み彼壽像を安置せしが或時夢の御告ありて結

新居山稱名寺　古河御城宗願寺法得寺

城の當坊へはうつし奉りけり又其後寛永の頃准如上人關東御下向の折から此靈像を拜し給ひ自ら玉日宮といふ三字を御染筆ありて御厨子の額に掲しめ給ふ

右は當寺の傳記によりてこれを記す然に享保の記には玉日の御方は範意君と都にとゞまり早世し給ふといふ事實は暫く世を憚り給ふの故にして兵部卿三好爲敎卿の息女朝姫と改名し給ひ關東に下向あつて聖人に隨從し給ひ法名を惠心尼公と稱せしを稱名寺の傳記には女身と號する事尤いぶかし又御法生は建長六年と記せども反古裏の記には弘長三年の春御息女覺信尼公の御方へ御文を送り給ふ御往生は同年九月十八日といへり然れば寺説におひて年歴九年の相違ありと難せり又寶永の記には玉日の御方は實に都にて早世ありて別に三好爲敎卿の息女朝姫といふ御方關東に下り給ひ聖人に給仕し給ふといふ其外寺説において四ケの謬誤ある事を難せり又遺跡錄附翼にも彼壽像の事を疑ひ年歴相違して虛談を傳記せるよし難じ笑り然れども予密に是を案ずるに其寺院の正邪はしばらく論せず六人の御公達の御母堂朝姫君と申せしは即玉日の君の御事にて聖人さすらへの折からは世を憚り給ふが故に改名し給ひ假父をたのみて關東に下向し聖人に隨從し給ひたる事先德の傳記既にあきらかなり其上反古裏の記に親鸞聖人の御娘覺信禪尼御母は惠信御房月輪禪定殿下の御女玉日と申せし貴女也聖人御入滅の折ふしは越後にましまし

けり弘長三年春の頃この御娘御方へ彼靈夢の記をしるし給ひ御文を送り給ふやうをのせたりしかのみならず一生之間能莊嚴の告命豈菩薩の妄語ならんやしかれば御法名の異說と御入寂の年歴齟齬せる事を以てかりそめに彼靈像を以て僞作妄語とするは畢竟其枝末をしつて其根本をうしなへるといふべしかりにも管見の淺慮を以て不可思議なる薩埵再來の靈像を排すべけんや

眞佛上人像 高田專修寺に安置するを胴躰眞影といひ當山に安置するを御首眞佛といへり緣起委くは專修寺の條下に出す

結城七郎源朝光の石塔あり其外靈寶畧之

高榮山法得寺　西派　下野國都賀郡佐河野村にあり但し參詣の巡路を以寺號行程を此所に記すといへども緣起什寶等は國わけの例によつて本國當寺の條下に出す

野田院宗願寺　西派　下總國葛飾郡古河にあり

當院は高祖聖人御直弟野田西念御房の遺跡にして二十四輩第七番に屬す往昔西念房武州野田におひて一宇を造立せしより野田の御房と申すなり當寺は慶長年中の建立とぞ　西念御房の俗姓傳記等前篇信州布野長命寺の條下に出せり西念

寺房の遺跡といふは信州布野長命寺西派下総邊田村西念寺東派江州八幡西方寺佛光寺末寺當寺を合せすべて四ヶ寺也○什寶高祖聖人四十五歳御木像聖人御直作御附屬の木像といふ

因に云同所淨圓寺東派古河より磯部の間に水海村正藏寺東派ともに高祖聖人御由緒の地なりと云

鷲高山勝願寺　東派　同郡磯部村にあり

順性院と號す關東七箇靈寺の其一なり高祖聖人上足の門弟飯沼善性御房創建の芳趾なり善性房の俗姓くはしくは同國東弘寺の條下に出せり

本堂九間四面本尊阿彌陀佛聖德太子御直作　坊舍三區あり

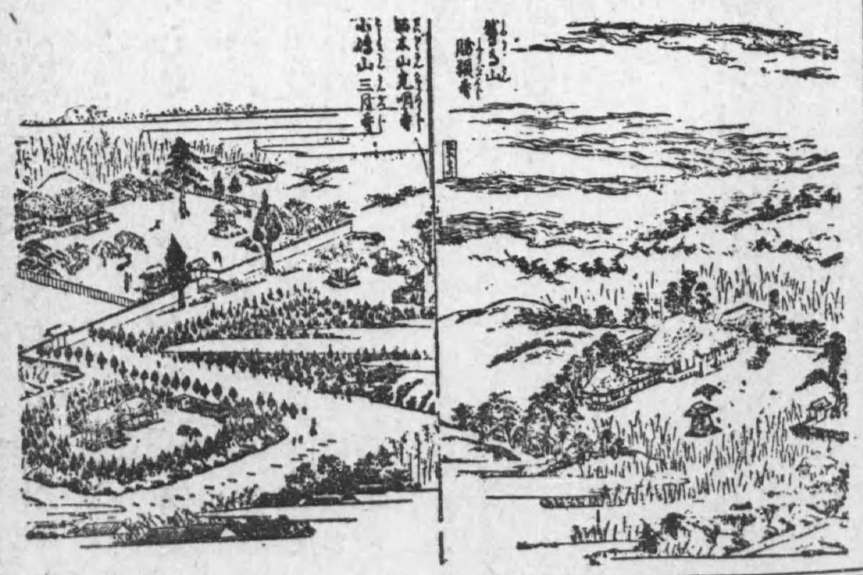
開基善性上人初め大高山東弘寺を草創ありし後又當寺を造立して明性房に附屬し明性房は眞佛上人の門弟也　自ら稻田淨興寺へ轉住ありしが淨光寺兵火のために回祿せしかば再び當寺に引移り幾程なく信州長沼に堂宇を再建し後越後高田に移住せり即歡喜山淨興寺これなり

當寺の相承は開山善性御房二世明性房三世順性房順性房は順信御房の眞弟にして鳥栖無量壽寺の寺務なりしが鳥栖は順慶にゆづり後磯部に移りて佛閣再興し三世の寺務として當寺の中興たり四世善忠五世如慶六世教順壯年の後越後高田瑞泉寺の寺務たり凡かくのごとく相續せり○什寶聖人御自畫左り向の御影と云あり其餘寶物これを畧す

高柳山光了寺　東派　同郡中田にあり

當寺舊天台宗にて武州高柳の郷に在て高柳寺と號せし

鷲高山勝願寺　西木山光明寺　小島山三月寺



が往昔建保の頃高祖聖人御經回の砌當寺に入御ありけるに寺務興悅法師聖人の化益を蒙り聞法踊躍のあまり御弟子と成りすなはち法名を改めて西願と呼給ふ此時よりして寺號も光了寺と改む第五世感悅の時に至つて寺を栗橋へ移し第六世悅信のとき更に此地へ移住すと云○寶物上宮太子尊像　高祖聖人の御作御手に松葉を持せ給ふが故に松葉の太子といふ別堂に安置す其外諸尊の像有

○御堂寶滿寺　西派　銚子の湊にあり巡拜は常州鹿嶋の町大船津より船にて行方大によし○本堂十三間四面本尊阿彌陀如來御首は弘法大師の作にして御體は高祖聖人の御作なり　堂宇すべて魏々然たる莊嚴なり

●常陸國

西木山光明寺　東派常陸國眞壁郡下妻にあり

高月院と號く高祖聖人直弟關東六老僧の內明空御房の開基にして垂人法筵を設け給ひし所の靈場なり○本堂九間四面本尊阿彌陀如來安阿彌の作　開基堂明空法師の像を安置す坊舍二區あり

抑明空房の俗姓を尋るに桓武天皇の後裔三浦平太郎爲繼奥州武衡家衡征伐のとき大に動功有の息三浦庄司義繼の嫡男同大介義明治承四年八月廿七日卒す世に不謂長壽の人なり　の子同次郎義澄正治二年正月廿三日卒す時年七十四　の男平六兵衛尉義村　從五位下駿河守に任ず度々武功あり嘉禎四年正月十日卒す十男あり嫡子若狹守從五位下駿河次郎泰村二男小太郎兵衛尉朝村三男三浦三郎光村四男又太郎左衛門尉氏村五男四郎左衛門尉家村六男五郎左衛門尉資村七男六郎左衛門尉長村八男七郎左衛門尉重村九男八郎左衛門尉胤村十男平六義繼等也　には九男駿河八郎左衛門尉胤村なり延曆年中兄弟將軍家に昵近して其家大に繁榮し殊に時めきけるが寶治元年夏の頃嫡男若狹守泰村謀反によつて一族終に滅亡せり此時胤村は奥州に在けるがこのよしを聞より世の樣の心憂く一門罪障消滅のため出家してありけるを小山判官長村が爲に搦捕れしが東鑑に曰寶治元年六月廿日駿河八郎左衛門尉胤村者在奥州聞一族滅亡之由遂出家之上爲囚人小山太夫判官長村召進之云云　後免れて上洛し

高祖聖人に謁し奉り日々に聞法の利益淺からず歡喜にたゑずして門侶に列らん事を願ひしかば法名を明空と號けたまひ師弟の御契深く遂に聖人に隨ひ當國に下りしが弘法の基趾を開んため此下妻村におひて一宇を建立し即是を光明寺とゞ號しけり永治二年丁酉二月十三日法藹七十三にして終に當寺におひて寂を示す寶永の記享保の記ども に明空房の俗姓を記せども尤誤謬多し今違跡錄附翼集によつてこれを正し筆記す　○靈寶閻浮檀金三尊佛三浦家守本尊　聖人御影御自畫　十字名號九字六字等聖人御筆　菩提樹境内にあり聖人當所小嶋三月寺を造立し給ひ御滯留ましく〳〵ける此所にも一宇を設け御教化あらせ給ひし時この樹を手づから植おき給ひしと云云御歌に「うへ置し一もとの名も後の世をねがへといへるしるしなりけり　其後明空御房聖人の仰をうけて此地に下向なし御舊跡の朽ちなんことをなげきてこの光明寺を建立ありしといふ　柊樹し所也と云其時の歌に「我も又こゝろにつくる罪科を樹にほかこれをりやくすあらはして植るひともと　其外　畧之

小島三月寺　東派　光明寺境内にあり

當院は往昔建保二年仲春の頃宗祖聖人小島郡司武弘が請に應じ此地に下向し給ひ濟度利生の基趾を開き禪房を設けて轉法輪所と成し給ひ同五年正月まで本願念佛を弘め給ひし靈地なり然るに聖人常隨の御直弟釋蓮位蓮位が俗姓は源三位入道頼政の末孫兵庫頭宗重とて當所に居住しけるが建保七年一門右馬頭頼茂謀叛を企て宗重同意あるの沙汰專らなりしかば終に召捕れ既に刑罰に所せらるゝの所聖人是をふかく憐み思しめし渠が命を乞詫び給しに果して免助を蒙り竟に御弟子と成し剃髪せさせ給ひ法名を蓮位と賜ひしより聖人に常隨給仕たこたらず純一無二の從弟たりといふ○或說に蓮位房は源三位頼政の子息伊豆守仲綱が子にして一門誅戮の砌聖人助命を請給ひて御弟子となし給ふとも云是によつて考るに此時聖人御年四十七歳なり未都にまし〳〵て當國に御下向ありし事曾て聞へねば蓮位御房御入門の一事は承久元年より以前に有る然るを一宗の僧侶やゝもすれば聖人左遷の供奉越後御徑回の御供を西佛蓮位〳〵と口拍子に任せ談ずれども誰か其是非を審にするものなし建保七年御入門の傳或は誤りを傳ふるにやのちの識者　師命によつて此三月寺に住し純ら教導ありけこれを正さば甚幸ならん

るが其後蓮位上洛の砌小島丹後入道善下に附屬ありしより法信房善下の子孫世々相續して寺務たりしに中古衰弊に及ひ遂に光明寺

の境内に移すと云

三月寺舊地　光明寺より三四丁新地村へ行道ばたにあり

往昔聖人三月寺を建立有し舊地なり方三十間許四面に土堤を築中に聖人手づから植置給ふ榎二本あり　各三圍餘の大樹なりこの地草創の舊趾なるを以て今に三月寺の持なり

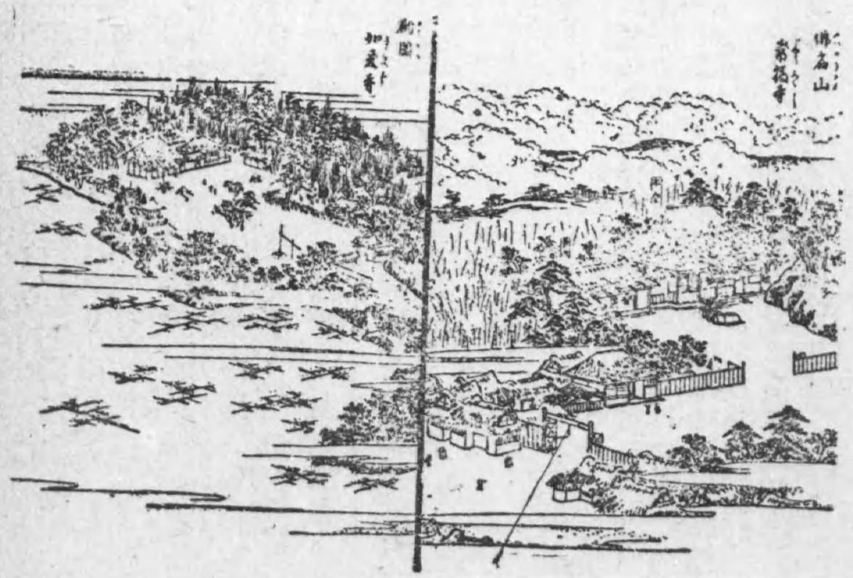
佛名山常福寺　東派　同國新治郡大曾根村にあり

玉川院と號す聖人の上足二十四輩第十八八田入信房或は飯田唯心といふの遺跡なり○本堂御本尊安阿彌の作

八田入信御房と申は舊當國那珂郡久茲の西八田郷の領家にて八田五郎知朝と號す累世武勇の家として殊に知朝當時におひて其譽れ隱れなし然るに知朝宿因の深厚故にや聊菩提の道に志す折から幸なるかな高祖聖人猶原大門の郷御經回ましませしかば直に馳向ふて拜謁なし渇仰の思ひ深くして即出離の要路を問奉りしに聖人殊

に專修念佛の奥秘を懇懃に授與し給ひしかば知朝立所に聞法隨喜して師資の約をなしけるにゑ聖人即入信と法名を號け給ふかくて入信房はおのが屋形を廢毀し忽ち一宇の佛閣と成し八田淨福寺とゑ號しけり其後聖人御上洛の砌入信房御あとを慕ひ登れしが端なく尾州日比野運善寺におひて聖人に値遇し奉り恰も嬰子の母を

佛名山常福寺　柿岡如來寺



得たるがごとく歡事限りなかりしに卒に病起て終に彼寺にたひて往生を遂たりし時に嘉禎元年乙未三月廿八日　かば運善寺の寺務入信房の厚信を以て死前に聖人に謁せし奇特を感嘆し即其木像を彫刻し永く寺中に安置すと云○靈寶念佛往生三國傳來師資相承御影此御影は世に類ひなき靈寶なり聖人御眞筆を以て中には六字名號上には善導源信法然三師の釋文両脇には法然上人及親鸞聖人の御影を畫圖し給ふ其後如信上人是を拜し給ひわれもいざこの數に預んとて其下にみづから御影を畫き給ひしに又其後覺如上人我も此列を外るべからずとて如信上人の御影に對してみづから御影を畫きたまひけり是によつて師資相承の御影とは申也

青磁の花瓶○玉川石此二品は聖人御所持にて入信房へ賜ふ所なり其外之を畧

筑波山大御堂　同國新治郡筑波山筑波町にあり

中禪寺と號す延暦元年德一大士　或曰德一大士は傳敎大師の弟子なりと又云法相宗の碩學德溢大士也と未何れか是なるやしらずの開基にて台宗なりしが弘仁年中弘法大師結界　寺說大師登山の折ふし權現の託宣によつて手づから千手大悲の尊像を彫刻し給ふとぞ今本堂に安置する所の靈像これなり坂東三十三所の一にして第二十五番の札所なり本堂は南面にして十四間四方上に金字の額を掲ぐ

ありてより以來密宗と成れり當院に宗祖親鸞聖人御眞筆十字名號を傳持せり畧記に云聖人當國稻田に御滯留の折から筑波權現夢中に示現し給ふ事しきりなりしかば此にたゐて聖人御登山ましませし權現既に半復まで下山ありてはるゞの來儀を勞ひ給ふ　山の半服に細流あり橋を渡せり來迎橋といふ是即會合の所なりといふ又當山の本道より二丁ばかり傍に聖人御腰かけとて峻巖そびへて上に松柏の茂りし所あり但し此所よりも登る也又男體山の谷間に聖人籠らせ給ひたる岩洞あり又女體山にも聖人權現と問答ありし岩屈ありすべて山上洞穴多くいづれも未社の神をまつれり　此ごき權現の御願望によつて筆を染給ふ所とゞ其外什物聖人權現に謁し給ひし始めたがひに情を通し給ふ二首の御歌等あり　二首ともに聖人御筆

歸命山如來寺　東派　同國同郡柿岡にあり

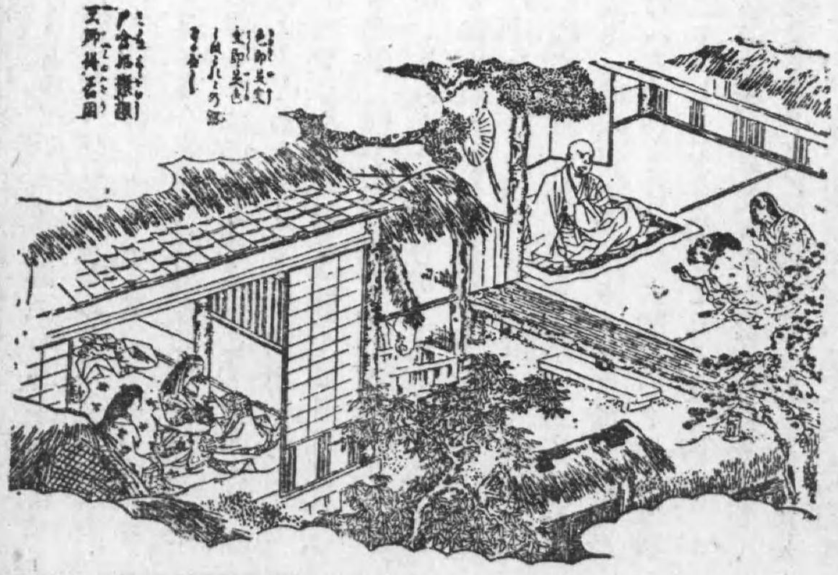
無量壽院と號す僧坊二區

當院は宗祖聖人御造立の寺系にして二十四輩第四南莊乘然御房の遺跡なり乘然房はもと武人にして俗姓は藤原鎌子内大臣の後裔尾

張守親綱こて幼より武術を超練し力あくまで強く萬夫不當の驍勇なり然るに宿因の善業によれるにや舍兄鹿島の神官片岡尾張權守信親鹿島大明神聖人を渇仰のあまり師弟の御契約まし〳〵法名を授り信海と號し給ふ明神の託宣ありしより深く聖人に歸依し奉り念佛の行者と成りしかば親綱もともに聖人の化導を蒙り忽安心獲得して竟に門侶に加はりけり 干時貞應元年なり 其後六年を歷て安禎元年聖人當國信田郡霞浦の海中より光明出現の彌陀の木像を感得し給ひ即其地信田の浮島こいへる所にたひて一宇を建立し如來寺と號して勸化教導なし所ひけるが後彼寺を乘然房に附屬し給ふによつて以來乘然御房如來寺を相續し專ら弘法化益有しいつしか妨難のために此浮島南莊の舊地廢退に及びしを後又今の柿岡におひて再興すこ云云○什寶太子木像春日の作千幅名號法然上人御筆六字名號 高祖の御眞筆大師流の名號といふ傳に云聖人もと筆道を後京極良經公より傳授し給ふ然るに當國御化導の折から笠間のほとり德藏村馬船大師といふは即五筆

和尚の舊跡にしてとに其遺墨あまた所藏せるを以て聖人みづから往て是を見給ひたゞちに其筆法を學びてこれを摸擬し給ふと云誠に普通の御名號とは事かはり其體勢恰も怒猊の巖觸渦騏の流に躍がごとし其妙なる事凡慮の及ぶ所にあらず是れを以て思ふに今時聖人の御眞蹟をみるもの京極流大師流の二體ある事を知らずんば有べからず

因に云彼德藏村馬槽大師といふは往昔弘仁の頃弘法大師當國を遊歷ありしに長者德藏なる者の家を適とし此地に數日を送り給ふ爰に長者が深窓にとくら姫とてことし二八の春深く露に花そふ色の顏ばせ風に亂るゝ柳の髪のいとたをやかなる生たちに長者夫婦が寵愛誠に掌中の珠を愛るごとく更に他事はなかりけり



然るにいつの頃よりか病にそみ醫療さまゞなりといへども露其しるしもなく次第に面痩ていと物くるはしきさまなれば夫婦は大に是をかなしみたとひ千萬金のたからを失ふとも物の數かは彼一人にはかへがたしとひたふる其法を需けるに中にも三折の功を積たる巫醫これを診察して思へらく此症は是外感の所爲ならず心中に深く思ひ勞する事ありて終に鬱蒸せし者なれば必ず其思ふ所の事を叶へんより外に藥石の救ふ術なしとあるに夫婦はいよ〳〵あきれまどひ即傳母の者をして私にこれをうら問しむるにさらでだに思ひに死なん身の死なば問ずとも打聞へんと思ふ折ならば姫はくるしき中よりもをも恥氣に顏を上げ何をかつゝみ侍らんいつぢやより我家に入らせ給ふ御僧をそとかいまみしより思ひのうちにしづみしが人も多きに勿躰なやかりにも佛体を得給ふ御出家に懸想し參らするをろかさよと幾度思ひかへせどもまよひの雲の消やらねば今は戀ゆへ死なん命せめてはそなたに聞ゆると有るにぞ傳母よきに勞はりつゝ頓て夫婦にかくと告しかばあられぬ事とは云ながら寵愛のあまりいかにもして此事を叶へ得させんものと大師を請しつゝ長者夫婦のものあはれ姫が死をたすけ給へと打歎きけるに大師はいと便なき事にたぼしめし則側に有ける楠の槽に自ら御姿をうつさせ給ひこれを授け給ひしが不思議やとくら姫此御姿を見るより忽煩惱の雲霧晴わたり眞如實相の觀念ふかく直に長なる黑髪ををしげもなく切拂ひ正夢尼と號し終に菩提の道に入しほどに長者夫婦もともにみのりに引されて數多のたからを抛布引山といへる高山を切開せ

一宇の伽藍を建立しこれを布引山金剛光院德藏寺と號しとかや其後永延の頃諸堂回祿のたゝりあしが彼の大師の御影は布引の瀧に入らせ給ひ少しも損じ給はざりしは誠に擅者の奇特いちじるし是よりして火除の大師とは申なり

大學堂　同國同郡大增村の東北板敷山のふもと往來の傍にあり

聖人當國稻田にましませし頃府中より稻田に歸らせたまふ道板敷山の本道をよぎて大增村のあなたより若國山の東を通らせ給ひしに思ひもよらず彼山の麓なる深淵より其長三丈餘りの大蛇逆卷浪を押わけて聖人の方にむかひ延々として進みしは身の毛もよだちて恐ろしゝされども聖人少しも動じ給はず徐に歩み寄給ひ儞今出る事何の爲ぞや抑害心を去て善因を求めんと欲するや將更に億劫の惡業をかさねて解脫を得る意なきやと宣ひけるに大蛇忽頭をうなたれ兩眼に涙を濺ぎひとへに渴仰のけしき見へければ聖人かさねて云く夫我佛法にたひては是までなせる諸惡業も改悔懺悔の功

徳によつて忽ち得脱疑ひなしさもあれ儛今霄のうち我を稲田の坊舍に訪ひ來らば必蛇身解脱の法を授くべしとて終に聖人はかへらせ給ふしかるに其夜丑みつの頃女の聲して外面に音なふものありを聖人早くもさとらせ給ひ即扃を開ひてめし入れ給ふに女は泪ながらに聖人の前に額きて妾は元來當國猿子村何某なる者の妻にて候ひしが性質慳貪にして善の道にくらく常に僧尼に對すればいまわしき事どのみ思ひ後世の苦患は露しらで唯生前の愛慾にまよひ夫の愛妾を悪み瞋恚のほむら胸をこがして止時なく終に狂亂して死しけるが多年の悪業一時に報ひ今かく蛇形の苦みをうけ常に水中には住ながら身は三熱にこがされ鱗甲外に堅しといへども百千の毒虫其内に有て肌を啄ばむ事針を以て刺よりもはなはだしあわれ願はくは聖人化益の利生を以て此大苦悩を救ひ給へとなく〳〵懺

悔をなしけるが聖人奇特の思ひをなし給ひ即一封の血脉を授けて云く昔海底の龍女は如來の法を信受して即身即佛の果をうけ又摩羯の大魚は佛の御名を信じ奉り暴心を飜へして善因を得たり是此一封は即如來萬徳の名號及び汝が法名涼光と號す なりされば本師法皇の彌陀尊は煩悩悪業の衆生をあはれみ救はせ給へば汝努々疑ふ

太學堂正行寺

大蛇請解脱

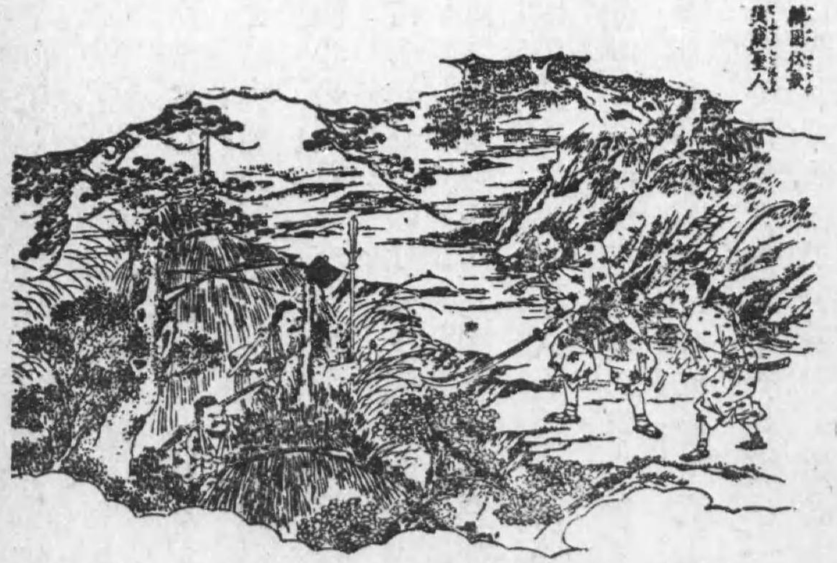
事なく一向一心に深く信じて賴み參らせよ決定往生せんものなり
さあらば報謝の稱名唯南無阿彌陀佛と唱ふべしといふ懇に教化な
し給ひしかば女はこれを頂戴き嬉しげに聖人を伏拜み〳〵何所と
もなく失にけり其後幾程もなく彼淵の大蛇死して水上に浮びしと
沙汰しければ聖人卽かしこにいたりて見給ふに猶かの一封を頭に
いたゞきたり此におひて聖人里人を語ひ給ひ彼屍を土中に埋み塚
を築三日三夜法筵を設けて念佛し給ひけるがかくと聞より諸方の
參詣市をなしてつゞひ來るほどに聖人時こう來れと思しめし大蛇
を緣として無信邪見の者を教化し給ふに眼前因果の理を恐れ彌陀
大悲の深恩なる事を忽に信じ利益を蒙る者數をしらずとかや去程
に今霄滿三夜と云にあたつて不思議なるかな莊嚴瑞麗なる天女來
降し聖人を禮拜し我はこれ彼淵の大蛇なり辱くも尊師の御化導に

よつてすみやかに蛇身をまぬがれ天女の果を得たり順次には淨土
に往生せん事何の疑ひか有べきされば此大恩を謝せんためここさ
らに來つてま見へ參らせり廣大恩德無窮歡喜と高らかに稱して聖
人を再拜しやがて白雲に乘じて立さりぬとかや 己上 正明傳 卽彼塚といふ
ふは大增村の北なる大塚是なり 中古鎌倉の大覺禪師此ところに隱遁すと云 堂のほとりに聖
人植置給ひたる天蓋木といへる大樹ありくに見ゆ 楠の木のと ○什寶六字名號
聖人眞筆にしてかの大蛇に授與したまふ所なりといふ
板敷山 大學堂より八丁筑波の北の尾なり絕頂に富士權現を祭れり登り口に石燈籠有一如上人御腰かけ所也といふ
當山は往昔高祖聖人 時に御年四十九 當國稻田御房にまし〳〵て柿岡等御
教化ありし折から往返し給ふ所の熟路也 此ほとり此山を越さずしては外に往來の通路なしと云
其頃當國那珂郡東野尾といふ所に役の優婆塞が遺弟播磨公辨圓と
いへる修驗者あり 舊は聖護院の御内にありしが智德兼備の人なりしかば佐竹末賢公これを請して祈願所の先達と成せり後には豊前の僧都と

號す　國中山伏の司として末派十二坊を提轄せりこれによつて諸人の尊敬大方ならず固智德兼備の人にて專ら行者の再來とゞ申けり然るに辨圓時に承久三年　聖人の德行廣太にして至り給ふ所は親疎を論ぜす其化益を蒙らざる者なくさながら活如來のごとく尊とみけるを嫉き事に思ひいでや我行德を以て是を排んと我慢の肱をからげつゝ密に此山に登て咒咀の法を修し　今に山上に石の五倫護摩壇等の形のこれりけるがいかなる事にや渠が修する所の法是まで一度も驗なき事はあらざるに聖人の御身に聊障なく壯健にて遠近の差別なく教化のために奔走なし給ふを見て辨圓いよ〳〵害心つのり此頃聖人此板敷山を往返なし給ふを究竟の幸とし眷屬數多かたらひつれ各々刀鎗弓箭を携へ爰の坂道彼所の谷間に伏かくれて聖人の來り給ふ所を伺ひけるこそ恐ろしけれ　山の根のひだりて時の澤といふ所に百八田といへる田地あり辨圓のかたらひし眷屬ども此所にかくれて相圖を待し所也と

ゝ又右てに山上へ通ふ細道あり親鸞道といふ是即ち聖人の往返し給ふ道也といふ　かくて聖人は神佛擁護の御身なれば恰も隱行の術をも行ひ給ふがごとく此山の往返日々に變事なしといへども辨圓が徒曾て遮認むる者一人もなし爰にたひてさしもの辨圓殆奇異の思ひをなし信じ切たる我行法も今更疑ふ所あれば所詮聖人の香刹に行むかひ面對話して其端をも叩ばやと思ひ遂

辨圓伏衆徒窺聖人



に稲田の禪室に訪ひ來りしが聖人左右なく出合給ふに辨圓尊顔をつら〳〵拜し奉り害心忽ち消滅し改悔の心頻にして即あからさまに日來の鬱憤より聖人を害し奉らんとせし事共逐一にのべけるが聖人露驚き給ふ氣色なく見へしほどに辨圓いよ〳〵聖人の高德忍辱慈悲にまします事を嘆伏し益我慢心の畏しき事を恥忽兜巾篠掛をかなぐりすて聖人を三拜し我既に多年修行の功德を以て四海の表に立ん事を思ふの慢心より忽ち嫉妬の魔障を生じ未來永刧惡趣に墮せんとせしにせめては少し善因の據あるにや聖人大德の海容をうけて慈顔を拜し奉る事實に優曇曼陀羅華の三千年の春に値るこゝちにて懸念一時に散じ法德の尊さを仰ぎ奉れば今迄修せし胎金兩部瑜伽三密の功力も何かはせん願くは聖人憐みをたれ給ひ一語片言の示教にも預らば長く門徒に陪侍せんと信心無二の懺悔のありさま聖人奇特に思し召れ則示して宣ふやう夫我眞宗の法たるやたとひ極重罪人たりとも彌陀成佛の本願なれば我身のあやまちを深く歎き一向にたすけ給へと申さん人は誰か往生を遂ざらん而來は報恩謝德の稱名を怠る事有べからずとて即望にまかせて弟子となし法名を明位房證信こう給ひけり（干時行年三十二歳二十四輩第十九番に配當す）係りしより以來聖人に常隨給仕し初の豪相引かへて柔軟慈悲の姿と成り怨に張たる弓の影はいつしか西に入さの月と詠むるこう有がたけれ其後同國松原にたひて一宇を建立し上宮寺と號し弘法化益ありしに聖人御歸洛の後は猶原に隱居して信心堅固に稱名怠る事なくおわしけるが竟に建長三年十月十三日六十八歳を一期とし目出度往生を遂られけり誠や當山は逆心かへつて眞性得悟の善緣を結びたるの靈場なり御傳抄にも順逆の二緣交々なりといへども是偏に

高祖聖人威神最勝の洪徳表顯する所なりといへり

稻田山西念寺　東派　同國茨木郡稻田郷にあり

東御門跡の御懸所にて稻養院と號す往昔高祖聖人二十九歳の御時六角堂救世菩薩の靈告を蒙り給ひしに其後符合あらせ給ふ所の勝地にして十餘年の間御居住ましまし興法利生ありける芳趾也○本堂本尊阿彌陀佛　惠心僧都の作　僧舍三區あり當院は建保五年の春高祖聖人干時御年四十五歳　當國小島郷より此地に移りて閑靜の地に一宇を建立なし給ひ幽栖を占給ふに蓬蒿道を埋み桃李言すといへども貴賤道俗御跡をしたひ緇素老弱法味に引されいつの間にかは所せまで群集をなし聖人を歸依し尊敬する事恰も世尊在世のごとし爰におひて聖人思ひめぐらし給ふやう佛法弘通の本懷既に成就し衆生利益の宿念忽に滿足す是全く當初救世菩薩の告命今におひて符合せりと

て大に歡ばせ給ひ即精舍を命して歡喜踊躍山淨興寺と稱し給ふ其後聖人干時御年六十歳御弟子善性御房に附屬し御歸洛あらせ給ひしかば善性御房即當院を受持し給ふ事數年なりしに惜いかな兵火のために靈場悉く灰燼と成りける程に夫よりして總州磯部信州長沼等へ次第に移轉し今既に越の後州高田に安在すと云今越後高田御坊に聖人御眞筆にて稻田御

稻田山西念寺　笠間光照寺

坊を善性上人へ讓り給ふ二十一ヶ條の掟書と云物あり　かくて淨興寺他邦に移轉せしかば笠間慶養房　俗性は當國の住人源家の子族稻田九郎頼重とて音に聞へし武畧の達人なり然に宿因其時を得て聖人に謁し奉り本願圓頓一乘の要法を聞しより五濁に埋れたる璞玉たちまち六根通を得て連城の壁の光りを發し直に剃髪染衣の姿と成り聖人無二の御弟子と成りしかば俗名を其まゝ頼重房慶善とゞ法號を賜ひけり聖人御歸洛の後は笠間にあつて專ら弘法教化をなしたりけりの子孫深く是を歎き即稻田の靈蹟を再興しこれを西念寺と稱して聖人十餘ケ年安住教化ましませし布金の芳趾を傳持せる事誠に宗祖の忠臣と謂つべし　上來は大谷遺跡祿を以て筆記せり然るに享保の記には稻田御坊は聖人御歸洛の後頼重房に讓り與へ給ふといへり又享保の記及び諸錄入口に傳ふる所は聖人稻田の寓住は十ヶ年の間なりといへるに遺跡錄には十六ヶ年の御淹留なりと記せり姑らく異說をあげて後來の識者を待のみ

○什寶鹿島大明神御寄附の御戸帳　高祖聖人御眞筆十字名號　是れすなはち鹿嶋大明神聖人と御對座の御影なり　聖人御直作の聖德太子の木像以上三品傳記鹿嶋明神の條下に出すれば此に畧す

鹿島井　本堂の前廣庭にあり當年聖人當院に御淹留の折から境内の井水何れも濁りて大に患へさせ給ひしかば即鹿嶋明神七ッ井の内一ッを寄附し給ひたる所の靈水なり其時の御誓ひとて今に毎年六月十四日には井水かはきて鹿嶋へかへるといふ委くは明神の傳記に出す

御杖杉　聖人杉の木の杖を自らさし置給ひしに忽根芽を生じ枝葉繁茂して竟に巨木と成れり惜いかな近年枯はてゝわずかに遺株を存せりかたはらに若生へと

稱す杉の大木あり先年一如上人東國御下向のみぎり植置給ふところ也

三度栗　寺より三丁許南櫻川のむかふにみゆる栗の林これなり聖人越後にましませし時上野が原にうへ置給ふ種を此所にうつし給ふといふ又笠間の庶民小栗二百ばかり聖人に献せしに其内四五顆植置給ひしが三度栗の種にて有けり是聖人の常に栗子を嗜み給ふゆへなりと順信房が草記にみへたり

稻田姫宮　金銀橋を越て大道より西の方にあり素盞烏尊の妃稻田姫をまつるといふ毎年九月十八日祭禮あり

朝姫の墓　又稻田姫の墓ともいふ宮につひて道より東へ入る農家のうらにあり寺說に云く是即玉日の宮の御墓所にて彼姫の侍母池田少將是貞土民に身をやつし此地に住して御墓を爰にうつすとなん毎年九月十八日稻田姫の宮と同じく玉日の宮の御祭禮とて一所にこれを行ふとかや朝姫玉日の宮の御事其說まち〳〵なりといへども既に下總國結城稱名寺の條下に委しく論ずれば畧之

笠間光照寺　東派　同郡笠間の城下にあり

當院に高祖の直弟頼重房教養法師　俗傳西念寺の條下に出すの開基にして專ら弘法教導ありし芳趾なり中古止事なき御方より高祖聖人の御影及び六角堂救世菩薩聖人に告命し給ふ所の御影を自ら畫せ給ひ當院に奉納有しによつて今これを安置すと云

外森山唯信寺　東派　常州茨木郡宍戸の莊山の尾の郷太田町にあり

二十四輩第二十二番宗祖聖人の門弟戸守唯信法師の開基也始唯信房當國那珂郡戸守に於て一宇を營搆し專教化あられしが後師命により河内國に移住して化益せり　阿州讃良郡野崎村專應寺は其の舊跡にして法嗣今に相續すと云　これによつて戸守の舊趾退轉に及しが中頃由緣有て今の完戸大田町にお

ひて再建し　初は寺號を淨安寺といひしとかや　戸守御房の法席を傳持すと云

法喜山報佛寺　東派　同國同郡河和田村にあり

當寺は聖人の徒弟唯圓大德の開基也舊唯圓房と申は小野宮少將阿闍梨禪念房の息男にして大納言弘雅阿闍梨唯善大德には異母の舍弟也高祖聖人御歸洛の後仁治元年十九歲にして聖人の御弟子と成しかば　干時聖人六十八歲　法名を唯圓とゞ賜りけり性稟穎悟にして早く眞宗の蘊奥を極め頗諸弟に勝りしかば大部平太郎これを招請せしに師命あつて辭する事を得ざれば終に當國に下向し此地に弘法の梵宇を興立し是を泉慶寺と號し專勸化あられしに文永十一年　干時五十三歲　上洛の折から所緣に依て和州吉野郡下市秋野川の邊に一宇を營み今の下市立興寺これ也暫彼地に教導し更に關東にくだりておわせしが正應元年再上洛し覺如上人に面謁し奉り同二年二月六日終に下市立興寺に於て寂を示す　干時六十八歲己上大谷遺跡錄によつて記す　其後星霜數經て元祿二年の頃本山より當院の寺號を改報佛寺と稱すとかや

○唯圓房の御事世に傳ふる所を聞に彼平太郎が舍弟平治郎といふ者あり性質勇猛剛腹にして神佛を信せ只已が思ふほどにゞ事を行ひける妻女何某なる者はこれに引かへ明暮後世の事にのみ打歎きて頃しも聖人當國を御化益まし〳〵ければ人しれず時々法筵に詣て深く御教化を信じ參らせ誠に二心なき信女なりしかば聖人奇特に思しめされ御眞筆の名號を授與し給ひしに平治郎の見ん事を憚り常に櫛笥に入置朝暮に是を念じ奉りしが平治郎かくとはしらで妻女のふるまひ心

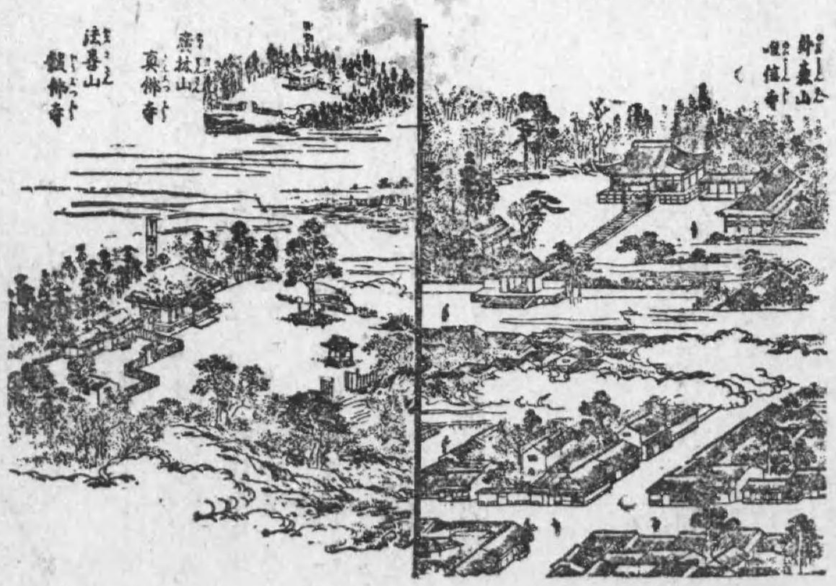
得ず我に忍びて夜中何の所用かあらん是必ず外に通へる密夫の有にこそと一途に思ひつめ所詮討すて思ひをはらさんものとわざと霄より出かわして村はづれの木隱れに妻女のかへるを待わびけるこそ恐しけれ妻女は又今霄しも平治郎他行なれば私に聖人の御坊へ參詣し御勸化を聽聞し何心なく歸りけるを平治郎夫と見るより詞もかけず拔打に切付しが肩先より乳の下まで切さげられ憐れむべし妻女は一刀の下に息たへたり平治郎はしすましたりと獨歡び其儘宿所へかへりけるがいかなる事にか妻は恙なくて其上うらみたる色目もなく立出て平治郎の面をつく〴〵まもり今霄は何とかせさせ給ふ御顏のたゞならず見へさせ候ふはといふに平治郎は大に仰天し何さま怪異の事也とおもひ即ありし事どもをつぶさに物語れば妻もろともに打驚き奇異の思ひをなしけるがさるにても日來念じ奉る御ほとけの我を救はせ給ふにもやと彼櫛筐の名號を取出し見てあれば不思議なるかな名號の横さまにきれたるにぞ妻も信心彌增にそゞろ涙をながしあさましき我らごときの身にかわり給ふ事の勿躰なやと稱名もろともにふしおがめばさしもの平治郎もかくまのあたり奇特を見て靈驗肝に銘じつゝ忽ち改悔の心を生じ妻女とゝもに聖人の御坊に至り終に御弟子と成りけるとなん右身替りの名號と稱し奉り和州下市村立興寺に第一の寶物たる事諸人のしる所なり

靈寶には聖人御眞筆の光明本及び唯圓自作の木像等有

廣林山眞佛寺　西派　同國同郡大部鄉横曾根村にあり

受法院と號す高祖聖人の眞弟眞佛房の遺跡なり下總結城稱名寺の開祖とは同名異人なり混ずべからず本尊阿彌陀如來高祖聖人御眞作　其外眞佛上人自作の像を安置す

眞佛房俗稱は平太郎とて當國大部鄉の庶民なり聖人の御門徒と成りてより專信無二の行者たり初聖人當國御勸化の間は其身既に眞宗の



領袖として佛意にかなひ師命に隨從してありといへども未俗形を改めず此を以て領主佐竹刑部左衛門尉の歩役に駈れ熊野權現に詣しけるが權現の靈驗を蒙り世に念佛行者の鑑ことはなれり 平太郎熊野詣の事順信房筆記には仁治元年といへり尚ほ委敷は御傳抄に讓りてこれを畧す又或説に龜山院平太郎が法德をめでさせ給ひかたじけなくも眞佛上人の勅號をたまはりしといふ

後に入道し眞佛房と號す弘長元年六月十五日六十五歳にして終に大往生を遂られたりしかりしより以來子孫僧形にて平太郎眞佛と稱し相續してありけるを良如上人東國御下向の折から眞佛寺の號を賜りしとかや

德池山信願寺 西派 同國同郡水戸城下向井町にあり

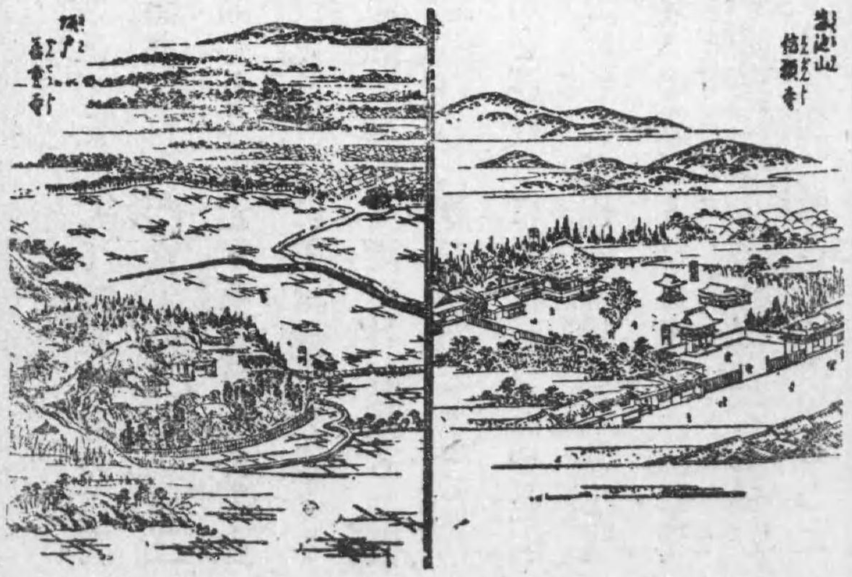
蓮生院と號す二十四輩第二十三番畠谷唯信法師の芳趾なり本尊阿彌陀如來 弘法大師の御作にして銅造の御佛なり

唯信房俗姓は當國保内の住人畑谷治郎信勝といへり高祖鹿嶋御化導の時御教化を蒙り直に門に入て竟に專信無二の御弟子と成りにけるとなん○靈寶高祖眞跡の御消息 即唯信房へ下されし所なり 其外代々上人の御眞筆等あり

法王山善重寺 東派院家 同國水戸上町

坂戸にあり

遍照山とも號せり二十四輩第十二番高祖上足の御弟子釋善念房の開基也○本尊阿彌陀佛 運慶の作又は春日丙の作ともいへり 坊舍



三區あり

當寺の畧記に曰く開山善念房の俗姓は平氏にして桓武天皇の苗裔三浦大助義明の弟岡崎四郎義實の孫與市左衛門實忠の三男三浦三郎義重といへり父實忠和田義盛に同心し建保元年酉五月三日鎌倉におひて和田三浦の一黨謀叛の砌討死せり時に義重漸十三歳なりしが同四年八月十三日鹿嶋明神に志願の事有て詣でける歸るさ櫻川にさしかゝりにいと殊勝げなる老僧のわたりなやめるさまなれは義重此を見かね直に彼僧を負て川を越けるに豈はからんや是則高祖聖人にてまし〳〵けりかくてこれ終に菩提の善縁と成りて屢御勸化を蒙り聞法隨喜のあまり御弟子の列にゟ加はりける爰に聖人彼櫻川のほとりに一宇を建立し善重寺と號し專ら弘法なし給ひしが後かの善念房に御附屬ありしより善念法脉に隨ひ教導おこたる事なく終に弘安八年十月十三日八十五歳にして入寂せりといふ

寶永の記享保の記及び大谷遺跡錄共に善念房の俗性は三浦の一門長田義重とて万夫不當の勇士なりしかば宿緣淺からず聖人櫻川の法莚におひてはからず御教化を蒙り終に御弟子と成りしかば法名を文慈善念と賜ひ高祖上足の門徒たり其後當國笠間におひて一宇を造立し教導專らなりしが中古東門部に移住し更に十三世を經て天正十四戌年今の坂戸に轉院すといふいまだいづれか其是をしらずしばらく筆して後の識者を待のみ

靈寶聖德太子十六歳の尊像

○右此尊像は太子の御自作にして彩色は聖人手づから施し給ふ所なり往古は同國大山村慈願寺に安置せしを寛文十一年亥四月やんごとなき御方より當山へ寄附し給ふと云抑此尊像は靈驗あらたなる事あまねく世人のしる所にして中にも夜陰に至て高聲に讀經し給ふ事今に於てまゝ聞者あり又元和元年九月十六日三人の夜盗當山を襲ひしに忽ち利生あつてのこらず發心を遂たり又承應三年四月十五日隣家より失火して當院の本堂殆燒亡に及んとす時に靈像出現し給ひ暫時に猛火を消滅し給ひしとぞ其餘奇瑞妙驗枚擧するにいとまあらず誠に不思議の尊像なり

長嶋喜八　東派　同國同郡與澤村にあり

先祖は平田與八郎とて代々當村の農民たりしが或時妻女難産にて甚危急なりしかは巫醫方を盡す事殘る方なしといへども更に其驗なく次第に死期せまり來て苦惱いはん方なく悶叫ぶ程こそあれ外の見る目も物狂わしくせめて臨終の障礙を助んと貴僧高僧を求む る事頻りなりといへども元來當世其人にとほしく況や邊鄙の片田舎なればこれをいかんともする事能はず産婦はます〳〵苦みに堪かね種々の惡相をあらはし空をつかみ地をうち七顚八倒して終に眼を見はり齒をかみて息絶し其ありさまみる人愛相を失ひ恐れざるものはなかりけりかくて有べき事ならねばかたのごとく葬送を營み村の傍に最懇に葬りて一族ども皆々宿所に歸りけるがされば生前の善根もなく臨終一念の迷心によりて穢土の羈縁つきざるにや其夜より彼埋し塚に陰のごとく姿を顯し啼叫ものありて其聲を

聞ものは心魂を冷し恐怖與八郎が妻女こそ迷鬼となりて人をとるとなんといふ程に夜に入ば誰一人戸外へ出る者もなくこりぐ〵噂なしければ與八郎これを深く悲み種々に佛事作善を成して亡婦の菩提を吊ふといへどもなを〳〵幽魂啼泣の聲彌增にして少しも怠る事なきゆ是非もなし爰に此頃高祖聖人當國鹿嶋へ御化導のた

長島喜八郎が宅

御經塚に經石を拾ふ

め往返し給ふとてこの與澤村を通らせ給ひけるが與八郎兼て聖人の大德を聞及びし事なればやがて聖人の御袖にすがり事のよしを懺悔し大慈大悲をたれ給へと涙と共に願ひける聖人始終を聞しめしいと便なくおぼしめされかゝるものをこそ濟度せずんば我多年の功德も水の泡と成り如來の悲願もむなしかるべしと直に葬所に至り給ひ多くの小石を集めさせ三部妙經を一石にあるひは二字三字づゝ書寫し彼塚に納め念頃に念佛なし給ひ其まゝ鹿嶋へこそは趣き給ふ然るに與八郎其夜夢に金色莊嚴の菩薩枕上に現して我はこれ汝が亡妻なり愛執の妄念に引れ惑溺の迷路にくるしみけるを權者の利益を蒙り忽ち苦域を免れて天堂に往生する事を得たりこれひとへに大悲聖人の厚恩にして報じても報じ盡されず謝すとも謝しがたき所なり我爰を以て殊に現して告聞ゆといふと見へて

夢さめぬ與八郎奇異の思ひをなし直さま墓所に至りて伺ふに更に幽魂の形もみへず啼哭の聲も聞へざれば始めて聖人微妙の利生を感じ信心肝膽に銘じ隨喜の涙せきあへず早々鹿嶋へ詣で聖人に謁し奉り廣大無邊の恩德を謝しありし事ども具に物がたりし此上は何卒亡妻の因によつて御歸路は必ず茅舍に入御あらせ給ひ大悲の教化をたれ給へと涙と共に願ひけるに聖人與八郎が誠心なる事を感じ給ひ即ち是を許容ありしかば與八郎天に仰ぎ地にふして大に歡び手のまひ足のふみどもわかず馳歸り聖人入來の設をなして待ける程に頓て高祖御入ありて其夜は與八郎が家に宿し給ひ終夜御勸化ありしかば與八郎は具に他力本願の名號を受得し聞法踊躍にたへず實に有難き信心無二の優婆塞とはなりにけるかくてさま〳〵に聖人を饗應けるが聖人も渠が信心淺からざるを御喜悅のあ

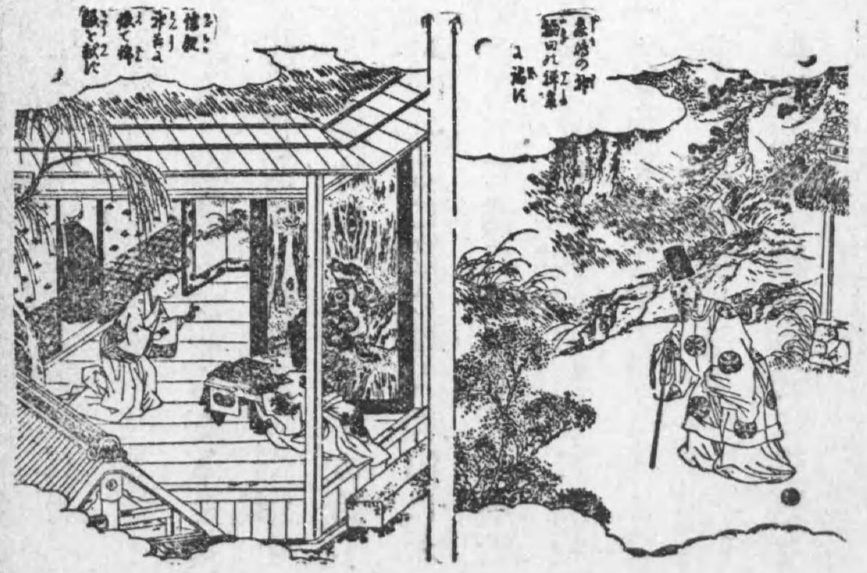
まり携へ給ふ所の三ぶくの御畫讃を與八郎に授與し給ひ翌朝別れを告て出立給へば與八郎御跡の慕しく赤飯をものして是を持參し送り奉り中根が原といふ所にて聖人にすゝめ參らするに取急きしまゝ箸を忘れしかばいかゞはせんと傍を見るに葦一むら生たり即これを切てよく清めすゝめまいらせしかば聖人渠が心づくしなるをめで給ひ心よくこれをきこしめし彼箸を地にさし給ひてもし我眞家遐代に盛んならば此箸も根芽を生ずべしと祝し宣ひしに不思議なるかな彼箸次第に芽を出し今に蔓り生すとかや　株一莖にて末両條にわかれ箸を列ねたるがごとし里人是を御箸の蘆と云かくて與八郎は終に聖人に別れ奉り自つくゞ思ふやう亡妻の惡念は却て是菩提の種と成り我らごときの淺ましき者すら難有御教化を蒙り彌陀の本願に遇ふ事何の歡びか是に如んさあらば此喜は子孫につたへて忘るべからずとて即名を喜八と改め報恩の稱名怠る事なく堅固に念佛なしけるとかや　今に至て喜八を以て通稱とする事はこのゆへんとぞ

○彼三幅對の御畫讃は中尊阿彌陀如來　三方正面にして光明の中に十二光佛ましゝて光明連坐あり　左善導大師　口より三尊をふき出し給ふ所の圖なり上の色紙形に若我成佛十方衆生の讃文有　右聖德太子　橘の禁殿にて勝蔓經御講談なし給ふ所の圖なり陛下に妹子大臣阿佐太子惠慈法師日羅上人等都て七躰也　右此三幅は聖人御自畫御自讃にして世に難有所也二間四方に別堂をしつらひ是を安置す且喜八が奇特によつて國守より除田を賜ひ毎年會式の法事怠る事なし誠に在家の身として六百年の星霜を累ね今に家名を相續し代々不退轉の信心厚く聖人の御遺物を持傳ふる事誠に目出度家運と云べし

鹿嶋大神宮　同國鹿嶋郡に鎮座ましますす延喜式神名帳に名神大月次新嘗當社祭る所の御神一座武甕槌尊本地は觀音薩埵にてまします既に和光の跡をたれ給ひ神代のむかし經津主神とともに豐葦原の中津

國を治め給ふ爾より以來師の靈の神劔を以て災害を拂ひ魔障を伏し我日本を鎭護ましますにより萬民貴賤のわかちなく神風を仰さるものなし然るに遙の星霜を經て嘉祿二年十月中旬高祖親鸞聖人法藏五十四歳の御時當國稻田の御坊より當社へ參詣まし〳〵けるに內鑒冷然たる神慮より聖人を深く歸依し給ひ即ち數千歳のむかしにかへりて衣冠いとうるわしき翁と現じ日々夜々に稻田の禪室にあゆみを運びて聖人の御敎化を聽聞なし給ひしに始の程は門徒の僧侶も何心なく思ひ過せしが日を經るに隨ひ衆人是を怪しみかく老若貴賤打まじりて群參する中に一際目立て木蘭地の直衣に烏帽子かけたる老人こゝ凡人とはみへ給はずいか樣奇持の人にうおはすらん下向の砌は跡して尋ねべしと度々これを伺ひしかど門外へ出給ふやいな忽御姿を失ひ曾て歸り給ふ所を知る者なければ彌

是を疑ひ聖人にかくと告奉りしに聖人はとくより彼翁の神通をしろしめすといへどもわざと門侶へは語り給はさる事も有べしなど宣ひて打過給ひけるに或時彼翁聖人に謁し給ひ願くは我に剃刀を授け給ひ法名を賜りて御門下に列し給はらば廣大の恩德成らんと渴仰しきりなりしかば聖人御氣色最快然として其まゝ是をゆる



し給ひ法名を信海と書して與へ給へば翁は所願滿足の歡びにたへず聖人に九拜し下向有けるが其翌日則剃髪の議相を備へて參詣し厚く知恩報德の禮をのべられしかば聖人も値遇の淺からざるをめで給ひ自十字の名號を御染筆あり其脇へ信海房と御對座の御影をさへうつし加へ給ひ後の世のためしとて御坊にこうはとゞめ給ふ

今稲田西念寺に傳來する所の什物これなり鳥栖無量壽寺にある所の連座の御影も此時の御筆也といふ

然るに始め聖人稲田におひて御教化の砌境内の井水何れも濁りありて常にこれを苦しみ給ひしにこの日信海御房申されけるは我も又宿執開發の歡びに我庭前に七ツ井とて清冷の水あり其内一井を聖人に寄附し奉らんと誓ひ給ひしに不思議や其夜忽ち御坊の前庭に清泉湧出せり

今稲田御坊に鹿島井といふは即是なり

加之聖人曾て太子の尊像を自彫刻なし給ひ御坊に安置せられしに信海房戸帳を捧献ありて聖人の恩德に報し給ふ

今稲田御坊の太子堂に懸る戸帳則是也

是此御神は扶桑鎭護の靈神なれば聖人の德輝を見て和光の方便を仰ぎ給ふが故なるべし扨も其後寛喜元年太神宮の神官尾張權頭信親

俗傳柿の岡如來寺の條下にあり

に託宣して曰く我此頃稲田にまします親鸞聖人といへる達德の知識を歸依し直に御弟子と成り法名をさへ授り所願滿足のうれしさに戸帳一掛及び清冷の井水を寄附せり備すみやかに我檀上の錦帳を持して稲田の御坊へ献ずべし若是を證せんとならば七ツ井の其一ッは既に先達て涸渴し彼地に清泉湧出せり努々疑ふ事なかれと御聲新たに聞へさせ給ふにゟ信親大に驚き即時に神殿に至りてこれを伺ふに御戸帳の内に顯然として法名釋信海と書る切紙あり其上井水の應驗著明信親殆ど奇異の思ひをなしかゝる靈證ある上は何の疑ひか有べしと未謁しもせざるに忽ち聖人を尊信し直樣御前の錦帳を稲田の御坊へ持參し遂一にあり

し事ごもを物語りし同じく御弟子と成りしかは法名を順信と號し

鳥栖無量壽寺の寺務をゟ蒙りけり上來は西念寺無量壽寺その外諸傳を會授して記す

○廣德寺は眞言宗にして當社不斷御讀經所なり當寺に聖人御眞筆太神の靈像あり赤童子の御影といふ御裏書も御同筆なり又太神の神筆にて聖人の尊像あり此二軸互の御影と稱す是すなはち神官信親が所願によつて太神聖人御對座にて畫給ふ所なりといふ聖人御眞筆の信海房の靈像は此餘西念寺無量壽寺森岡の本誓寺等にもあり

御堂寶滿寺　西派內陣　下總國銚子の湊にあり

○寶滿寺は鹿嶋明神より息栖明神へ出それよりひたち原といふを過ぎすべて行程八里にして銚子浦に至る香取明神へは寶滿寺より又八里有此間陸路は大かた砂礫にて甚難所也これによつて鹿嶋大船津より船をやとふて行べし寶滿寺及び香取明神の事跡は下總國の部に委く出す

筒井極樂寺　眞言宗　常州鹿嶋郡筒井村にあり

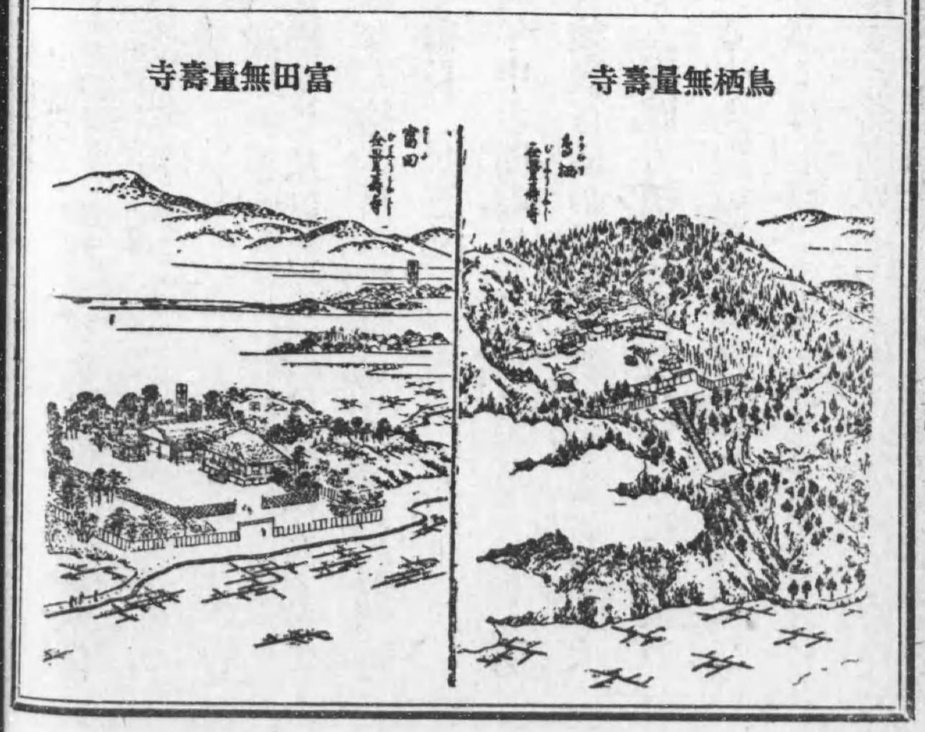
當寺は往昔宗祖聖人御化益の地なりといふ○什物聖人御眞蹟の光明本并阿彌陀如來の畫像光明の中に六字名號及び御法名をぞのせられたり　其外聖人の御木像これは近來筒井淨明の像也といふ○珠數房の梅寺中にあり聖人手自植置給ふと云

光明山無量壽寺　西派內陣　同國同郡鳥栖に有

二十四輩第三番聖人の嫡弟鹿嶋順信法師俗姓鹿嶋明神の條下にあり相續の芳趾にして曾て高祖三ケ年の間寄寓なし給ふ所の靈場なり○本堂阿彌陀如來の尊像は聖人の御自作也御長二尺三寸

當寺の濫觴を尋るに往昔大同年中の開闢にして無量壽寺と號し法相の宗風高き梵刹なりしが其後幾百回の星霜を經て下根の僧侶次第に持律の教綱を行ふ者乏しく寺院も稍杇傾に及びけるに文治の頃當國の刺史村田刑部といへる士志願の事あり遺構によつて再び營築し佛心宗の道場と成せり然るに刑部が妻女臨產の折から大に惱終に空しくなりし程に即當寺に葬りけるが豈おもはんや五障の

罪業深くして臨終顚倒の一念忽ち億刼の迷鬼と現じ夜な〳〵啼叫ふ聲しきりなり村民これを聞者大に恐れ無量寺にこう産女てふ化生ありといふほどに誰一人詣る人もなく後には住僧同宿までも恐れまどひて逃さりければ徒然に荒廢の空院と成れり村田刑部是を大に悲み追福作善さま〳〵なりといへどもさらに止むけしきなく案じ煩ひける折しも（承久二年の秋）宗祖聖人當國稻田の御坊より鹿嶋へ社參し給ふ事數にして諸人ろの德行を仰ぎ頗る化益を蒙る者少なからずよつて相共に村田にすゝめ聖人を屈請し何卒濟度の化益をもつて幽魂を一時に散じ給はらば一境の悅び廣太無邊の恩德ならんと打歎きけるに聖人弘法に御暇なしといへども十方世界攝取不捨の御誓に彼一人洩ん事いと便なくおぼしめし即玉趾をめぐらされ多くの小石に三部の金梵二萬六千六百餘字を悉く手づから書寫し給ひ彼墳に埋藏し報謝の稱名いと懇に唱へ給ひしかば權者の奇特著明く其夜よりして迷鬼の苦聲寂として止にけりしかのみならず刑部をはじめ村民等彼妻女の生前の姿其まゝに一片の紫雲に駕し西方に飛さりぬと一同是を夢見ければ各不思議の思ひをなす中にも刑部は顯然たる靈驗に信心肝に銘じ隨喜の涙とゞめかねてあ



りけるが幸當時無住なれば何とぞ聖人を彼寺にとゞめ奉り御教化をも聽聞せんと村民等とともに聖人の御袖にすがりこひ詫けるに聖人つくゞ思召すやう有縁の衆生は化を施し安く且鹿島への往返やゝ程近ければ我暫くは此空院に寓すべしと即舊名に壽の字を加へ無量壽寺と號し竟に三ケ年の間當院に御勸化ましくけるとなん　當寺三年の御寄寓は稲田御淹留十ケ年の内也と云　此時の御歌に

「彌陀たのむこゝろをおこせみな人のかはる姿を見るに付ても」

其後鹿嶋順信房へ御附屬ありてより順信順性順慶次第に當寺を相承なし給へり　大谷遺跡録には順信房は信親が一子磯崎次郎信廣父の命によつて聖人の御弟子と成り順信房性光といひしは是なり聖人彼をして西海を化しめ給ふ今の攝州嶋下郡溝咋佛性寺は其遺跡也と云姑く筆して後案を待

釋信海御法名　鹿嶋明神の法名也聖人御筆連坐御影　聖人明神對座の御真筆御經塚村田刑部が亡妻の塚也又女人成佛の塚共

光明山無量壽寺　東派　同國同郡富田村にあり

當寺は鳥の栖無量壽寺よりの分寺にして二十四輩第三番順信房の開基なり　順信房の傳は鹿嶋明神及び鳥の栖の條下にあり　○什物高祖聖人御眞筆の光明本幷證據の名號　脇に信海房の影像を畫給ふ等なり

巖船山願入寺　東派　同國宮田巖船にあり

當院は高祖親鸞聖人の御孫如信大和尚の遺跡にして當國第一の大佛場なり代々御連枝御住職有て寺格最彌高

○本堂十五間四面本尊阿彌

巖船願入寺

陀佛春日の作或は御作ともいふ并に

當時國君の御作の如信上人の木像を安置す坊舍六ケ寺あり傳に云く

如信上人曾て奥州大綱の東山に居を占給ひしに是即願入寺の濫觴なり御勸化に

隨ふ者郡國を傾け德行を仰ぐ輩遠近の隔なし爰に彼禪室をさる事

三十里坂東道六丁一里を以ていふ西にあたつて金澤といへる所に乘善といふもの

あり就中本願の旨趣を信受し知恩報德の思ひ淺からず終に正安元

年己亥の舊冬廿日あまりの頃信上人を己が草菴に屈請し晝夜聞法

の化益を蒙り且は朝夕の給仕をゔなしけるに豈はからんや上人翌

子の正月二日より御心地例ならず打伏給ひ偏に世の囂塵を抛却し

長時の稱名專らなりしが忽ち異香室中に薫じ音樂窓外に聞ゆる事

二日二夜人の二根を穿ちて間斷なしかくて上人同四日正知正念に

して稱名の聲もろこも大往生を示し給ふ御年六十二歳此におひて第一回

第三回の御法事を京師にて

執行ひ第十三回は正和元年

にあたらせ給ふに其前年應

長元年亥年冬の頃覺如上人

御舊跡をしたはせ給ふ事し

きりにして終に關山幾重の

雪を凌ぎ江湖萬里の氷をわ

たり遠くかの金澤の草庵に

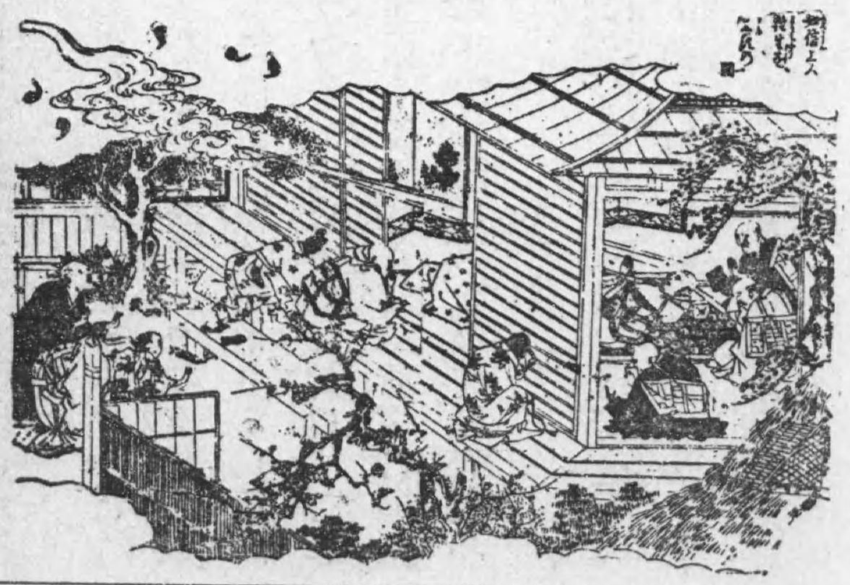
玉趾を寄られ諸方の門徒を

催乘善と共に追福の佛事を

營給ひられよりして又大綱

の基趾に詣給ひ即遺教の徒

如信上人往生を示すの圖



のために一座の梵筵を設け給ふ誠に懇懃鄭重なりし事とかや　以上最須教重繪に載る所なり　然に中古彼大綱の民屋同國白川郡竹貫といへる所へうつりしかば大綱は即荒蕪の地と成りて今は古宿と唱へり扨又信上人の遺趾願入寺は上人金澤へ趣き給ふ後代々相續恙なかりしに第八世如慶師の時國中爭亂の事發りて堂舍悉く兵火の爲に燒亡すこれによつて大綱を退き當國へ移りしが同十二世如正師の時更に同國久慈郡久米村へ移轉す爰に十五世如高師の時にあたつて延寶元年の頃

當國の大守かゝる靈場の日々に衰微に趣ん事を傷み思し召喜捨の大功德を興し給ひ即久米より今の宮田村にうつし寺院佛閣に至る迄魏々然として再興あらせ給ひ京師より御連枝惠明院如晴僧正を請じて御住職と成し給ひ寺領三百石外に毎年黃金二百両香華の資として御寄附あらせ給ひしかば信上人の御法德日の再び中するがごとく更に東國に曜きけるは誠に尊とかりける次第也　以上遺跡錄をもつて記す

○靈寶には宗祖聖人御自作雛形の御影　聖人御添狀彌女母公へとあり

二十四輩牒　釋定如御筆也是は御本廟第三世覺如上人大綱御坊へ御下向の折から高祖の御門弟二十四輩正流相承の人々を連署し給ひし記也奥に正慶元壬申年正月五日執筆釋定如とあり

○如信上人の御廟は今尙保內の金澤にありこれ又國君より坊舍を營築し給とかや

衆寶山淨光寺　西派　同國那阿郡田中舘山にあり

當山は二十四輩第二十一番吉田唯佛房の開基也始唯佛房當國茨城郡吉田枝川に一宇を造立あつて吉田御坊と申せしが中古當境に移せり然るに開基告夢によつて更に佛閣を山上へ引うつす遺蹟は即山の麓にあり山下の惣門は飛彈內匠が造作せる所なりと云　世に飛彈內匠を以て一人の名と心得たるは大に誤りなり飛彈は國の名にして其土人內匠に妙なるが故にこれを賞していふなり尙萬歲は大和を以て稱し舞姬は河內の名を蒙らすの類

な り○本堂十間四面本尊阿彌陀如來　惠心僧都の作佐竹義重の室これを安置すといふ

宗祖聖人の眞影　御自作にして自照鑑無垢の御影と云　僧舍四區あり○什寶

御繪傳四卷　日本三部の其一なり傳文は定如上人繪は淨賀法眼也　開基唯佛房系圖以上

二品共修復は

國若よりの御寄附なりとぞ

猶原山上宮寺　西派　同國那珂郡米崎にあり

高祖聖人上足の御弟子二十

四輩第十九番猶原明法房の

開基なり　明法房の俗傳前の板敷山の條下に出す當院は

衆寶山淨光寺

猶原山上宮寺

猶原に造立ありしを後年今の松原に移せり　○本堂十間四面本尊阿彌陀如來　聖人の御自作　僧坊二區

あり○寶物　聖人御染筆十字名號　上に大經の文下に善導の釋文左右一枚起請文を寫し給ふ　明法房の

像　自作六十二歳の容貌なり　其外畧之

小壺山阿彌陀寺　東派　同國同郡額田に有

二十四輩第十四の配當高祖の神足那珂の定信法師の開基なり○本

堂八間四面本尊阿彌陀佛　慈覺大師の御作　寺家二區　定信房　俗姓いまだ詳ならず　と申は弱

年のむかし三井寺に入て聖導の難行を修學し圓頓一乘の理に深く

兼て三密瑜迦の法を行ふ事一山其右に出る者なく衆侶其智德に心

服す係ける程に定信自思へらく我修得の妙法を以て衆機を化益す

るならば誰か我道に背く者有んやと即志を決し關東さして下りし

が宿習の因緣忽に發起し當國にたひて聖人に邂逅しけるに頓て聖

道高上の法を說出し聖人を誥んとす時に聖人これを耳にも入給は

ず唯本願一實絶待不二の要門を立て末世愚痴無智の衆生には他念をまじへず一向一心に彌陀を信じ奉れば次の生には佛果を得んこと疑ひなしと易施易行の法を示さんこう一切藏經を說んよりも勝り即得往生の道は唯他力の御法より外有べからずと權者微妙の要決を授け給ひしかば定信暗に法我の角を折き隨喜渴仰の思ひ深

小壺山阿彌陀寺

佛舍利を得る圖

くして終に聖人の御門徒につらなり信心無二の御弟子と成れりけり

什寶　聖德太子十二歳の尊像　聖人の御自作　法然上人の御影幷六字十字の名號　共に聖人の御筆　小壺の佛舍利　定信房草創の地は那珂郡大山なり後數代を經て粟村に移り更に又今の額田へ轉院す然るに彼粟村より當所へうつらんとて本堂の基趾を經營し地を穿ちけるに地中に錚々として音するものあり人々あやしみてこれをきくに鈴也こゝにおいていよ〳〵奇異の思ひをなし其音にしたがいて穿けるほどにいと玲瓏たる水精の瓶に佛舍利をもり光明耀曜とにがまれ給ひしかば佛智應感の奇特なりと皆一同に稱し頓て取あげ終に山號を小壺山と改め永く當院の靈寶と成りぬ

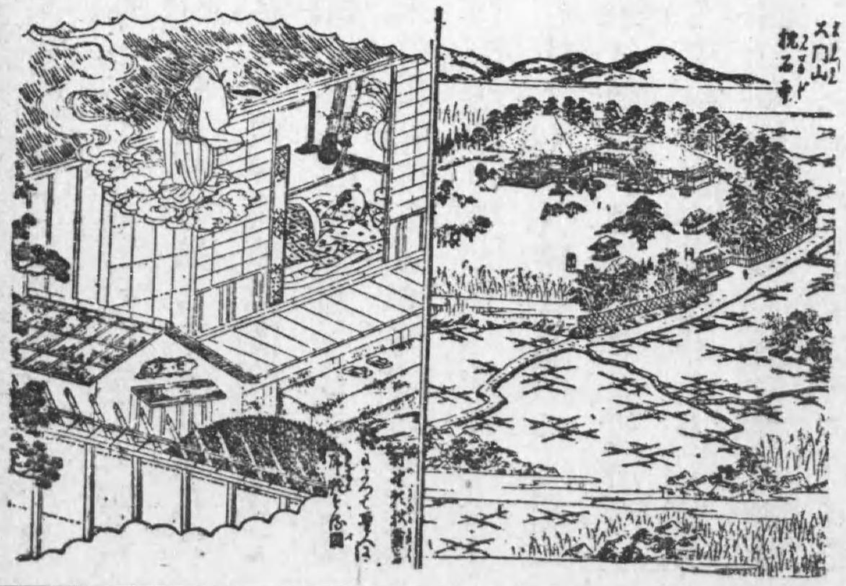
大門山枕石寺　東派　同國久慈郡佐竹の庄上川合村にあり

或は龍上山大門院とも號す二十四輩第十五釋道圓坊の遺蹟なり○本尊阿彌陀佛　傳教大師の御作

道圓法師は舊江州蒲生郡日野の産にして俗姓は日野左近將監賴秀が後胄日野左衛門尉賴秋といへる士なり當時不遇にして世をあち

きなく思ふ心より自こ人の交も疎く終に流浪して當國久慈郡大門大門とは此三里斗が間の總名也といふ地に逼塞して有けるが頃は建保五年の秋聖人當國御教化の折から一日此大門を經回し給ふに思ひの外に日暮て前路程遠ければ即左衛門が家に立寄宿りを需め給ひしに左衛門性質むくつけき男にて御覧のごとく我だに住うき貧家なればいかでか旅人を宿すべきさく〳〵歸り給へと愛想なく申けるがさればとて外に求むべき家居もなければ聖人強てこれを乞せ給ひしかば左衛門以の外に腹立しこはくご〳〵しき法師かなさらずはさらぬまでよ先我棒を受べしと有合杖を取つて既にこれを打んとす聖人此形勢を見給ふより矢庭に外面に出給ひしが日ははやとく暮はて、行先とても見へわかねば詮方なく又立もどらせ給ひ茅が軒端に露をふせぎ石をば假の枕こし夜寒をわびて臥給ふに相隨ふ二三の御

弟子此御姿を見るよりも御いたわしさいわん方なく涙ことともに御介抱をなし參らせけるに聖人少しも憂給ふけしきなく夫彌陀因位の御修行に肉の山を築血の海をながし焦熱沍寒の苦惱を凌ぎ超載永刼身命を惜み給はずぼさつ無量の德行を積植し給ふ御艱難を思ひめぐらせば今此軒端の假寢は物の數かは元より樹下石上は我



大門山枕石寺

靈告に依て聖人に歸順す

釋氏の教へなれば何しにこれを厭んや是に付ても唯仰ぐべきは彌陀の御恩德なれば彌報謝の稱名を歡ぶべしと念佛の御聲最殊勝に既に其夜も更にけり扨も左衛門は前に聖人を追出し奉り臥所に入て休らひけるが子の一ッばかりと思しき頃一人の化僧枕上に立ていかに左衛門爾凡夫のあさましき前に汝が門に來迎ましませし御僧こそ則西方の教主覺王阿彌陀如來にてはします勿躰なや百福莊嚴の尊像を衆生濟度の爲にあられぬ法師の姿とかへ結緣のために塵にまじはり給ふなるをさもあらけなく云詈難有悲願にもれぬる事の愚さよされども爾が宿執發興の時至りぬれば幸に他所へうつり給はず軒端をかりの宿として石に枕し臥給へばとく〳〵屈請申參らせ尊恭怠事なかれ我はこれ爾が多年頂禮せる所の救世菩薩也と宣ふと見て夢さめぬ左衛門大に驚き即示現に隨ひ密に戸外を伺ふに恰も日光の再びてらせるがごとく光明傍をかゝやかし其明き事白晝のごとし左衛門心中に彌恐れ聖人の御側近く伺ひ奉るによく熟睡なし給ふ御息の下よりこゝろ其光赫然としてあらはれければ左衛門は忽ち大地に身を拋せんびを悔て泣わびつゝ我家に請じ參らせ觀音大士の御靈夢を物語り改悔の心しきり也しかば聖人大に喜ばせ給ひ一樹の蔭一河の流れ皆これ他生の緣なれば今更心をく事なかれと即終夜隨類隨機の大悲をたれ機見機應の善巧を以て他力本願の奥旨凡夫直入の教法をいと念頃に示し給ひければ左衛門立所に信心發得し速に御弟子の列に從ん事を願ひけるに聖人これを許して即釋道圓と法名を授け給ふかゝりしより道圓房彌本願を信じ聖人を尊重し奉る事他に超たり爰におひて一宇を造立し更に聖人を請し奉りければ心よく入御ならせ給ひ法聞更にこまやか

なり道圓房つく〳〵思ふやう聖人御化益御辛勞の恩德順彌も高きをあらうはず蒼海も深きを讓れり是をいかんゞ末世の衆生に示さゞらん然らば物に名つけて其意を後來に殘すに如ずと即聖人に願ひ奉り枕石を以て終に寺號とはなしにけるとなん　後年いさゝかゆゑん有て寺を今の地にうつせり枕石村左衛門が古跡は奥に出す

○寶物　枕石　ゆゑん本文にあり　高祖御首の御影　御傳繪に示し給ふ定禪法橋に聖人の眞影を寫さしめたる時定禪夢想に聖人善光寺本願の御坊にわしますと感得し御首斗を寫し奉りしを頂載ありしは入西房と申とかや是即道圓房の事也聖人既に御歸洛の後道圓房入西在京して常隨給仕せられけると也かるがゆへに當寺に聖人御首の御影を傳持せり又高田專修寺にも同樣の御影あり何れか定禪の筆跡なるや未其眞僞を不知

開基入西房道圓の畫像等也其外畧之

鳥喰山西光寺　東派　同國同郡谷河原にあり

無量光院と號す高祖聖人嫡弟二十四輩第二十四はん鳥喰唯圓法師の芳蹟なり　舊當國那珂郡鳥喰に起立ありて數代相續連綿たりしが寛文元辛丑年當所に再興せり

○本尊阿彌陀如來　行基菩薩の御作　尊號眞像の御影　聖人御眞筆十字名號其下に聖人四十四歳の御影を寫し給ふ

其外什寶畧之

久米願入寺　東派　同國多河郡久米村にあり

當寺は高祖聖人御孫如信上人嘗て奥州大網に精舍を營築まし〳〵弘法あらせ給ひしより第十二世如正に至りて當所へ轉移せし時の遺趾なり其後十五世如高の代府君　喜捨の大功德を興し給ひ當院を宮田巖船にうつし給ひ諸堂魏々然たる精舍とは成れりけり

畠谷山覺念寺　東派　同國同郡金澤村にあり

二十四輩第二十三畠谷唯信法師の開基なり

唯信房と申は舊當國保内小瀬畠谷の住人にて俗姓を畠谷次郎信勝といへり當年高祖聖人鹿島奥郡御化益の砌信勝聞法隨喜して終に御弟子と成り金剛無二の信者と成にけり此におひて故郷畑谷に一宇を起立し專ら弘法有しが後世此地に再興せりと云

○石州濱田永勝寺も唯信房の遺趾なりとぞ傳に云御房畠谷領におひて一宇を興立ありし後総州及び泉州へ轉移せしが終に領主に隨ふて石州にうつれりといふ

大門枕石寺　淨土宗　同國久慈郡大門村にあり

河合枕石寺の舊地なり當所に日野左衛門入道道圓房の墓あり

始めは同所枕石村の東なる山際に杉のむら立たる石塔原ありて其中に雜置してありしが中古祖師四百回御忌の節今の所へ移すと云

枕石村　同國同郡大門の内なり

往昔聖人石を枕とし左衛門を化度し給ひし舊地也是によつて終に村の名とせりと云　此村はづれに少の坂あり其坂の下り口はすなはち日野左衛門が宅他の跡なりと云

王跡山青蓮寺　西派　同國同郡東蓮寺村にあり

當院は二十四輩第八狗飼證性法師化益の遺趾なり　證性房の傳は陸奥棚倉蓮生寺の條下にあり

○本尊彌陀如來　春日の作

往昔何某の親王とか申し止事なき御方此地に隱遁ましくける其跡に一宇を建立して王跡山東蓮寺と號せしとかや然るに宗祖聖人當所御教化の折から此寺の頽廢せるをいたみ給ひ即證性房に命じ是を修補せしめ給ひしかば此におひて證性房當寺に住持し號を青蓮寺と改め弘法專らにして終に眞宗の佛閣と成れり

玉川山常弘寺　西派　同國那珂郡石澤村にあり

寶壽山太子堂とも號せり當院は高祖上足の弟子村田慈善房の開基也慈善法師は二十四輩の内第二十番に配當す　或傳に始めは村田村に建立ありしを後年に至て石

澤にうつすといふ大に非なり村田石澤は村域相接せりむかしは常弘寺の境地村田領なりしを今は石澤より是を領せるなり慈善房造立よりこのかた既に六百年の星霜を經るといへども基趾は曾て流轉せず法嗣世々相續して未血脉を改ざるの靈場也といふ

○本尊阿彌陀如來春日の作其外靈寶には聖德太子尊像御自作開基慈善房像自作等なり

明法房墓石澤より野口を經て東なる小川をわたり東野村の入口に有

此所は明法房いまた辨圓といひし修聽者たりし時の宅地也とゞ今尚土堤石墻なゞ

王跡山青蓮寺

玉川山常弘寺

の跡あり碑面に猶原明法房墓と記せり

○右墓より五六丁かたはら少し小高き所に法專寺といふあり當院の本尊は上宮太子の御作にして明法房念持佛也幷當寺の開基猶原上宮寺の三世敎正作の明法房の像を安置す

信照山壽命寺　西派　同國那珂郡大畠にあり

蓮華臺院と號す二十四輩第十六等聖人の神足穴澤入信法師の開基なり○本尊阿彌陀佛春日の作入信の像自作上宮太子尊像御自作等を安置せり

入信發菩提心の因緣をいかにといふに俗姓は清和源氏の苗裔義景には嫡孫四郎隆義の息佐竹冠者秀義の長男也其身武門に生れながら朝暮人間の不定を觀じ大に世の榮利を厭ひ隱遁の思ひ切にして穴澤といへる避地に菟居をしつらひ深く菩提の道を欣求し自力の念佛專らにして西方の往生をゞ期したりける爰に宿善發起の時〻

たりて或夜不思議の靈夢あり其樣凡常ならざる法衣の人忽然こして來現し爾西方の往生を求る事多年にして稱名念佛怠慢なしこいへども自力の功德いたづらに更に億萬劫を積とも其甲斐有べからず去ながら爾が信心餘念なきをめで今其旨趣をさとさんと急ぎ小嶋の里に至て親鸞聖人に謁したてまつり彌陀の密敎本願他力の御勸化を蒙り速に如來の慈海に浴すべし我はこれ西方の使なればゆめ〳〵疑ふ事なかれと告給ひ直に天邊に飛さり給ふと見て夢さめぬ時に建保七年入信爰におひて大に歡び我年來の素願滿足の時至れりと急ぎ聖人の禪房に馳靈告のまゝに物語りし伏て敎示を願ひしかば聖人いと快くめでさせ給ひ即敎化し給ふ樣夫他力弘願の稱名とは自一筋に後世を助らん爲にまうす所謂にあらず助け給ふ事は佛智の不可思議なれば彌陀の本願末代無智の衆生をだに助け救んとあ

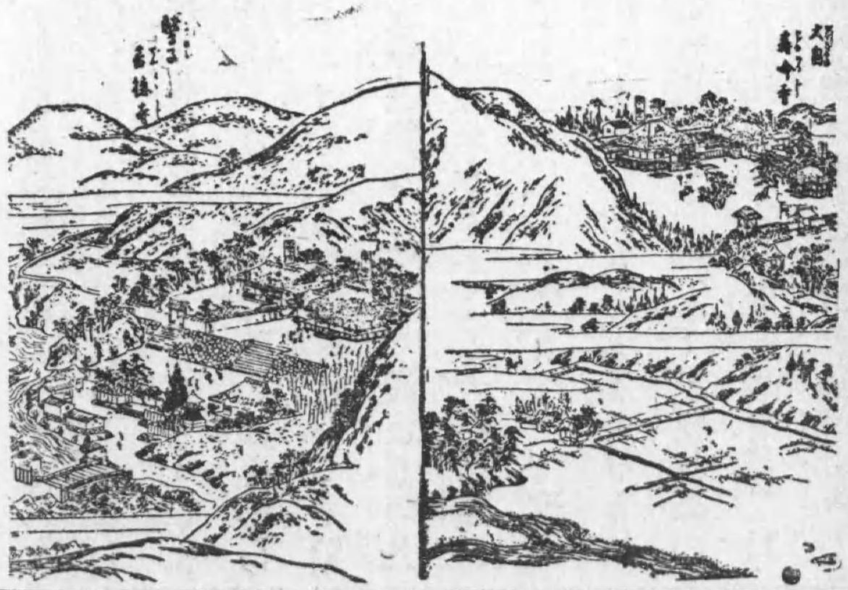
る御ちかひに打まかせ露疑ふ心なく諸の雜行雜修をふりすて〳〵御助は一定往生は治定と一向一心に信じ奉るより外に別の子細なしかく信じ參らせし上にては報謝の稱名懈怠なく寢ても寤ても唱ふべし唱ふる爲めの稱名なれば幾千萬唱ふるも佛恩報謝の爲と心得なば是ゞ誠に他力本願の念佛なりといと念ごろに御勸化あらせ給ひしかば入信忽ち其意を發得し涕泣歡喜斜ならずあな淺ましの凡夫心や是まで自力をたのみつる事のわろかさよかゝる大善智識に値遇なし奉らずば今度の一大事は遂まじきにあり難有やとて聖人を三拜し御弟子の列に具らん事を願ひしかば聖人も其志の厚きに免じ終に御契約ましませし程に入信彌信心堅固にして日夜朝暮のわかちなく佛恩報謝の稱名をこそ喜ばれけり時に貞應元年春二月聖人の命によつて當寺を開闢し專ら他力本願の奧旨を弘通ありし

が建長三年三月二十五日不思議の大往生をゝ遂られけり　入信始めは穴澤に住し次に野口に移轉し終に大畠に不退轉の基趾を開く　○寶物六字名號畫像の彌陀　皇太字の肖像等共に聖人の眞筆なり

○壽命寺は中津川のほとりにて船場多し此所より水戸の湊迄凡二十里ばかりありしかれども此邊御舊跡多ければ舟を雇ふべからず見殘すかたあれば悔とも及ばず

額光山善德寺　西派　同州同郡鷲子村にあり

當寺は二十四輩第十二の正當久慈善念房の遺跡にして水戸坂戸善住寺同系なり　○本尊安阿彌の作幷高祖聖人御眞筆畫像の彌陀十字名號等を安置せり



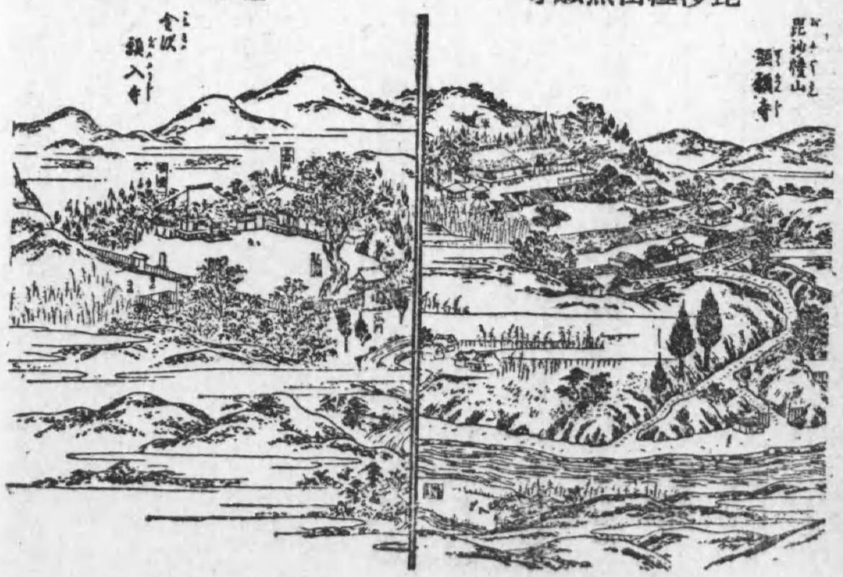
毘沙幢山照願寺　東流　右同所にあり

開基は二十四輩第十七番奥郡念信大德とゝ聞ゐし

○本堂九間四面本尊彌陀佛春日作

念信房舊俗の芳姓は源氏にして清和天皇四世の孫多田滿仲四代の後裔伊豫守頼義の三男新羅三郎義光の二男光長より三葉頼氏には四男高澤伊賀守氏信これなり代々弓箭の家なるが就中氏信の性稟驍勇にして膂力人に絶し智謀兼備の武人たりしに宿緣のなせるにや當國稻田の房舍に於て聖人に謁し奉り專修專念の法旨を聽聞し忽ち他力本願の慈海に悟入し淨土の眞門を發得す是に依て貞應元壬午年永く火宅の門を出て遠く菩提の室にのぼり法名念信と賜り

御弟子の列に加はりしかば即毘沙幢村に一宇を起立し照願寺と號し專ら他力念佛の法流を遠近に弘通せり終に寛元三乙巳年三月十六日寂を示すと云　寺說に云念信房未俗たりし時は當寺の上なる高澤山に居城してありしが聖人の御弟子と成り毘沙幢村に一宇を營築せしより是に移りて住持す此を以て其子伊賀守高澤の城を相續して有けるが是又老年に及びて其子に居城を讓りみづから剃髮して照願寺に隱居すすべてかくのごとくする事三代信光の時に至つて高澤の城廓を毀ちて佛場と成し毘沙幢村より寺院を引て合立し是より今に退轉せずといふ○什寶　二河白道の文聖人御筆奥に六字名號御自名行年八十歳とあり　御繪



傳四卷　康樂寺法眼の畫轉法輪大政大臣公忠公の御傳文外題奥書とにも覺如上人七十五歳の御筆也　以上三品とも

鹿崎山慈願寺　東派　下野國上那須郡烏山粟野にあり

當寺及び粟野山慈願寺とも拜禮の巡路なれば次手を以てこれを擧るのみ緣起圖說に至つては國分の例を以て下野國へ入としるべし

粟野山慈願寺　西派　同州同郡馬頭武部郷にあり

太子堂願入寺　東派　常陸國久慈郡上金澤にあり

當院は如信上人の御廟所なり是即御門弟乘善法師の遺跡にして上人御入寂の地也委くは岩船願入寺に記す岩船願入寺の御持所役寺二區あり○什物上宮太子御自作の尊像國若御再興如信上人の御影下野守殿御筆等なり○銀杏の大樹上人御墓の傍にあり來由未詳

●陸奥國

寶池山蓮生寺　東派　陸奥國白川郡棚倉にあり

當院は淨華臺院と號す二十四輩第八番證性法師の遺基なり○本尊

阿彌陀佛運慶の作

爰に開基證性法師の俗姓を尋るに桓武天皇の後胤鎮守府將軍上総介良兼四代の末孫左衛門尉致經の五男秩父六郎將恒には七代の嫡流將恒より武基武綱重綱重　畠山次郎重忠の二男小次郎重秀是なり然に弘重能重忠以上七代也父重忠及び舍兄重保讒言によつて誅伐せられける東鑑を按るに此時外戚北條氏威權つよく既に賴家公を蟄居せしめ幼稚の實朝公を以て三代將軍とし時政これに執權し天下の政事をほしいまゝに執行ふ程に權勢日々に盛んにして宗室列侯誰有て渠が命に背く者なしたゞに元久元年十一月四日坊門大納言信清卿の御娘將軍家へ入輿あるによつて兼て鎌倉よりも迎の武士さしつかはさる其中に時政が末子左馬介政範京師におひて病死す爰におひて御下向延引におよびける間武藏守朝政が六角東洞院の弟におひて酒宴を催しける程に酒興のうへ主人朝政畠山六郎重保と爭論し朝政既に重保を取て席上に押ふせんとせしに重保はもとより聞ゆる大力の勇者なれば其まゝ朝政が胸板を一足に踏倒すなにかはもつてためらふべき朝政即座に息たゑたりありあふ人々かくと見るより大にをどろきさまゞ〳〵に痛はりしが漸にして辛して息出たり爰におひて兎や角あつかひに及びいざ中直しの酒酌んと數刻におよびてみな〳〵退出したりけり然るに武藏守は深く此事を遺恨に思ひいかにもしてこれを報はんと日夜心を苦しめける其後入輿の事もとゝのひ朝政も鎌倉に下向しけるがもと此朝政が妻は父の方の娘にして執事時政の聟なれば時々畠山父子隱謀の企有よし讒訴し又密に稻毛三郎重威入道を語ひ其聞へまぎれなきむね證人たらしむ其上牧の方朝政に荷膽しだんゞ〳〵に云なされける程に時政大にいかりを發し直に江間泰時北條五郎時連に仰せて急ぎ畠山父子を誅謬すべきよしなりければ泰時たゞならぬ事に思ひ申さるゝやう重忠が忠義に於る君臣知らざる者なし殊に右幕下禮遇老臣にして恩寵他にたへたればいかでかさる事の候べき尙も不審にたばされば此ころ重忠在國の折からなれば御使を立られ聢と其實否を糺明し其上事を行なはるゝともおそかるまじと再三たしなめけれども時政一圓承引せず既に渠が一家たる稻毛入道等これを證とすれば謀叛更に紛れなし若疑々に及びて渠より押よせなばいかに悔とも甲斐有まじとある程に今はせんかたなければ佐久間太郎等を以て先鎌倉にありあふ六郎重保が宅を十重二十重に圍ましむ重保さしも豪勇なりといへ共多勢に敵する事不能主從大わらはに成りて今日を一期と覺悟し思ふまゝに戰ひ終に殘らず討死す此事早くも武藏國菅屋の館に聞ゑしかば重忠一族郎黨等をめし集め我將軍家に對して不忠の心をいだく事片時もなし然を讒諛のために家聲を辱しむる條口惜き次第也我其赤心をあらはし汚名を雪すんば有べからずと即舍弟重清同重宗二男重秀郎從には本田次郎近常榛澤六郎成清等以下百三十余騎引卒し既に鎌倉に進發す此時鎌倉には最早重保を誅する上は重忠にたひて一刻もさし置べきやうなしと大將軍には江間太郎泰時北條五郎時連和

田左衛門義盛を始めとし都合二万余騎野にも山にもみち〳〵て其勢あたかも雲霞のごとく襲ひ來りしが左右なく武藏國二俣川にて行合たり近常成清これを望みて大に驚き重忠に向ひ只今討手の勢を望むに幾千萬騎といふ數をしらず然るに此纔の小勢を以てむかはんはたとへば石を抱て不測の淵に入がごとし急ぎ本所にしりぞき此軍兵を引うけてはな〳〵しき一戰をとげ給へと云に重忠忽ち色を變じやをれ汝等かりそめの云を吐事なかれ今度我進發するゆゑんは前にも申ごとく全く將軍家に敵するにあらず彼讒徒をたいらげ我無實を明さんと欲するのみなり正治の頃梶原景時一旦の難を避んため一の宮の舘を去て終に途中に於て誅に伏せり是又暫時の命をおしむに似て士たる者の恥る所且我よりして彼が術中に陷ゆゑんなれば唯このまゝに討死し死後の汚名を取べからずとあるにみな〳〵感激せられ一度はいかり一度はなみだにくれあさましの世のさまやと齒がみをなしてゞ打立たり頓て双方間ぢかくすゝみける程にかねて期したる事なれば重忠が手は何れも今日をかぎりのはれわざと斬ども突ともいとはゞこそ身をなげ打て戰ふほどにさしもの大軍したゝかに討なされ色めきたちてみへけるが天運いかなる事にや黨甲三郎季澄がはなつ矢に哀れむべし右幕下隨一の忠臣と聞へし秩父庄司畠山次郎重忠行年四十二歳を一期として終に冥鬼と成れりされば味方は大將既に討れし事なれば各心行ばかり苦戰しみな〳〵自害をぞしたりけり　此時重秀年二十三も父と同じく討死せしよし流布せしめ密に身を遁れて京師にのぼり栂尾明惠上人の禪扉を叩き人間の不定芭蕉泡沫に等しく就中武門のならひ夕あしたを期すべからずさるにても今度我父重忠舍兄重保を始め一族郎等に至る迄非命の死をいたす事我其子弟の身として存命すべきものならねと根株既に盡はてなば誰か一人菩提を訪ものもなく一類の寃鬼ながく惡趣に墮落し修羅の妄執散ずるの期更になしこれによつて我一人武を菩提の爲にすて恥を出離の道にしのび竊に法味をあまんして是まては推參せりあわれ上人大慈大悲をたれ給ひ圓融の道を示し給へと泪とゝもにかこちしが上人いと殊勝の事に思し給ひ即渠がために華嚴一乘の法を慇懃に諭し給へば重秀歡喜踊躍にたへず剃髮染衣の身と成り名も惠空と改め上人に隨從し菩提を勤る事尤深切なりかくて年月を積ごいへとも聖道の難行苟且に修しがたく圓頓の一乘容易悟得事能はざれば惠空ひろかに思

へらく人各長ずる所ありて身に負はぬ業を強てなさんとせば千百年を經るとも終に其甲斐有べからず然るをいはんや人間わづか六十年今已に其半に及て二十八歳かぎりあるの年を以てかぎりなきの行を修せんとす是より愚なるはなし我きく今東方に他力眞宗とて易行直入の法盛んに行はるゝよししかず速に是につかんにはとて

朝倉蓮生寺

明惠上人の徒弟となる

乃承元四年十二月二日また夜ふかきに山をしのび出東路さして下りけるが宿縁の淺からざるにや此時高祖鸞聖人常陸の國小島郷に弘法まし〳〵ければ直に彼所へ立越聖人の淨刹に尋詣時に建保二年來意をつぶさに物がたり仰ぎねがはくは菩提の要路に導き給へと渴仰のけしき深かりしかば聖人奇特の思ひをなし給ひ夫今や末世濁亂の凡夫いかでか聖道の修行を成就する事を得んしかず自力の功德をたのまず他力本願の如來に打まかせ奉りて雜善餘行をふりすて〻一向に報謝恩德の名號を唱讃し專修專念なる時は彼佛力不可思議の利益廣大にして自己の往生は決定證得し順次に神通方便を以て有縁の衆生を濟度せんにおひては何れの惡趣にしづみはてし親屬も忽ち淨土の東門に導ん事努々疑ひ有べからず善哉惠空つとめよやこいこゝまやかに教導なし給ひしかば惠空は歡喜の泪せきあ

へず立所に信心受得し即本宗を改め眞宗に歸依し奉りける程に頓て名も證性とあらため給ひ御弟子の列に加はりけり然しより以來信心稱名怠る事なく終に文永二年四月廿五日犬飼の房舍にして往生の素懷をゞ遂られけり（時に八十四歳）其後眞弟證光法師遺跡を再興しこれを蓮生寺と號すとかや（初めは下野國塩屋郡狗飼といへる所に創立ありしが第十二世宗覺代寛永四年に至て寺を當所に

證性上人夢中に一族成佛得の相を感す

引うつすと云又世傳にいはく證性房ある時夢むらく七寶の池に金色の蓮花五六十根生したり其蓮臺のうへに各妙色の菩薩端座し給ひ今此各位は即これ畠山の一族なり汝が他力信心の功德によつて實に値かたき彌陀の悲願にいざなはれ悉皆淨土の往生を受たりとまざ〳〵しく感得ありしかばこれによつて證光房坊舍を修補して初めは華臺院と號けしが後又蓮生寺とあらたむと云上來の緣起は悉く大谷遺跡錄によつてこれを記す然るに寶永の記享保の記ともに證性房發心より入寂までの年代大に相違有未だいづれが是なるやしらず後學これを正さば幸甚ならん

福島康善寺　西派　同國しのぶ郡福嶋にあり

當寺は聖人の眞弟富田明教房の遺蹟なり

綾和稱念寺　西派　同國宮城郡仙臺府國分町にあり

二十四輩第十一番親鸞聖人上足無爲信大德說法利生の古跡也（無爲子とも稱す俗傳發心の緣起等は越後無爲信寺の條下に記するが故に畧之）其後是心覺圓源海專定なんど打つゞひて法莚を設け化益ありし所の靈場也（上來は全く大谷遺跡によつて是を記す然るに當山緣起に云く當院は橘昌山本誓院と號して開基無爲信房と申は人王三十一代敏達天皇四世の苗孫左大臣橘諸兄公正統の系譜田邊の城主橘民部少輔是なり常州稻田におひて聖人の御弟子と成り當國

に化益し終に弘安二年三月十五日法臈八十一歳にして往生を示すと云々越後無爲信寺の條下遺跡祿の傳記にこれを校するに俗姓の譜系入寂の年曆大に齟齬せり未何れか其是をしらず

○塩釜明神は石碑より大路へ出比丘尼坂を經ていたる村の入口昆布を商ふ家軒をつらねて夥し石の華表より北に向ふて石段あり惣して當社の結構云んかたなく實に大國の惣祠なり門の右手に文治年中泉三郎献ずる所の鐵の燈籠あり祠の南なる市中に古釜四ッを安す傳へて云これ昔明神塩を煮た給ふ處也とぞ按るに藻塩草に田村將軍蝦夷征伐の時五萬八

福島康善寺

甲冑堂

千人の兵粮を炊ぐ所の釜也とも云釜中水ありて大旱にもかれず尤眼病に奇驗ありとぞ。

抑當社六所明神祭る所は塩土老翁と申奉りて紀伊國熊野塩屋王子の神社と同一体にして伊弊諾等の御子なり始めて塩を燒給ふを以て名づけ奉るとなん當社の東西は即知賀の浦なり依て千賀の塩釜とも云也これより船をやとふて浦の景色嶋々のながめには雛が嶋より松嶋や雄しまが崎の名にしれふ其名區を尋れば海上三里にして其間の奇趣絶景實に應接いとまあらず其風色雅致は畫もるがく事能はず書も記する事を得ず

仙臺稱念寺

「みちのくはいづこはあれど
　塩がまの浦こぐ船の綱でかなしも」

○松嶋はもと松を以て名とす其嶋〳〵の岩石に根をさし海風のためにふかれて屈曲假蹇龍のごとく虎のごとく各趣ありて實に奇觀とす塩釜の浦より茲に至るまでの嶋々各其形によつて名を設け或は甲嶋鎧島鳥帽子島のたぐひ其數かぎるべからず南は雄島に對し東は福浦島又大堂岩頭にあらはれて鼎立したとへば假山盆池に對するがごとし眺望の美蓋し海内第一といふべしむかしより此地に遊ぶ人多しといへども其觀るところ人々ことにして景勝の順次模寫の形容皆異也是其風色の多きに迷ふが爲なり望觀の地も又一ならずといへども富の山の半腹大仰寺の門前にしくものなし前件の諸勝目下に碁置して壯觀ならびなし當山は田村將軍大同年中の建立にして洞水和尚の開基なり

「秋ぎりのまがきが島のへたて故それともみへぬちかの塩釜」　重量

「たち歸り又も來て見ん松島や雄島苫屋波にあらすな」　俊成

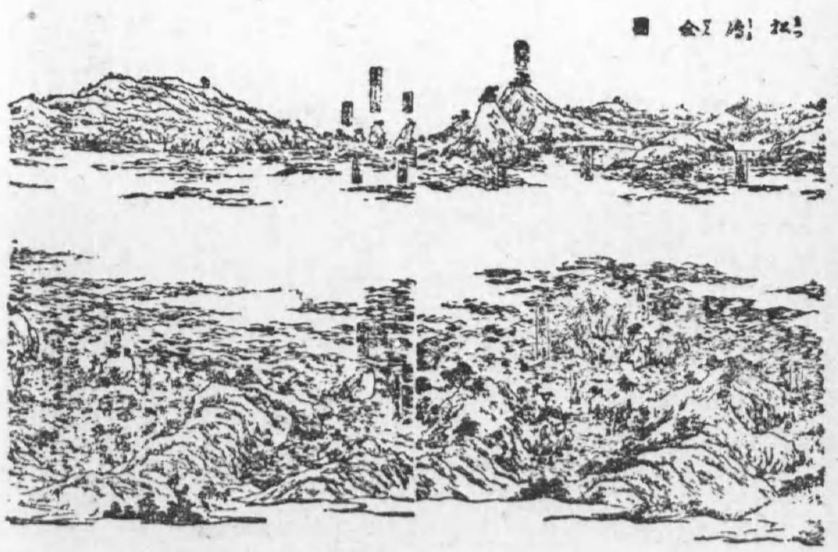
○瑞岩寺一に松島寺と號す當寺の開祖法身和尚といふは常州眞壁氏の臣平四郎といへる武夫なりしが身の不遇を感邀し出家遁世して終に入宋し經山の寶窟に苦行する事十一年歸朝の後最明寺入道時頼に歸依せられ當山を開基すといふ其偈に云

遠登徑山分風月。還披圓福大道場。法身透得無一物。本是眞壁平四郎。

方丈庫裏の結構障子の畫は皆時の名工をきそひ金殿樓閣きらびやかに十三の塔頭甍をならべ莊嚴いはん方なし○法身窟は惣門の前なる月見崎にありこれ昔最明寺入道諸國行脚の折ふし危難を避られし所とかや其後夢想國師此窟中にたひて天台止觀を講すと云○雄島一に御島とも日本武尊船をよせ給ふを以てかくはいふとゞ島上妙覺菴は見佛上人の開基なり頼賢和尚の碑あり文及び書とも元僧寧一山の成す所也○松吟菴同雄島にあり芭蕉の碑を立其石面に

「朝よきをたれまつしまそ片こゝろ」　はせを

松島之圖



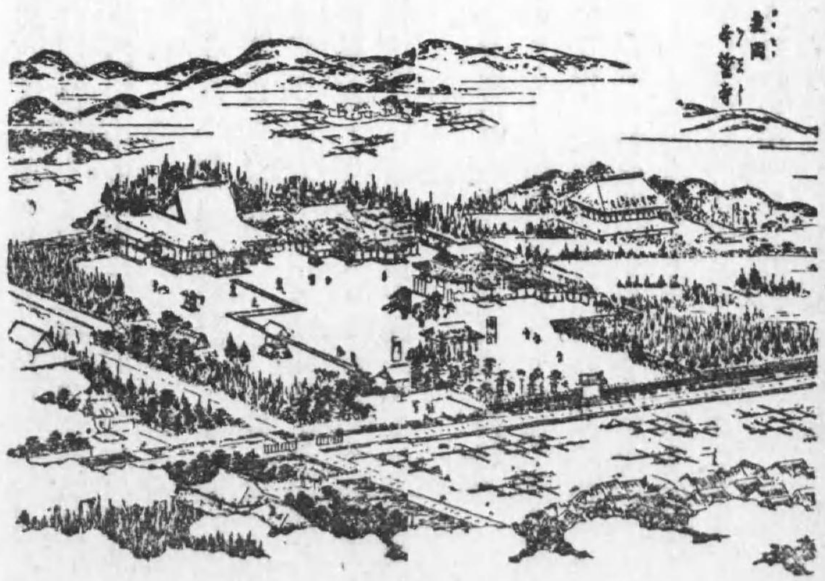
石森山本誓寺　東派院家　同國岩手郡南部森

岡の城下にあり

重願院と號す二十四輩第十番是信大德の開基なり○本堂十二間四方本尊阿彌陀如來惠心僧都の作塔頭四坊あり

當山の開基是信房と申すは舊吉田大納言信明郷とて藤原氏の枝族たり事に坐せられて暫く越の前州にさすらへの身と成りおわしけるが頓て勅免あつて歸洛有べき

森岡本誓寺



にみづから風と心に感する事ありて思ふやう夫娑婆轉變のありさま老若貴賤の差別なく曾て常ある事なし我今たとひ勅免を蒙ふたゝび雲の上に登り榮花の身と成るといへども無常の風は夕朝を待ずとかやされば今日は歡樂の法筵につらなるも明日は阿鼻の大城にむかふ實に一期の大事今の時なれば永く人間のまじわりをたち深く菩提のみちを尋んと即歸洛をこゞまりてあけくれ知識の値遇をもとめらる或夜曉に及んで不思議の靈夢あり青衣の童子枕上にたちて唯何となく

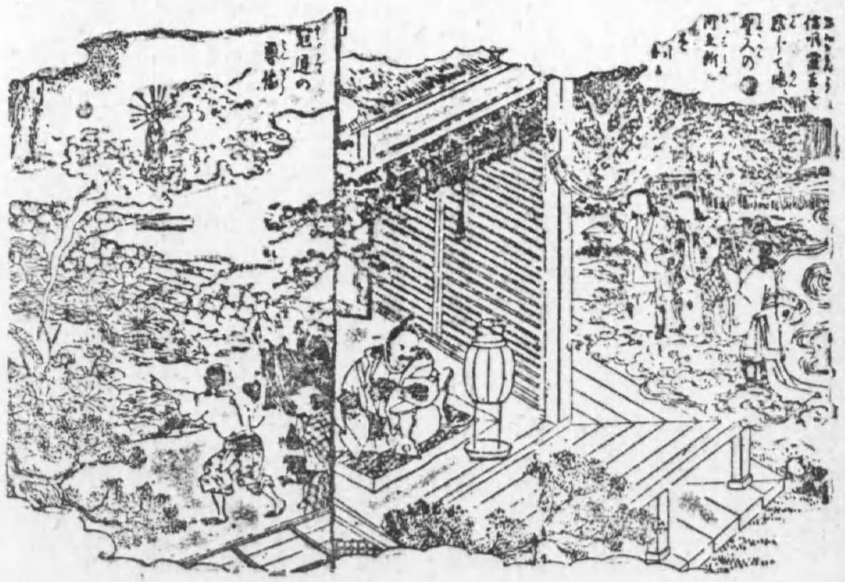
「おしへ善信の聖世に出て常州に法のはなさく」

とくりかへし〳〵三反まで吟じつゝいづくともなくうせにけり信明忽ち驚き寤てつく〴〵と歌の心を案ずるにをしへよきまことの聖とは眞名になをして善信聖とす又ときはことはこれ常陸國を云な

り善信聖人といふ大知識まし〳〵て末世の衆生を教導なし給ふといふ靈告なるべしと感涙うゞろにこゝめかねまた夜ふかきに立出て常陸にこそは趣きけり是即信明が宿因發達の時なるにや靈告にまかせて彼地にいたり尋訪ふに里人ども答へけるは其善信と申すは即親鸞聖人の御事にて今程は近き此小嶋の鄕にまし〳〵專ら弘法勸化をなし給ひ誠に有難き知識にて人皆如來の御再誕ごころ申す也といふに信明いよ〳〵奇異の思ひをなし直に小嶋の里に至り聖人に謁し奉りあはれ大誓の悲願にて我等ごときの凡愚をも出離の道にいさなひ給ひ門下の末席にもさし加へ給はれかしと渴仰の涙もろともに打わびけるに聖人も渠が發心一朝の事にあらざるをかんがみ給ひ則本願他力の要法專念稱名の正業をのべ末法五濁の惡世に至ては貴賤凡下の差別なく又善惡邪正の隔もなし生死の患難を助らん事は自力聖道の菩提にては永劫を經るとも及ぶ事なし爰に彌陀本願の他力といふは末世凡愚の衆生をして淨土にむかへ給はんと萬機普益のみのりなれは唯一筋に阿彌陀佛の本願力に歸命し奉りし上は更に疑ふ事なく佛恩報謝の稱名怠る事なくんば淨土に往生せん事は大地を打てはづれざるがごとしといと念ごろに教導あらせ給へば信明隨喜の泪にむせびあら有難や忝や惡業煩惱の此身をだに一向に歸依し他力にまかせ奉れば此まゝ助け給ふなる御本願いかでかたのみ參らせざらんと即信心獲得せしかば御弟子の列に加へられ法名をも是信房とゞ賜りけり然りしより以來且夕聞法の利益を蒙り常に聖人に隨ひて御給仕怠らざりしが聖人つく〳〵渠が信心の厚きこと才の美の凡ならざることをはかり給ひ或時是信に宣ふやう夫奥州の地たるや元來大國にして東北の堺を蝦夷

に接し誠に我日本の東埵たり其人物質朴にして禮讓なく專ら自己の力をたのみて悍猾の行ひを尊び氣稟をのづから偏なり此を以て昔は王化をはゞむの徒やゝもすれば蜂起せり其邊鄙の村里に至つては佛名をも知るものなく五戒を犯し五逆を行ひ自業自得の罪に沈むも終にこれをさとる事有べからずさあらば廣大無邊の佛願

信明靈告を感ず　冠蓮の尊像



にも洩ぬべし我儞が器をはかるに即其人也急ぎ彼地に立越眞宗念佛の功德を弘通せば我本懷を滿るに足れりと有けるに是信房は今さら師に別れ奉り聞法の遠さかるを深く歎きさまゞ固辭せらるといへども聖人强て命じ給へば今は師命のがれがたく竟に別れを告て奥州にこゝ趣きけりかくて當國斯波郡石が森といふ地に弘法の梵宇を開き本誓寺と號し專ら教導有けるが易行直入の法門なれば忽ち遠近の道俗日夜に群集し是信大德の化益を蒙る者其數をしらずかゝりけるほどに一時四方に芳名高く緣に隨ふて他邦に屈請せられ教化あまねき中にも信州にはとりわき眞宗有緣の者多ければ即彼地にたひても一宇を起立し弘法あられけり（是すなはち松代本誓寺也聖人御眞筆本誓寺の額はこの松代に傳來せり）然に文永三丙寅十月上旬の頃より是信房聊違例にましませしが同中旬第四日頭北面西右脇にして念佛の聲もろともに大

生をゞ遂給ひき門弟等打つどひ戀慕涕泣の餘り荼毘の後遺骨を拾ひて千本松といふ地に是を納とな ん嗣子相續して第十六世賢勝房寺務の時にあたつて天正十八年石が森より移轉して今の森岡に造立すと云○什寶宗祖聖人御自作の肖像 此眞像は聖人四十三歳の御姿にして是信房へ御記念の爲自ら彫刻なし給ひたる者なりしかるに中古當寺回祿のためにたゝられ堂宇ことゝく燒亡せしが其時此尊像見へさせ給はざりしにともに燒失し給ひけるよと諸人歎きかなしみけるがやゝ日數を歴て後いづくともなく境内にて讀經稱名の聲しきりに聞へしかば人々奇異の事に思ひ其聲に隨ひ尋ねもとむるに即寺内蓮池の底よりゞ聞へけりこはそもいかなる事にやと矢庭に彼蓮池を探りもとむるに汚泥の中より尊像をぞかつぎあげにけりさては此ころ聞へし讀經稱名の御聲は此尊像のいまし所を告しらしめ給はんがためなるそやと皆々渴仰感涙し再び父母をむかふる心地して歡びあひけるぞ理りなり此時尊像の御額蓮根一莖黏きてありしが其痕自然と御ひたいにのこり附たればとて世に蓮かふりの尊像とこそ稱しける　聖人眞筆畫像の阿彌陀佛光明本十字八字泥筆の御名號此數品は是信房當國へ發向の砌聖人御自筆に遊ばされ授與し給ふ所となん

彦部光照寺 本派

本誓寺の塔頭にして聖人の徒弟信圓房の遺跡なり

信圓房は舊吉田大納言信明郷の家臣千原長左衞門尉是也信明郷さすらへの折から同じ家臣橋本作内と丶もに隨從して配所に至り供給怠らざりしが其後信明常州小嶋におひて聖人の御弟子と成り給ひし時これを是信房といふ本誓寺の條下に委し長左衞門もともに御弟子と成りて法名を信圓ゞ賜り主人におとらぬ信者にてゞ有ける然るに是信房師命によつて奥州下向ありし時信圓及び作内もろとも附ろひて下りしが信圓は斯波郡彦部にたひて文永二年三月廿五日終に入寂す其後彼作内も同所に身まかりけるがうの子孫今に彦部村に連綿たりとゞ其餘三ケの塔頭みな所縁ありて何れも什物等傳來すと云

●出羽國

吉水山善證寺 西派 出羽國秋田郡六郷にあり

寛喜院と號す是信房の遺跡にして緣起は盛岡本誓寺に同じ二十四

輩第十番の席を持てり○本堂九間四面本尊阿彌陀如來

惠心の御作

○當山の寺説に云是信房は源三位頼政の曾孫常陸介宗房の御事なり稲田にたひて聖人の御弟子と成り當國に教化し一宇を建立し本淨寺と号せしが蓮如上人これを改めて善證寺と号し給ふと云々盛岡及び松代本誓寺の傳記とは大に齟齬せりしばらくこれを擧て後の知識を待つ

眞光寺 東派 同國同所にあり

實珠山と號す緣起詳ならず

○本堂九間四面本阿尊彌陀

六郷善證寺　同眞光寺

如來聖人御作

二十四輩第二十一番の席を持てり

●下野國

鹿崎山慈願寺 東派 上那須郡鳥山粟野にあり

二十四輩第十三番粟野信願房の遺跡なり○本堂阿彌陀如來を安置す 法界次第の本尊と号す聖人の御作

側に聖德太子の木像あり

傳に云聖人小島の鄕御勸化の折から大畠村壽命寺の上の山に當つて毎夜光をはなつものあり聖人これを怪しみ光をしるべに尋行給ふに

象潟

皇太子の木像唯御首のまし〳〵て此奇瑞をなし給ふになんありけり爰におひて聖人御手づから惣体を作り彼御首に接給ひ當寺に附與し給ふといふ

信願房と申すは俗姓清和天皇の後胤鎮守府將軍源義家公五代の孫新田太郎義俊の息なり其頃上は下を虐げ下は上を凌ぐの風俗久しからずして世の亂れと成ん事を察し隱遁の思ひ頻にして即常州那珂郡烏喰村に避居し藤井八郎信親と號せしが終に承久元年の秋行年二十九歳にして高祖聖人の御徒弟と成り信願房と名く始め師命によつて河内國に至り一宇を營築して眞宗を弘通し（即河州若江郡八尾慈願寺これ也）後又當國上那須郡粟野鹿崎に堂宇を建立し專當國に弘法せり是卽當寺の根元たり聖人既に御歸洛の日に至つて信願則これを供奉し相州御淹留の内日々昵近給仕せられけるが相州の道俗聖人の御德をしたひ奉り御輿をさへぎり御發駕殆ど延引に及びしをさま〳〵に諭し給ひ御上洛の後信願房に命ぜられ相州を敎導なさしめ給ふ

此におひて信願鎌倉に一宇を造立し稻荷山淨妙寺と號し勸化弘法さらに怠慢なかりけり（淨妙寺後に參州赤澁に移轉す今の中の鄕淨妙寺是なり）信願房かたのごとく所々に基趾を開き專ら當流に功勞をかさね終に法臈七十八歳にして文永五年戊辰三月十五日大往生をゞ遂られけり其後數代を經て延寶八辛酉年所緣ありて當院を今の烏山にうつすといふ

烏山慈願寺

武部慈願寺

粟野山慈願寺　西派　同郡馬頭武部にあり

當寺も右信願房の開基にして烏山武部両慈願寺何れか根元枝流たる事をしらず或説に云信願房教念大德嘗て粟野鹿崎に一宇を造立し慈願寺と号す後所縁あつて天正年中當地に寺をうつすといふ又宇都宮に別院を營築しこれを觀專寺と号すとかや○本尊阿彌陀如來聖人御作

高榮山法得寺　西派　同國都賀郡小山莊佐河野村にあり

當院は舊天台宗にして醫王寺と號せり往昔聖人の上足性信大德諸國化導の砌頃しも仁治三年彌生なかばの空當所に行くれ給ひ不慮に此寺に投宿あられしが時の住僧當寺第三世と云潭空なるものおのが貴ふ所の一乘圓頓の法威を立て性信大德を詰りけるに性信徐々に我他力本願の玄旨不可思議の妙意を以て響の聲に應ずるごとく其機をはづさず通昔問答有しかば潭空忽我情の角を折き他力念佛の安心を決得し終に性信の門侶と成れりこれによつて性信中興の開基

とし卽醫王寺を改め上宮院法得寺と號し三ことせが間當寺に淹留して專ら弘法し給ひけり○本尊笈佛如來聖人御作にして性信房れいほうゝをりやくすの負給ひし所なりとぞ　靈寶畧之

稻木山觀專寺　西派　同國河内郡宇都宮にあり

二十四輩第十三番に屬す同國上那須郡両慈願寺同系の寺也緣起由來とも両寺の下に委しく記すを以て爰に畧す

花岳山安養寺　西派　同國同所にあり

二十四輩第四番柿岡乘念房の坐を持てる寺系なりと云花見の岡親鸞池の御舊跡は當寺の持所なり寺説に云く聖人花見岡の草庵を御弟子順信房へ附屬し給ひ安養寺と号すとかや未いづれか是なるやしらず後來の識者これをたゞせよ

室の八島　同國都賀郡にあり

當國惣社大明神當所惣社村林の内に社あり社人十二人別當神宮寺祭る所の御神一坐大山祇尊と申すは富士淺間權現の御親神にて在ます俗傳に云當社の御神淺間權現の御身がはりに鰊といふ魚を野邊

送りして燒給ひし舊跡にして今に其所は草木も生へず常に烟り立のぼるといふ按るに室の八島のけふりは歌にもよみふみにも書て只其けしきの常ならぬを愛するのみなり且それ人の骸を野邊送りして荼毘する事は元興寺の道昭法師にはじまりて往古には我東方に火葬の事曾てなしまして神代の事をやすべて古くつたへたる說には此類の事多し

高祖聖人當國御旅行の折から所緣ありて御寄拜有し所とゞ

花見岡親鸞池　惣社村を經て思ひ川を越大高寺村の領内丸山にあり是卽花見が岡なり

宇都宮安養寺　同勸專寺

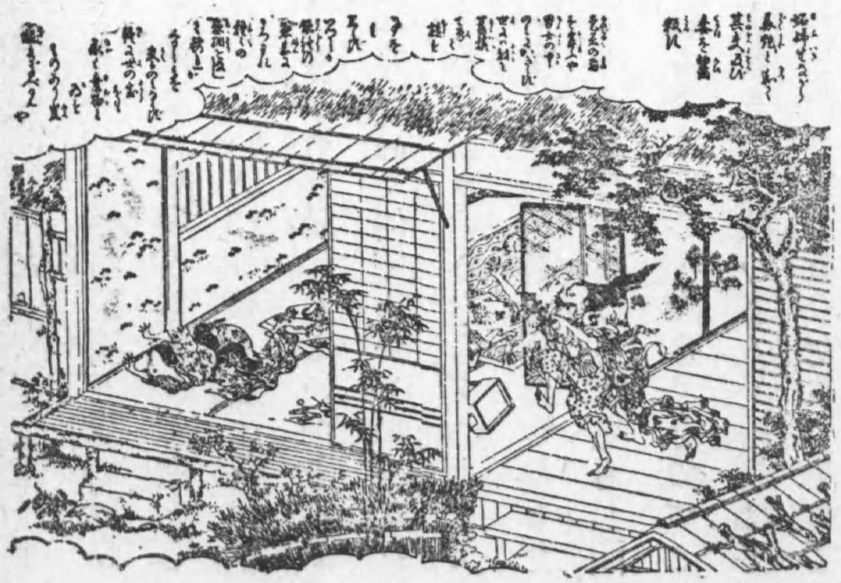
室の八島

花見が岡のむかしを訪にまことに宗祖聖人御一代利生方便數度ある中にも殊にすぐれて著明きものとや云ん偖も聖人時に御年四十三歳常州小島の鄕御敎化の頃しも當國都賀郡總社村室の八島の神官大澤掃部友宗なるもの仄に法德をつたへきゝ來り謁して申けるやう我等が在所室の八島なる近隣に一ツの深淵ありむかしより邪神栖て人民を惱ます事大方ならず爰におひて所の者ども相ともに計て渠が暴惡を宥ん爲毎歲春秋の二時牲を以て　牲とは猪鹿牛馬の類を以て備へ物とするをいふ也鬼神は舊幽冥のものにして無形の氣なり此を以てこれを祭るに獸類を以てするものはこひねがはくは其鮮血の腥氣に相感して納受し給はんとなりいにしへ天子みづから御狩をなし給ふも天神地祇を祭り給ふ料にあて給ふが故なり中古欽明の御宇我佛法東方にさかんにして生物の命をたつ事を憚りたもふより此事行はれすとなん春日の鳥かけなといへる神事は此遺風なり尙我佛法香を焚供ずるも不淨を拂ためのみならず其氣を以て幽靈に通ぜしめんが爲なり　これを祭るもし一時にても怠る事有時は忽ち崇りをなして人を取くらひ或は毒氣を以て熱病を發せしめ今に至て人民の歎きいふばかりなし我きく尊師慈願の

御誓には普く衆生を濟度し給ふとかやあはれ其徳行を以て彼邪神を降伏し諸人の災害を除き給はゞ誠に廣太の恩徳ならんと深く願ひ參らせければ聖人心におぼし給ふやう今我本願念佛を弘通する の秋なれば是又衆生結縁の一助也と卽領掌まし〳〵つゝ掃部が案内にて彼淵に至りつく〳〵と順覽なし給ひ我もと降魔の法を修せざれば元來邪神を伏するのいはれなしといへども多年弘むる彌陀の本願他力念佛不可思議の妙徳を以て徐に渠を教化なすものならばいかでか其甲斐空からん且夫毒蛇惡龍たりとも一旦神と崇るうへは罪なき人を徒に害するのいはれ更になしいかさま奇怪のありさまなりとて卽淵に臨て假の庵をしつらはせ自是に坐を占給ひ三部の妙典を飜し不可思議の名號を唱へつゝ其いとまには水中にむかひて恰も人に對するごとく宣ふやう汝此水中の怪もとこれ何等

の神にして里民を惱す事の深きやもし魑魅魍魎のたぐひにあらざれば或は是寃魂迷鬼將毒龍惡蛇の所爲なるやすみやかに其形を顯し我にまみへて改懺悔なすなら は我又汝が爲に拔苦與樂の佛果を得さすべししからずして尙も貪殘暴惡を恣にし人民を害するものならば邪はます〳〵邪にして神明佛陀のあはれみにもれ億萬刧

妬婦生ながら毒蛇となる



を經るともいつか惡趣を脫すべきと更に佛法廣大の利益を說こまかに御教化まし〳〵すべてかくのごとくして三日三夜を過し給ひけるに第四日の曉卒に水面波たちて逆まく水のうちより忽然として一人の女あらはれ來り聖人を禮拜していひけるやう妾は舊此里の者なるが生得嫉妬の思ひ深く假にも慳貪邪見にしていかり罵事常なりしかば夫なる者これを厭ひ元來家富て何くらからぬ身なれば竊に妾をゞやしなひぬ此妾容貌うるはしきのみならず心さま又やさしかりければ夫の寵愛大方ならず日々に行通ふ程にさなきだに胸の火のきゆるひまなき我なるにかゝるむつみごとを見もし聞もしうらみかこてるほむらの煩惱寢るまも忘るゝ事なくをのづと色めにあらはして物くるわしきさまなるを夫はいよ〳〵疎みはて妾を見る事仇敵のごとくなればよしこれとてもかの女ゆへなれば

私に渠を毒殺せんと謀もあさき女の智惠夫ははやくもこれをさとり妾をきびしくいましめつゝ鬼よ蛇よとのゝしりてさま〳〵打擲せられしがさしも我つよき妾なれども此折檻にはぢらひて再び夫にまみへんも面ぶせくされども生質のしつと去ざればこやせんかくやと心ひとつにせまりきて忽ち狂亂し今は人目も慙をもしらず唯一念の怒氣凝て鬼とも成れ蛇ともなれいかにもして彼女をとりころし胸の焦熱をやすめんと直に側室に至つて彼女を見るよりも鬼一口に喰んとせしを夫はかたへに在あはせこれを支へとゞめんとす人のつらさもいつまでゞおもひしらせまいらせんと其まゝ夫の咽に喰付てにぐる女を打たをし思ひのまゝにくひ裂しかば同じまくらに夫も女も死したるありさま少し心も行ばかりうれしかりしが俄に惚身もゆるがごとく大焦熱の苦み逼轉煩悶して暫し人事

も忘ぜしと覺しがありし姿に引かへて忽ち蛇形のようほひと成り我身ながらもたそろしくはちがわしくこれなる九尋無庭の淵にとび入再び人にまみへじとちかひしも蛇身の業火三熱の炎日夜にたへがたく心狂じて人を取くらふに鮮血咽をうるほせばふしぎや暫時の苦惱をまぬがるゝに似たればつみもむくひもわすれはて是まで數多の人民を惱ましつみに罪をかさねつゝうかむ瀨もなき我身なるに頃日尊き聖人の讀經稱名微妙の御聲水面にひゞき清涼として頓に我身の焦熱をさまし苦惱を忘れ身心全く安きがごとしかのみならず聞法の利益淺からず貪亂の心忽ちに飜り菩提を求る事更に切成り是を宿因の善根とし仰ねがはくは聖人大慈悲をたれ給ひ今より更に三日の間梵音たゝさせ給ふ事なくんば其功德を以て即蛇身を解脫し生を轉ずるに至るべしと涙とともにかきくどき三拜九拜なすとみへしが其まゝ水中に飛入ぬ聖人いと奇特におぼしめされ又もや三日三夜が間誦經念佛怠らず修し給ひ猶も本願他力不可思議の利益を說せ給ひ夫娑婆流轉の間三惡四趣を出やらず極重惡罪の者だにも我他力の悲願にはもるゝ事なくましてや汝懺悔の功力空しからざれば只一向一心に佛にすがり參らせ御助けは一定往生は治定とおもひとりさらば其うれしさには報謝の稱名を歡ぶのみにして聊自力を賴むにあらず偏に他力に打まかせ易行の本願ゆめ〳〵疑ふ事なかれといと念ごろに御慈訓あらせられ給ひしかば第七日の滿朝ふしぎや水中に聲あつて今度大知識の御敎化によつて尊き御佛の悲願をきゝ念佛の利益廣大なる事を信じ奉り南無阿彌陀佛と稱する內忽ち久來の苦熱を忘れ終に今日蛇身を解脫し忝くも天上の果を受たりいさや結緣の爲に得脫の姿を諸人にま

みへ參らせんと聞へしかば四隣の里人傳へきゝ我も我もとつどひ來て大に群集なしけるがはや午の刻とおぼしき頃涼風飄然として水面をはらへば碧こつたる潭心より一片の白雲立のぼり其中に彼女ありて虛空にのぼると見るまゝにやかて菩薩の莊嚴をあらはし寶冠をかたふけ聖人に禮拜し終に上天なしにけり此時虛空に五

毒蛇聖人の御教化に依て解脫す

色の花ふりくだり異香四方に薫じわたり地に落來れば則甘露と化しけるにゞ見る人奇異の思ひをなし聖人の法德眞宗の他力を驚嘆せすといふ事なし中にも掃部は大に歡び聖人の大德に屈伏し佛法不思議の殊妙なる事を尊信し渴仰のあまり其身神官なりといへども密に聖人を頂禮し彌陀の本願に歸命して更に二心なかりけりかゝりける程に群集の人々はいふに及ばず遠近の者も聞傳へ聖人の德行すぐれさせ給ふをしたひ奉り御教化を蒙り他力の宗門を尊重する者擧て算べからずされば東方邊鄙の國なればこれ迄邪見無法の族多かりしも今まのあたり蛇身天上の果を受再び牲の備もなく邪神の災害頓にまぬがれしかば深く念佛に歸依し專ら後世の一大事を心がけけるゝ殊勝なれ是この丸山は其時諸人群集して天花を見たる所なればとて花見が岡と名づく又淵を親鸞池と云とゞ共に

舊記に見へたり　傍に大蛇塚あり　即宇都宮安養寺の持所にして碑銘あり

高田專修寺　同國芳賀郡大内の莊にあり

當院は　阿彌陀寺又は無量壽寺とも云　宗祖親鸞聖人開基御建立の靈場也勢州一身田御門跡の御舊院にし今は御兼帶所と成れり○本堂十二間四面開山聖人御肖像を安置す○金堂　阿彌陀堂なり　本尊善光寺同一躰の如來當山の開闢其由來尤堂々たり當初元仁二年正月八日高祖親鸞聖人時に御年五十三歳當國大内莊柳嶋といへる所に行暮給ひしか紅日既に西にかたふき蒼靄孤村をかこみてはるか也何處に宿を求むべき方さへなければ蕭然とし彷徨給ふにかたへに大なる石　般舟寶石とて東西三尺七寸南北二尺七寸今に存せり　のありしかば旅のならわしとて即石上に座をしめ靜に念佛しておわしましけるに夜もはやいたく更わたり長庚明星將に東にのぼらんとする頃たひ一人の天童忽然として出來れり聖人これを見給ふに一

尺あまりの柳の枝に白紗の包を添て手に携へ東西に盤桓してうたふていはく白鷺の池のみぎりには一夜の柳枝青し般舟の磐の南には佛生國の種生ぬと朗に詠ずる事數回にして北に向ふて去んとす聖人急ぎこれをとゝめ童子はもと何國の人ぞと問せ給ひしかば即答てまうさく私はこれ明星天子本地虛空藏菩薩なり師に伽藍の靈地を示さんためさてこそ來たりまみゆるなりとて南方の水田を指さしこれ此柳島の地は往昔釋迦牟尼世尊說法ありし靈場にて則如意輪觀世音菩薩佛勅を受て方便利生を待給ふの梵區なり聖人早く此地に伽藍を建立し此二樹を植給ふべしこれこそは天竺白鷺池の柳又此包たるは正覺山の菩提子也とてかの二種を聖人に授與有ければ聖人かさねてのたまはく此地を閲るに惣躰沼田にして水溢れりいかんがしてか伽藍の地となし侍らんやと問せたまふに童子默

然として答へず直に水中に入ると見へしが終に其行方をしらず聖人いと奇特の思をなし給ひこゝろみに彼柳條を水田に挿み菩提子を座石の南方に種置給ひさらに石上にのぼつて念佛しておわしましけるが早夜もしらゝと明わたりたるに不思議や前に種給ひたる所の二種の靈木忽ち根牙を生しみるが中に二丈に餘れる大樹

高田専修寺

と成り枝葉上下蔓り緑陰四方に布り扨又彼水田の今まで溢れし瀦水何くにか流れ去り中央凸然として小高き丘と成れり（これによつて此地を高田と名く）しかば遠近の道俗これを見聞し一も驚嘆して聖人を尊信せすといふ事なしかくて此事隣國までもかくれなく人々渇仰のけしきをなす折からこゝに下野の國司眞岡の城主大内國行を始めとし久下田太郎秀國小栗の城主尚家眞壁の郡司春國相馬の城主高貞平塚の莊司重連笠間の城主基貞なんど時に名を得し候家の面々我劣らじと聖人に歸伏し奉り其尊重禮敬する事恰も如來世尊のごとく各自砂石を運び竹木を引て梵宇造立の草創をうながす程に老若貴賤の分ちなく集り來る人夫は雲のごとくいつの間にかは木石の山をつかぬしかのみならず常總二州の諸弟子奥羽両國の門徒の輩雲を凌き霧を分ちて群集し既に日あらずして精舍造立ならんとす然に

聖人宮村の草菴にまし〳〵て不思議の靈告を得給へり頃しも其年の四月十四日の夜子刻ばかりに一人の聖僧來てのたまはく尊師の願望今既に滿足せり此上は速に信濃國善光寺に來り給はゞ身我を分ちて師に授くべし伽藍落成の日に至てこれを安置し末世の衆生を引導し給ふべしと告おわり西に向ふて立さり給ひしか高田の地にて消うせたまふと見て夢さめぬ聖人歡喜斜ならず即御弟子性信順信の両大德を隨へ急ぎ善光寺に詣て給ふ爰に十九日の明がた善光寺の僧徒等本堂に會合して相ともに語て曰昨夜奇特の御告を蒙れり御本尊阿彌陀如來梵音を擧て曰く明なは我法弟善信法師聖人御事なるもの登山すべし兼て我軀をわかちあたふるの約あれば汝等謹で是を授くべしとまさしく聞へさせ給ひしと異口同事の夢物がたりこはうも不思議の靈告かなと檀上を拜し奉るに同一躰の三尊相

並んで立せ給へば一列十有五人の僧衆等佛勅のあらたなるに感涙膽に銘じ今に始めぬ本尊の靈驗各讃歎なしける折しも聖人は夜に日に繼で急がせ給ふ程に此時既に御着ならせ給ひしかば衆僧頓て迎へ奉り佛勅の趣きつぶさに物がたり檀上にまします一光三尊の黄金佛を奉し來り聖人に献じ奉れば聖人歡喜の涙ながら即袈裟につゝみこり笈にうつしまいらせて自これを負せ給ひ暇を告て立出給へば順信性信の両法師かわる〳〵助負まいらせ同廿六日宮村にこう下向まし〳〵けり　善光寺南門願證院は善信房傳記にも此事つぶさに記されたり誠に此三尊一光の尊像は三國無双の靈体閻浮檀金の聖容にして生身の如來にことならず其靈驗のいちじるしき事魏々殊妙にして最第一の佛像なり今現に當院金堂に安置して本尊と拜れ給ふ靈像これなりおほけなくも代々の帝天拜あらせ給ふにより稱して天拜の尊像と號くとかや　爰にたひて聖人志願悉皆滿足あらせ給へば同廿八日より御堂造立の釿初めを取行ひ給ふに他力の門徒等待まうけたる事なればかねて期したる飛彈信濃の畚匠等に命じ日頃

の精力十倍してさばかり結搆したる大御堂翌年四月上旬に至て金堂影堂をはじめ四門築地のかゝりまで悉く成就せしかば彼柳及び菩提樹を汀の左右に植させ（二樹とも今に繁茂せり）伽藍成就の御供養ありてめでたく徒移ならせ給ふ誠に權化不可思議の靈場なり其後聖人御年六十歳貞永元年正月十五日當院の御住職を眞佛上人（上人の俗傳諸說下條に委く出す）に讓り給ふ眞佛爰におひて第二代の法脉相承あつて終に正嘉二年三月八日法臈五十歳にして當院におひて寂し給ふ（此時上人御年八十六歳）これによつて同年十二月眞佛の法友聖人の御直弟顯智上人附法相承して第三代の住持職を授り給ふ其後七世を經て第十代眞惠上人の御時勢州一身田へうつり給ひ當所の古院は今に相傳して兼帶し給ふと云

○御靈寶聖人の御眞像　皇太子尊像　眞佛上人像（以上三体とも聖人の御自作なりこれ此眞佛上人の肖像は眞佛滅後に高田の顯智稱名寺の信證ともにこれをあらそひ信證は御首を取得て惣躰を造補し御首眞佛と稱し稱名寺に安す顯智は御身躰を取て是に御首を造り足し惣躰眞佛と號し當院に傳持せり）　顯智上人の像（自作）　般舟石（本堂の北林の中にあり）　柳樹　菩提樹（庭前に有）　高田九世の御墓（境内松林中に石塔あり）　明星の社（高田の入口にあり柳植の神社といふ）

○當院第二代眞佛上人と申すは當下野の國司眞岡の城主大内國行の舍弟眞壁國春の嫡男椎尾彌三郎春時是なり然るに伯父國行は桓武天皇の苗裔鎮守府將軍平國香鄕の末孫にして世々赫々たる家系なれば東國にたひて肩をならぶる者なき門聲たれどもいかなる事にや齡かたふく迄一子なかりしかばうき世の事をはかなみつゝ舍弟國春に國司を讓り自ら宮村の地に莵裘を營み隱居しておはしけるが聖人高田におひて種々奇特の有事を見聞し大に聖人の法德を尊信し渴仰のあまり宮村の隱居へ屈請し奉り聞法隨喜にたゑず終に剃髮して御弟子と成り高田入道殿とゞ申けり此時阪東の郡司莊司我も〳〵と聖人を歸依し剃頭法衣の身と成るも多かりしかば國行の舍弟眞壁國春是も同じ道に入んと深く心をこめられしかど舍兄の國司讓りうけ當職の身なれば思ふに任せず爰におひて嘉祿元年嫡子椎尾彌三郎春時をして聖人常隨の御弟子とゞ成しにける是卽眞佛上人の御事也

○世に上人の御事を平太郎眞佛房と同人なりと思へる輩多し是同名異人にしてゆめ〳〵混ずべからず○享保の記には上人の俗姓は平氏にして桓武天皇の後胤平經盛が子なり童名を保童丸といふ幼稚の時より法然上人の御弟子と成り佛眞と號し博識多才の大德なりしが空師沒し給ひしのち高祖に隨從し名を眞佛と改め建保年中結城稱名寺を開基し正嘉二年三月八日四十三歳にして寂を示す眞佛

生涯開闢する所の靈區すべて三ヶ所稱名寺創建の後一男信證に附與し又下野國高田專修寺を起立し顯智に一女を配嫁して是を讓り又城州澁谷興正寺を造立すと云然れども眞佛の俗姓前件に云所諸書に顯然たり又佛光寺（いにしへ興正寺と稱す）專修寺の二山は眞佛の開基にあらず高祖聖人御造建の靈場たる事世にいちじるし享保の記何によつてかく傳記せる甚いぶかし○或人の云眞佛上人は實に敦盛郷の一子なり平家滅亡の後は世の聞へを憚りて大内家を假親とし出家ありしとかや是又其理あるに似たれども年代不合の說なれば大に信用しがたし○眞佛一男一女の事享保の記既にかくのごとし然るに遺跡祿には稱名寺の相承は眞佛の徒弟西宮信性房に附屬せりといふいづれか是なるやしらず寶永の記享保の記共に往々誤謬多し見る者取捨せずんば有べからず

宮村御舊跡　聖人御草菴の古跡なり高田より一里はかり山の腰にあり此宮村といへる所に聖人の御隨身大學となんいへる人の子孫今にあるとぞ

新居山稱名寺　西派　下總國結城にあり

以下四ヶ寺とも順拜の路程のみを記す緣起傳說に至りては國分の例に依て其部に出せり

高榮山法得寺　西派　同國佐河野にあり

野田院宗願寺　西派　同國古河にあり

鷲高山勝願寺　東派　同國磯邊にあり

高柳山光了寺　東派　同國中田にあり

●相摸國

千津山弘德寺　西派　相摸國海老郡千津村にあり

高祖聖人上足二十四輩第五信樂房の裔にして下總の國新堤弘德寺同系の寺なりとぞ

臥龍山永勝寺　東派　同國足柄郡倉田村にあり

祥瑞院と號す聖人御眞弟誓海房相承の古院にして關東七箇靈場の其一なり

當院は往昔台宗の靈區なりしが嘉祿二年高祖聖人東國御遍歷の砌しば〳〵鎌倉に往返し給ひ普く群生を御化益有せられしに當寺の住僧竊に聖人の高德を慕ひ奉り深く專修念佛の法門をよろこび終

に精舍を聖人に寄奉りしかば聖人當院に住し給ふ事すべて七年安貞二年より文暦元年に至る當國國府津御勸化の内も多くは當寺におはしましけり又宋朝より一切經を渡せし時執政北條武藏守泰時聖人を招請じ校合の事を屬し奉りしかば聖人すなはち當寺におひて考訂し給ふとかや或曰此時聖人を屈請せしは泰時には非ず子息修理亮時氏なりと然れども時氏卒去は東鑑に寛喜二年六月十八日と記せり聖人御校合の砌は天福元年の事にて時氏卒去より四年の後なれば泰時の請なき事あきらけし

專ら弘法あらせ給ひしに御歸洛の期到來して即當院を誓海房に附與し給ふ爰におひて誓海法燈を相承し當寺中興二代こして相續て眞宗弘通なしけるとかや○靈物本尊面影の如來　聖人當寺におひて自斧を取て彌陀の尊容を作らせ給ふ折から春日明神かたちをあらはし聖人を禮拜し過去七佛の假面一箇を捧げ給ふ聖人これを得てすなはち尊像の面にかけ給ひしより傳へてかくは稱し奉るとかや

聖德太子尊像　聖人の御自作にしていともあらたなる靈像なりむかしは別に太子堂たてりしが中古當寺廢退の折から諸堂大に破損し雨もりて尊像を浸しけるほどにふしぎや高らかに御聲を發し給ひ我に笠をきせてよと宣ふ僧徒等これを聞つけて大きにかなしみおそれいそぎ本堂にうつし奉りしかば是よりして今に本堂に安置せりとぞ

香木切目の枕　これ聖人一切經御校合の砌武藏守泰時献じたてまつるところ也とかや

此外常盤御影と稱す聖人御自作の壽像并に御同作七高僧の肖像等

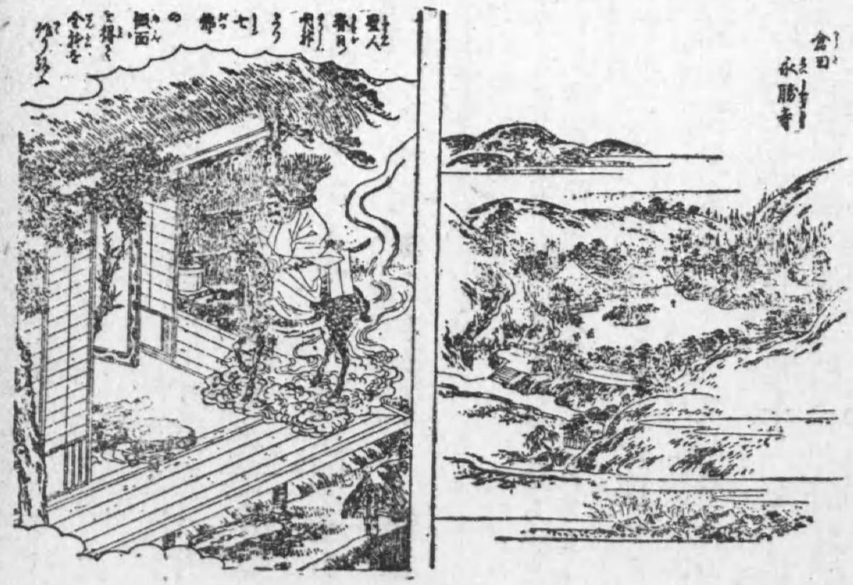
當寺の靈寶たりしが故有て東御本廟へ寄附し奉りしとぞ

荏柄天神　同國鎌倉にあり

當菅廟は後土御門院長享元年二月廿五日太田道灌の本願によりて建立す當社の神寶に高祖聖人六歳の御時自南無天滿大自在天神の尊號を寫し給ひたる所の御眞筆を傳來す

○和田の一黨荏柄の平太なる者は當社のあたりに邸宅をかま

倉田永勝寺



へし故我氏のごとくに稱せしとなり

五明山最寶寺　西派　同國三浦郡三崎野比村にあり

當山は征夷大將軍正二位右大將源頼朝公の御本願にして建久七年草創ありし名區なり始めは天台圓頓の淨刹なりしを關東六老僧の隨一明光上人是を改め我他力念佛の法燈をかゝやかし再び開基あられし靈場也○本堂阿彌陀如來行基菩薩御作　太子堂太子御自作にて南無佛の尊像なり　諸尊堂別堂なり行基菩薩の御作御藏の藥師大日如來觀音薩埵不動明王等を安す是往昔天台たゝし時の諸尊にして月山飯食寺の遺物也と云

享保の記に當院の畧緣起を擧て云明光上人の御事說に區々にして分ちかたつてしばらくこゝにこれを記すのみ其し且享保の記は當寺の緣起によれるをも論說に至つてはつぶさに下條に出す　抑相州三浦郡野比の里高御座五明山最寶寺は征夷大將軍正二位右大將頼朝公の本願として建久七年丙辰草創あらせ給ひ供養の大導師には天台の碩學明光上人をゞ招せられけるこれこの明光上人と申すは其俗姓藤原氏にして大職冠

鎌足大臣の玄孫右大將從一位內麿公五代の後胤和泉の國守信濃守季平より六代の孫頼康の四男也母は右馬頭源義朝の嫡女にして頼朝公には姪たりされば明光世系赫々たる武門に生れ高位高官をも望み富貴榮花の身とも成べきを宿因淺からずして未三五の春の花ひらけざるに世の囂塵を厭ひ忽棄恩入無爲の機に投じ我たつ杣の峯をわけ慈鎭和尙の法窓にいたり師弟の契まめやかにして專學業を修しけるに元來英敏發明にして終に四敎圓融中道實相の眞理をきはめ自利の行德すみやかなれば利他の化益を試んと四明の霞を立出て東關萬里の旅の空にゞ趣きけり爰に鎌倉源二位將軍は叔姪の好あるゆへ明光の碩德大に尊敬なし給ひ即辨が谷に一宇を建立し御座山最寶寺と號し都下の高御座に安置まします行基菩薩一刀三禮の藥師の靈像を以て本尊とし明光を招して開山導師たら

しめ若干の田園をゞ寄附せられける爰におひて明光山號を五明と改め數年の行化をゞなしにけり然るに高祖聖人北越にまし〳〵て專修念佛を弘通し給ふに法聲日々に高くして遠く坂東の地にとゞろきしかば明光安からぬ事に思ひ忽我慢の心を生じ急き越後の國に趣き高祖聖人の禪扉をたゝき兼てもうけし數條の難詰疑問を

野比最寶寺

以て托しかけてゞ挑みける聖人少しもさわき給はず一々渠が機に投じ恰も響の聲に應するが如く法問無盡に應答し給ふ程にさしも碩學のきこへある明光も聖人の高德を計知る事能はず竟に我情の角を折自力難解の法を棄て始めて淨土易往の念佛門に歸入し即御弟子と成りて聖人に常隨し敬重最他にこへたり爰を以て後世渠を呼んで六老僧の第一とはいふなりされは明光其後年を經て五明山に歸院しさかんに他力念佛の妙德を弘通し是よりして台宗の最寶寺一變し終に眞宗の佛閣とは成りにけり後又明光ふたゝひ聖人に隨從し給仕嚴重に怠らざりしが一日聖人明光に仰てのたまはく我今北越東關の間にありて本願念佛の法を弘むるにいさゝかうれひなししかれども關西にこれをほどこさん事其人を得ざれば尤かたし故に今に至て企るにたよばず徒に年月を過せり我汝を得てより

其才德を考るに實に其任にあたれり爾佛恩をかへりみて勞をいとふ事なく速に彼所に至つて弘法せは我本望こゝに滿足すとありけるに明光再三其器にあたらざるを以て他に讓るといへども師命重くして遁るゝ所なく終に西國にゞ趣きけるかくて備後の國山南のほとりに徘徊し往々他力本願の旨趣を勸化なしけるに易行直入の法門末世頑愚の衆生に施し安くしいつしか遠國近里の緇素老若おひ〳〵に馳集り聞法隨喜して法に歸するもの一日に百を以て算ふ爰におひてはじめて彼地に一宇を開闢しこれを光照寺と號す後又同國深津郡常石の邑に隱居しこゝにも精舍を造立して寶田院と號け弘法教化を成す事すべて十有餘年眞宗無緣の西國なるに今は至ざる所もなく大にさかんに行はれける程に聖人これを聞及ばれ喜悅のあまり自ら明光の肖像を畫せ給ひ且渠が俗性の系譜を記して一軸とこしこれを送り給ふとゞ　此二品今に彼國にとゞまれりと云　時に明光洛陽に至りさらに念佛を弘通する事倦ことなし竟に後堀川院安貞元年丁亥孟夏中旬第六日端正にして往生の素懷を遂られしかば　行年六十四歳　即鳥邊野におひてこれを荼毘し遺骨を備後國光照寺におさめ廟塔を建遺教ます〳〵さかんなり去ほどに今の世に至て西國遺弟改悔の言葉にも明光上人出世の恩たる事を加ふと云これ誠に文翁蜀の民に耳目をひらきし功德に比するに豈渠が下たらんや明光始め西國に趣きける時最寶寺を徒弟明故に讓れり明故より九世の後明心寺務たりし時寺を今の野比にうつすこれ舊野比の里は賴朝公より寄附の領地なるが故に第三世明圓の時本尊藥師の靈佛を彼地にうつし一宇を建立してこれを月山飯食寺と號せしが九世明心の代鎌倉の地戰場と成り兵革の災ひしば〳〵なれば終に大永元己年辨が谷の最